THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿六年　第三號

第二百六十四號

國民の玩味すべき書
活ける精神修養資料

殘部僅少
維新志士遺芳帖

一世の人心に深甚なる感動を與へ事畏くも　天聽に達して侍從御差遣の光榮をさへ賜りたる國民新聞社主催維新志士遺墨展覽會陳列の中特に門外不出の珍品四百十七點を擇び最新式寫眞金屬版を以て秋毫差はず之を縮製し一々之に小傳及び解說を付し最も富麗高雅の裝釘を施したる縦一尺二寸横九寸の大版全二冊

上製特價金拾貳圓
特製特價金拾五圓
外に郵稅内地金五十四錢
朝鮮、臺灣、清、金七十錢

全部完成
大久保利通傳

本書は最も信憑するに足るべき公の史傳の始めにして又其の終りたり一度之を繙けば維新の大舞臺に演ぜられたる曠古の大活劇は宛ながら活動寫眞の如く諸君の眼前に展開し來るべく其の關渉する所の廣く且つ大なる如何なる方面の人士も必ず一讀すべき近來の快著也

布裝釘全四冊
定價金各二圓
郵稅各十六錢
附錄本月中出來

東京神田表神保町
同文館
振替東京一三五番

實業之日本

三月一日發行 第拾四卷 第五號 一冊郵税共拾貳錢 半年分壹圓五拾五錢 一年分參圓

▼七十五歳の余が劇務に迫れて疲勞せぬ秘訣……大倉喜八郎

▼名士は此くして不良兒を作る……本間生

▼新元氣を起す法……醫學博士 二木謙三

◎居なくてはならぬ人……農學博士 法學博士 新渡戸稲造

▲余が今回歐米にて實見せる壯大なる水電事業 芝浦製作所技師 岸敬二郎

▲就職難救濟の一機關たる勞働紹介所設立急務 東京高等工業學校々長 手島精一

▲往古より同化力に富む我國民性 實業之日本社長 増田義一

▲我國の發達が著しく鈍つて來たのは何故ぞ 男爵 澁澤榮一

▲東洋の一大工業地たらんとする大炭坑と大鐵田 大倉組取締役 大倉粂馬

◎新に證明せられたる日本人の勇氣……大隈伯爵

⊕東京方面にて儲かる土地は何處か 東京建物會社取締役 藪田岩松

▼蠶業界の指導者たる上州の高山社……楚水生

▼熊本縣出身の實業家評論……

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替口座三二六番 賣捌全國書店

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る御旨附記を乞ふ

平田篤胤全集

菊版洋裝全十五册
紙數一册八百頁以上
正價一册金貳圓
全十五册 金參拾圓也

逘本料一册市内金四錢内地金十二錢臺清朝地方金三十錢▲見本入用の御方は金貳錢御逘附有之度候也

平田家との關係上申込部數だけ印刷**大々速急に申込置**なきときは後悔すとも及ばず此好機を逸せず速に申込を乞ふ**平田學會**

入會者には特待す規則入用方要二錢

平田篤胤翁は本居宣長翁の後を承けて**國體**を講明し**大道**を宣揚して大いに**國民の自覺**を喚起し**忠愛の精神**を鼓吹せられたり**本全集**は翁の著作悉皆網羅し**井上博士角田宮司**等の校訂を經たる者也**本書**實に**政治道德宗教**等の事に志ある人士の文庫に缺くべからざるものなり**此機**を逸せず希くは一本を備へられん事を。

隨筆珍本 さへづり草

雀庵藤原長房著 （天下唯一の珍本たり）

むしの夢の卷既刊
定價一册金六拾錢
逘本料金八錢

文學博士井上頼圀先生珍藏 ＝次卷松の落葉の卷三月發行以下逐次發刊す

本書は和漢の故事熟語俗語の解俳諧俳人の傳日常の見聞珍書の拔翠赤穗義士逸話芝居俳優の傳記等より風俗神祇釋敎地理通貨文學歌學等凡て百般に亘りてものしたる者なれば讀書社會に向ての裨益多大なり。

發兌 東京麹町區飯田町五ノ八番 振替東京壹五四四四番 **一致堂** 賣捌 東京堂、上田屋、至誠堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

◀神木鷗津先生著▶

●畫を玩び畫を學ぶ者は必ず一讀すべし

妙蹟圖録

●全十卷合本五冊 ●製本和裝美濃倍判帙入 ●定價和紙刷金四十五圓 ●郵税金六十錢 ●洋紙刷金二十六圓 ●挿畫半切寫眞コロタイプ版二百廿 ●郵税金六十五錢

●本書は模範古畫の寫眞帖也
●數十年來同好の討究の結晶
●毎畫典故正しき賛録を載す
●佳畫に親めば贋作に欺れず
●全部完成に付取揃再版發行

東洋畫解

◎全一冊 ◎定價六十錢 ◎郵税六錢 ◎美本和裝和紙四六判 ◎挿畫廿四 ◎二百頁

◎本書は畫道の神髓を闡明す
◎當世畫論家の邪説を排斥す
◎古畫を評し且國寶を痛論す
◎鑑定法細論し學畫法詳論す
◎名畫の縮圖と和漢年表あり

古畫眞髓

●全一冊定價金十五錢 ●郵税金四錢 ●製本洋紙刷三六判美本挿畫十六 ●八十頁

●簡明適切に古畫の精を説き
●時事新報に連載せる講話也
●ポケット用にて携帶に至便
●素養なき人も古畫を知る可
●清新の趣味は本書に養はる

和漢古畫妙蹟圖傳

◎全二冊帙入 ◎定價金一圓 ◎郵税金十二錢 ◎製本和裝和紙四六判 ◎挿畫六十

◎妙蹟圖録の要領本書にあり
◎挿畫の外妙蹟圖録と同版也
◎和漢六十畫家の縮圖を載す
◎參考書畫譜七十種を紹介す
◎小形にて閲覧便利價も廉也

●繪畫の妙味は畫理を悟るに隨ひ增大す

發賣 東京大阪京都 丸善　東京日本橋 六合館　東京本郷湯島 畫報社　東京淺草 淺倉

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新文章を研究せんとする者の好伴侶

文章世界

三月一日發行　第三號　正價廿錢　郵稅二錢

●漢學と文章　志ある青年の爲めに……山路愛山

▽島崎藤村氏の小品……水野葉舟

▽當年の文章家（月旦）……天王星

▽靜物畫の面白味……高村光太郎

▽雜誌記者月旦……XYZ

■インキ壺……田山花袋

■短篇小說……小山內薰

▽十一日の朝（小品）……萱野二十一

▽圖書館の人々……九紫火

▽ロシア文壇に於ける女流作家……昇曙夢

▽新文範數項……

▽新傾向句……

●弃（翻譯小說）……ゴンクウル

東京　博文館　本町

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

中央公論

春期大附錄號豫告

我「中央公論」は例に依て四月一日を以て春期大附錄號を發行すべし。例に依てとはいへ、其内容は年毎に改善せられ、今や我誌の附錄號は、論壇文壇の最高位を占めて、之を讀まざるを以て讀書子の耻とするに至れり。而して今其内容の主もなるものを擧ぐれば、論文には百五十頁に亘る

立國論……**朝野名士廿餘氏**

あり。是れ現今第一流の政治家、學者、論客が一農工商武孰れを我邦立國の基とすべき乎」の大問題を討議したるもの、苟も我國運の將來について心を勞する人士に向て是非共一讀を乞はざるを得ず而して小說には

田山花袋　**永井荷風**

の二氏に寄稿を依賴したる外、二百枚以上の長篇小說

犧牲（續篇）……**島崎藤村**

掲げらるべし。是れ本誌新年號に出でゝ、辛亥文壇劈頭の大作として世評嘖々たりし「犧牲」の續篇にして、三吉、お雪、お俊、正太を初め、作中の主もなる人物の運命は此篇によつて遺憾なく描寫せられ、讀み畢つて深く、廣く人生の眞相を究め得たるの感切也。前篇を以て慊らずとせし讀者と雖も、此篇によつて、此作の眞價の大なるに驚嘆すべし。乞ふ鶴首して本號の出づるを待て。

中央公論第廿六年第三號目次

▲公論

紀元節の大詔
政府は有力となれり……社論……一
日本獨特の國家主義……河上肇……一七
我邦の生活問題……毎月坊……四三
佛國大革命の巨魁と社會主義……文學博士　箕作元八……四七

▲說苑

碁の名人……大谷繞石……五五
島の人……黑頭巾……六二
歐洲の美人……林田龜太郎……六六

西園寺侯論
尾崎行雄……七二
中村彌六……七四
衆議院一政客……七七
巖谷小波……七八
田川大吉郎……八〇
内田魯庵……八三
草莽の人……八六
伊藤痴遊……八七
靜觀居主人……九一

▲小説
赤い鳥……鈴木三重吉……九三

▲詞藻
和歌……尾上柴舟選……一五三
俳句……高田蝶衣選……一五九

▲評論
海外近事評論……懷沙隱客……一六一
先づ冷にして而して後に熱せよ……江塔子……一六六
新刊批評數件……一六九

オートストラップ

自働研安全剃刀

君はナゼ小汚なく鬚を生やしてる？

兒供でさへ安心して造作もなく使へて便利で愉快で時間的にも經費上にも經濟な**オートストラップ安全剃刀**あるを君は知らざるや

一度でも**オートストラップ**を試みたる諸君は寢るにも起るにもツイ二三日の旅行にも**オートストラップ**を離す事が出來ぬ

オートストラップは便利と安全と清潔と愉快とを與へる文明の利器也

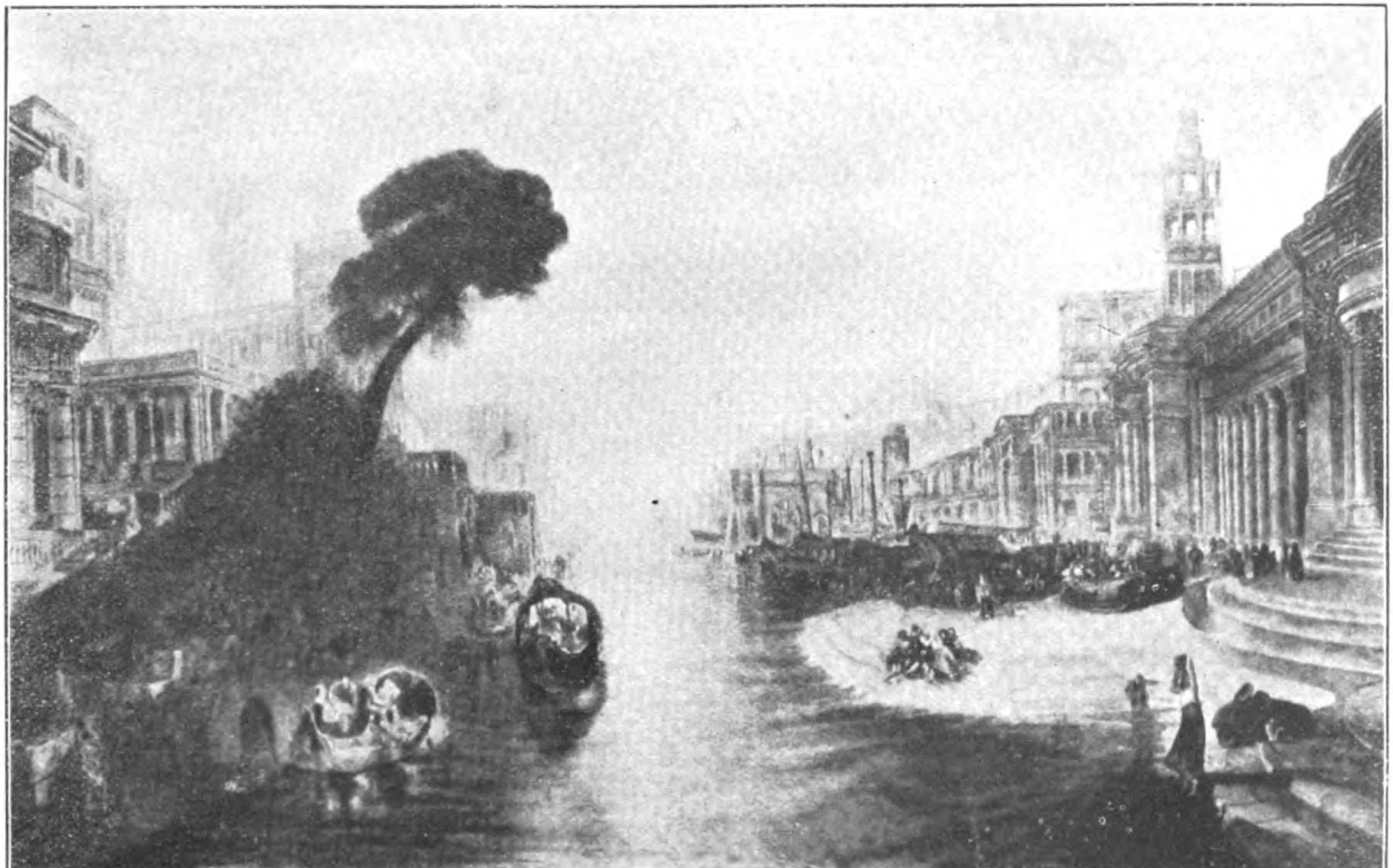


（説明書送呈）

革砥及換刃付
壹組金拾壹圓五拾錢
送料拾貳錢　臺樺三十錢　朝清二十五錢

東京日本橋通
丸善株式會社

DIDO'S FLEET AT CARTHAGE



BY J. M. W. TURNER

中央公論



第二十六年
第三號
第二百六十四號

紀元節の大詔

（一）

今年の紀元節當日に、最も注意すべき官報號外は配布されたり、曰く「今十一日桂內閣總理大臣を御前に召させられ左の勅語あり併せて施藥救療の資として金百五拾萬圓を賜ふ旨仰出されたり」

朕惟ふに世局の大勢に隨ひ國運の伸張を要すること方に急にして經濟の狀況漸に革まり人心動もすれは其の歸向を謬らむとす政を爲す者宜く深く此に鑒み倍々憂勤して業を勸め敎を敦くし以て健全の發達を遂けしむへし若夫れ無

告の窮民にして醫藥給せす天壽を終ふること能はさるは朕が最軫念して措かさる所なり乃ち施藥救療以て濟生の道を弘めむとす玆に內帑の金を出たし其の資に充てしむ卿克く朕か意を體し宜きに随ひ之を措置し永く衆庶をして賴る所あらしめむことを期せよ

皐謨の宏遠なる、常に政事家の少くも二十年前にあり。吾人は捧讀して感激に堪えず、謹んて之を釋明して以て汎く江湖の諸君子に告んと欲す

（二）

大詔の前半に『世局の大勢に随ひ國運の伸張を要すること方に急にして經濟の狀況漸に革まり』とあるは、實に無限の世相を觀徹し玉へる所以にして、吾人臣民の三嘆を禁ずる能はざる所とす

前世紀の後半以來、機械の發明は工業に革命を與へ、工業の革命は經濟の狀況に革命を與へたりき、今より約五十年前に在て、米國に於ける農業機械の發明は凡そ勞力の五割を省約し得たりしといふ、曾て一人一日五足をさへ縫ひ得ざりし靴工は、グードエルス機械の發明に由て二百五十足を縫ひ、マッケーの機械に由て三百足を縫ひ得るに至り、曾て熟練なる職工十七人にて一週間を費して辛ふじて五百ダズンを製し得たりし箒は、今や機械に由て、僅々九人にて一週間を要すれば裕に一千二百ダズンの箒を製するに至り、彼の紡績機械の如きも、昔は一時に一臺を運轉するに過ぎざりしが、今は二人にて一分

時間に數千の回轉を爲すもの凡そ二千錘を運轉し得べく、曾て一人五十六時間を費して三十二番の綿糸五束を作れるに、今は一人にて二小兒を助手として五十五束を作り得べし、十數年前に於て使用せし機械丈けの力に代へんと欲せば、五千萬人以上一億人の勞働者を要する計算なりしといへり、又英國に於て今日製産せらるゝ綿糸綿布を昔時の手工を用ゆるとせば、殆んど十七億人の勞働者を要すべし、百年前には一人一日にて辛ふじて四千八百本のピンを製造せしが、今や機械を以て一人一日百五十萬本を製出するに至れり

斯く機械の發明せらるゝに從つて、製産高が十倍し百倍し千萬倍するに拘らず、人工を省約するがために勞力の需要を減ずること著るしく、無職の勞働者を出すこと少からず

且つ機械の發明に由て、勞力の需要を減ずるに從ひ、二個の著るしき變化を生ず、其の一は家庭職業の移りて工場職業となり、小工場の漸く大工場に併合せらるゝこと也、其の二は資本家の利益を得ること比較的に大なるがために、貧富の懸隔を甚だしからしむること也、大機械は大資本に由て大工場に据付けらるゝの外なければ也、職工の賃錢漸く騰貴するも、到底幾割幾分に過ぎず、然かも製産高の十倍し百倍し千萬倍するに從つて資本主の利益多きこと言を俟たず、資本主多くの利益を得れば、貧富の懸隔益々甚しからざらんとするも得べからざれば也

貧富の懸隔甚だしくして、富者が其の生活を豪華ならしめて世に驕るに從ひ、貧者は彌よ生活に窮して竟に人を恨み世を怨むるに至ると、洵に已むを得ざる勢ひとす、人心險惡に趨かざらんとするも能は

ざるのみ、然れども貧富の懸隔甚だしきを忌みて之を制止せば勢ひ製產を減抑して資本主の利益を殺ぐの外あらず、斯くすれば國富自から減じて、列國の競爭に堪ゆる能はざらんとす。今や列國競爭の勢ひ急なるが故に、國家の威力を支持せんとすれば、必らずや武備と富實とを兼備せざる可らずして、製產を增加して國の根本を培ふと最も缺く可らずとす、即ち貧富の懸隔を忌みつゝも、之を奬勵するの外に策あらずとす

然れども貧富の懸隔は一方に之を奬むると共に、其の結果に由る弊毒は努めて之を避くるの外あらず、是れ英獨諸國の政治家が夙に肝膽を碎く所にして、大詔に所謂『世局の大勢に隨ひ國運の伸張を要すること方に急にして經濟の狀況漸に革まり』と宣ひ『政を爲すもの宜く深く此に鑑み倍々憂勤して業を勸め教を敦くし以て健全の發達を遂げしむべし』と戒めさせ玉へる所以ならずや、彼の社會主義共產主義の如きは、貧富の懸隔より生ずる一種の弊毒にして、其の進んで邪路に危險に陷ゐるものに至ては、竟に無政府主義の如き國家社會の破壞を敢てせんと欲するに至る、列國の識者が茲に憂慮し、而して聖意軫念し玉ふ所亦茲にあり、我が官民如何ぞ感奮興起して豫め其の弊毒を避くる所以を講究せざる可けんや

（三）

獨逸が法律を以て勞働保險法を强行し、勞働保護法を實行し、英國また勞働者養老其の他の諸法律を設定して、所謂社會政策に重きを措くは、文明の餘弊たる貧富懸隔より生ずる弊毒を匡救せんと欲する

に外ならず

我が國の小作人の地主に於ける、又大工、左官、石工、綿打、染物其の他諸職工の徒弟の親方に於ける、共に殆んど父子兄弟の關係にあり、溫平たる情誼の脈々として相通ずるが爲めに、相扶け相養ふの美風嚴乎として存し、今に至つて多く渝る所あらざるに似たり、啻だ其の師弟間に止まらず、同業の間に在ても相睦み相扶くる美德ありて、今も尙ほ緩急相助け、安危相俱にする傾向の存するにあり、然れども大機械を有する大工場に至つては、資本主と多數の職工と、純乎たる雇主被雇人の關係にありて、歐米の勞働者と何等の異なる所あらず、勿論歐米の職工の如く、未だ甚だしく生活に苦まざると、淳樸溫順の德あるがために、曾て凶險暴惡なる事象を看るに至らずと雖も、食物の騰貴に從つて漸く生活の困難を愬ふるものを出すと共に、一方には又職業に就く能はざるものを輩出し、或は勞働者の老ひ若くは疾みて苦むものをも生ぜば、凶險なる思想また或は傳播して、大詔に所謂『人心動もすれば其の歸向を謬まらむとす』るに至るなきを保せず、是れ經世家の深く考へ細かに慮かるべき所とす

我が國の政事家にして歐洲に至るもの、曾て英獨に於ける社會政策の實際を研究せず、唯だ陳腐なる政黨對抗の舊歷史を視て、而して現に活ける政治問題の實相を極めず、或は武備の嚴と市設備の完全とに驚心するも、曾て勞働者救濟の實況を視ざるは、吾人の夙に恠む所なりき、蓋し國情自から然ると雖も、我が政事家が朝野を通じて社會政策に冷淡なりしは、識者の顰蹙を禁ぜざりし所とす、今や大詔煥發先づ第一に社會政策に奬勵すべきことを誨へさせ玉ふ、皇謨宏遠にして常に政事家に先つと二十年前

なるは、深く欽仰せざる可らざる也

(四)

大詔を發し玉へる主旨は、一面爲政の局に立つものに誨ゆるに、社會政策に注意すべきことを以てすると共に、無告の窮民の疾みて醫藥を得ず天壽を終ふること能はざるを恤みて、施藥救療の方法を講させ玉ふ大御心に出づ、思ふに彼の小作人たることをすら得ざる小農を始め、職業を得ず、假令職業あるも生計に窮して妻兒をすら養ふ能はず、或は全く扶養者を有せざるが如き職工等の、疾みて醫藥に就く能はざるもの都鄙を通じて少からざるべし、此等の細民は世の最も不幸にして、最も憫れむべきものたり、先づ之を救ふて天壽を終へしめんとするは、仁の最も大なるもの、聖慮の玆に及べるは、臣民の齊しく感激する所なるべし

吾人の知る限りを以てすれば、首都に於て貧民に施藥救療するもの、唯だ富豪三井家の建てたる慈善病院の一あるのみ、彼の赤十字社の如き、國家萬一の際にのみ活動するに止めず、平時に在ても其の一部を割て施藥救療に力むるを要せずや、或は國費を以て施藥救療するの非を唱ふるものあり、以爲らく、租稅は細民と雖も分擔する所、之を以て施藥救療するは、猶ほ右手の物を奪ふて左手に與ふるに異ならずと、若し然らば勞働保護、勞働養老年金の如き、國費を以て寸分たりとも補助すべからざる乎、英國政府の勞働者養老年金の如き、全く不條理のものと稱すべき乎、租稅は富者多く之を擔當して而して細民に及ぶものは少し、多く富者より取りて而して細民のために支出するは、即ち社會政策の骨髓ならず

や、貧民の施藥救療に國費を投ずるに何の不可か之あらんや
多くの地方には、縣立病院あり、郡にも亦郡立病院あり、大部分縣費郡費を以て之を支持す、此等諸病院が主として貧民に施藥救療せさるは、普通醫師の營業を奪ふに齊し、宜しく方法を一變して、主として貧民に施藥救療するを目的と爲さしむべし、之に御內帑の御下賜金と國庫金とを分ちて、更に施藥救療の範圍を三家村裏の隅々までに普及せしむるも亦一手段なるべし、國民黨は國費一千萬圓を之に投ずるの建議案を衆議院に提出する意向なるやに聞く、此の一千萬圓を御內帑御下賜金に加へ、之を基として汎く郡部に分配し、以て縣立郡立の諸病院幷に赤十字社等をして施藥救療に鋭意せしめば、其の効益豈少小ならん乎
富豪の徒が多く貲を釀して救貧防貧に鋭意すべきは論なし、彼の大名華族の如き、又分に應じて舊領地に慈善病院又は養育院を建設すべし、自力或は足らずんば、舊領地の富人を勸誘して出貲せしむるも妨げず
國家も、華族も、富豪も、皆聖旨の貫徹に努むるがため、其の最善を盡すべし、是れ社會政策の第一歩也、然り、極めて仁慈にして、又極めて善良なる社會政策の第一着也、宏遠なる大御心に副ふ所以也

（五）

大詔に『業を勸め敎を敦くし以て健全の發達を遂げしむべし』と宣べさせ玉へるは、亦官民の眷々服膺すべき所とす

吾人の卑見を以てすれば、地主小作人、資本主、勞働者の關係を一層圓滿ならしめ、勞作より生ずる利益を割きて、勞作者にも分與するを要す、斯くして双者の利害損得を一致せしめば、益々其の情誼を濃やかならしむるに止まらず、一方には能く製産額を增加すると共に、一方には貧富の懸隔を聊かながら避くるとを得べきにあらずや、例せば、資本主の所得を年一割に當るとせば、此の內三分四分乃至五分を割きて勞作者に分與するとし、分與の一部を積立てゝ、勞作者救濟資金とも爲さしむべし

次には勞働者保險法、勞働者養老法をも設くべし、勞働者をして消費組合を設けしめ、資本主之を保證して、其の必需品を廉價に購買するとを得せしむべし、政府は又關稅法を改良し、又運輸を便にして以て食物の價格を廉ならしむるを努むべし、

農家には又宅地內の藪叢を拓きて瘴癘を掃ふと共に、其の土地に適當且つ有利なる果樹其の他を植付けしめ、或は養魚養鳥養獸を奬勵し、又地方に適當有利なる蔬菜を植付けしめて、以て利益の增進を計るべし、廢物利用の方法に心を用ゐ、農閑時の手內職を授くるにも努むるを要す

學校敎育に至ては、殊に剛健にして淳樸なる氣風を養成し、忠實友悌の德を修せしむるを主とすべし、徒らに空疏の理に走るは邦人の弊にして、常識の缺乏は殊に今の學校敎育の流弊也、若し夫れ中學敎育に至ては、到る處生徒の同盟して校長敎師と訌爭するあり、弊害正に極まる、最も發達の旺盛なるべき靑年を敎ふる中學にして、却つて斯の如き風氣あるは、敎育家の大に心を致すべき所にあらずや

新聞紙の如き社會の風化に大影響あるも、また强盜强姦殺人の如き凶事をのみ誇張し布衍して俗間の

好奇心に投ずることをなさず、彼の旌表せられし孝子貞婦を始め、敎化產業に功績あるがために、藍綬褒章を授けられし人々の人物事業等を詳報して、以て一般の氣風を良導すべし、善事を誇張過大にするも弊あらざれど、凶事を針小棒大に報ずるは害あつて利なし、識慮ある新聞記者は深く心する所ありて可也

大詔の宏遠なる、申すも畏れ多し、政事家は勿論、敎育家、學者等凡て社會の先覺たるもの、皆心を齊しくして、以て聖旨の透徹に忠なるべし、是れ我が日本をして、世界最優の國たらしめ、我が同胞をして、人類中の最も幸福なる者たらしむる所以ならずや

政府は有力となれり

（一）

政府と政友會と協同せるは、政局に於て頗ぶる興味ある現象とす、吾人は今其の徑路に就て一瞥を與へん

伊藤公の薨後、歐洲人の多數は概して日本の前途を危惧したりしものゝ如し、彼等は以爲らく、伊藤公は世界的政事家にして、又實に文明平和主義者なりき、日本には敬重すべき好軍人多きも、政事家は多からず、公亡き後、日本の政局は武人たる山縣公桂侯一派の掌握に歸すべく、政治の傾向勢ひ武斷に流れざるべからず、好戰の國民を率ゆるに武斷政事家を以てす、其の武事或は看るに足らんも、平和文

明の政治に至ては、幾んど見るべきものなからんとす、其の對外政策に於て最も然らざるを得ずと

此の危惧は素より日本の眞相を知る者の與みせざる所なるや言を俟たず、然かも多數は實に斯く觀じたりき、日英同盟締結以後、殊に日露大戰役後、政界に於て地位勢力を一變したりし伊藤公に對する斯る觀察の謬れるは多言を要せず、公や其の人物技倆に於ても、亦格外に買被られたる處多きも知れず、何ぞ況んや死者に對しては生時の冷罵熱嘲を飜然として忘却し、有らゆる頌辭と讃美とを柩前に捧ぐるが日本新聞紙の一大特色なるをや、曾て公を罵りて好色無責任の老翁と爲せし論者も、死後の公を許して忠誠無二の大政事家なりと做したりき、一般の外國人が公を買被り、而して公亡き後の日本の政局に掛念したるも無理ならずと謂べきのみ

此の爲體に心外の感を爲さゞるを得ざりしは第一に桂侯ならん、次には西園寺侯ならざる可らず、二侯は共に日本の二大政事家として政局を擔任する自信を有し、恰かも天下の英雄唯だ公と操とのみの概ありたれば也、二侯の此の自信は、其の實大なる反撥性を有すと雖も、又極めて和合すべき資質を有す桂侯は思ひの外宏量にして而して調和の特質を有し、又西園寺侯は洒脫にして物に拘泥せず、而して蒲柳の質動もすれば政友會てふ一大黨を統率して惡戰苦鬪するが如きは、其甚だ好む所にあらざれば也

吾人の聞く所によれば、伊藤公の薨後間もなく、兩侯は會見の席上、世界に對して相俱に國家のために盡瘁せんとを語れりといふ、情意期せずして相共に許せる、恐らくは茲に胚胎せし乎

桂侯が其の舊主家たる毛利家の公達中、最も穎敏にして有爲なりと聞えし八郎氏を推擧して西園寺侯

の養嗣子たらしめ、之を我が秘書官として常時左右を離さず、以て政務を視習ふて他日の素を成さしむると共に、屢養父侯と往返せしめて、大小の機務を通ぜしめしに視るも、兩侯の間に脈々たる温情の相通ぜるや略々察知すべきのみ

（二）

殊に桂侯は政事家として伊藤公の後繼者を以て自任したりき、出身の系統は素より純山縣系統なるも、其の政治上の識見に至ては、寧ろ伊藤公に近く、且つ最も能く之に學べるが如し、故に公の作れる政友會の如きも、公亡き後、侯にして望まば、實に總裁たると容易なりとす、今の政友會は到底宮中に御信任深き西園寺侯に離るゝ能はずと雖も、西園寺侯惜むらくは健康足らず、而して政黨首領として甚だ鬪志なし、故に桂侯にして代るを諾せば、西園寺侯は勿論、總ての政友會員等履を倒まにして歡迎すべし、桂侯果して此の心あるや否や、侯に此の心を生ずるに至らんとは、西園寺侯を始め、少くも原松田兩氏の心私かに期待せし所なるべし、此の事情は兩者の情意投合を來し易き一因由なるや多言を要せずとす、但だ軍人として山縣公の後を繼ぎ、政事家としては伊藤公の後を受け、財界の勢豪家としては井上侯の後となり、所謂長州三尊の彩光を一身に背負はんとして一大元老たるを豫期せる桂侯が、眼前に元帥の榮職に任ぜらるゝを知りつゝ、果して腰邊よりサアベルを解くべきや、否やを疑へるのみ、此がため或は寺内子に走らんとし、或は山本伯を迎へんと欲せしのみ、政友會が釋然として桂侯と情意の投合を視にる至れる、決して偶然ならじ

吾人は政友會と大同俱樂部の相包合するの自然なるを論說せると一再ならざりき、他なし、二者共に積極主義にして又實際主義なれば也、事功を尙びて空名を卑み、實を重んじて理に偏せざれば也、大同俱樂部即ち今の中央俱樂部の事實上の持主たる政府と政友會の協同せる、自から緣ありと謂ふべし、況んや兩者共に情意投合を速むべき事情の更に外にも之ありしをや

（三）

條約改正は政府當局の大責任にして、又實に大難事也、殊に英國との關稅問題の支吾するにあるに於て、政府が假令擧國一致にあらざるまでも、有力なる後援を有して寸毫も議會に內顧するの憂なく、專心に外に當るの必要なるよ、智者を俟つて知らざる也

米國に對して我が强くして而して親き情誼を表彰せんにも、動もすれば我れを侮蔑して法外の擧動に出でんとする淸國に對しても、今日の場合政府が寸毫も內顧の掛念なく、幾んど擧國一致の實を示すまでに有力ならんとは、今の政府の最も切實に感知したる所ならざるべからず、政府旣に貴族院に拔く可らざる勢力を占むる以上、衆議院に多數を制すれば則ち足る、新たに衆議院にさへ多數を制すれば、則ち幾んど擧國一致に近き强力なる後援を得べし

啻だに外交上に止まらず、財政上其の他にも、議會に掣肘せらるゝ掛念なくば、政府は十分に其の所信を貫徹するを得て、所謂大難事も成し得て、能く其の責任を盡すに足らん、政黨は理にあらずして勢ひ也、現に議會に其の勢力を揮ふ以上、之を眼外に措く能はず、必らずや其の力を善導し利用すると時

務を知る者の當さに努むべき所とす、桂侯が斷々乎として政友會と協同一致せる、意主として此がためならずや

(四)

凡そ政事家は其の第一の策にして成らずんば、第二の策に由るの用意なかる可らず、義經型の政論家は、或は梶原式の逆櫓案を嘲けらんも、眞の政事家が國事を擔當して過誤なきを期せんには、第二策以下は勿論、第三第四第五の策も亦蓄へざる可らず、所謂多算を以て成功を期せざる可らざる也

桂侯及び其の帷幄の策士は、中央倶樂部を部下とし、或は國民黨を懷柔し、或は政友會の一角を突崩して以て政黨操縱の功を奏せんと期せしが如く、桂侯等が、一月下旬までも拱手して政黨の爲すがまゝに放任し、夙くより政友會に握手を求めざりしは其の一證ならざらんや

國民黨には政府と親近せんと欲するもの實に多かりき、彼の犬養氏と雖も進んで然かせんとせし信ずべき理由あり、其の曾て三税廢止論を抛ち、海軍擴張を唱へしが如き、豈政府と主張の多く逕庭なきを暗示したるものにあらずや、桂侯等も亦仙石其の他の諸首領を通して、國民黨を左右すべき希望を繫げるに似たり、然るに國民黨が其の一月十九日の大會に於て、廣軌案を否決するや、實は之に由て政友會を促して同じく廣軌案に反對せしめ、大に政府を窘むると共に、政友會と政府と衝突せしめ、己れ乘じて以て爲すあらんとせし機略に出てしといふ、吾人は此の觀測の悉く中るや否やを確言する能はずと雖も、國民黨の策士中には、之に由て政府と政友會との衝突を激甚ならしめて以て政局に紛更を生じ、其

の間機を視て飛躍を試み、以て政府とも握手の時あるべきを期せしものあるを疑ふ能はず

然れども桂侯は以爲らく、國民黨が仙石氏等の諸首領會議に於て、委員を擧て廣軌案其のものを審査するに決定し置ながら、翌日の大會に於て咄嗟に之を反覆したる不信義に徴するに、國民黨到底事を共にするに足らずと、是れ豈斷乎として竟に政友會と協同せる近因ならずや

蓋し議會に於ける形勢を視るに、政友會員等の攻擊の鋒甚だ鋭利にして、動もすれば全然政府反對の側に押並ばんとする形勢あり、國民黨の不信果して恃むに足らずとせば、假令政友會の一角を突崩し、又國民黨中の一部を招來するも、之を中央倶樂部と合して幾んど百三四十人を出てざらん、是れ徒らに政戰を混亂せしむるのみ、勝敗の數に於て獲る所なきや明白也、寧ろ年來の情誼ある政友會と握手するの智なるに如かず、之と握手して而して中央倶樂部を加へば、衆議院の形勢大に定まり、國民黨及び無所屬の一派屏息して一事を爲すに足らず、所謂擧國一致にも近き有力なる後援を作る、之に優さるの途なしとは、桂侯等の卜定せし所なるべし

思ふに桂侯等が中央倶樂部を提げて政友會と提携以上の擧に出てしは、難を避けて易に就ける也、危きに遠かりて安きに近ける也、利害得喪の打算に明敏なる桂侯の智は、玆に至つて又十分に發揚せらる

（五）

政友會に至ては、更に情意投合を歡迎すべき理由を有す

伊藤公薨後の政友會は、最も悲觀すべき境遇に立てるもの也、西園寺侯の宮中に於ける御信任は素よ

り比するもの莫しと雖も、侯以外には未だ大臣として御信任を完ふし得べきものなきこと其の一也、隨つて宮中にも、軍人中にも信用を得るに由なきこと其の二也、假令萬一政府に立つことあるも、桂侯等の意思に反きては到底貴族院の防阻を免かれざること其の三也、若し政府と從前通りの妥協を成さん乎、益々民心を倦ましめて人望を失墜する虞あること其の四也、若し政府と血戰せん乎、直ちに其の一角を衝崩されて、多數黨たる實を失ふと共に、益々其の威力資望を減ずること其の五也、現狀を維持して暗に政府の反對側に立たば、來るべき七月の府縣會議員改選期に、容易ならざる打撃を受けんこと其の六也

故に政友會は、桂侯若くは其の一味と握手し聯合するにあらざれば、全く政權を得ること能はざるのみならず、進まんとして進む能はず、退かんとして退く能はず、戰はんと欲して戰ふ能はざる境界にあり、其の苦衷や實に察すべき也

諸領袖の輩が、時々政府反對の口吻を使ひ、時には國民黨と一致するの姿態を暗示せるも、畢竟政府を促がして情意投合を斷ぜしめんとするのみ、然らずんば餘儀なく國民黨と聯合して一大苦戰を試みんとするのみ、然も前者が其の歡迎する所にして、後者の已むを得ざる窮策たる論なきのみ

政府にも、政友會にも、共に梶原式の逆櫓案はあり、然かも共に幸ひに其の順にして而して利なるものを得たり、政友會員が抃舞して政府を迎へしも其の所也、何ぞ況んや此の情意投合は桂侯よりして熱心に之を求め來りしものあるをや

西園寺侯は、此の情意投合を歡迎し、桂侯を頌するに識度博大なる讃辭を以てし、而して桂侯は西園寺侯の大事を立談に決せる剛斷果敢を激稱し、西園寺侯の識度宏遠にして欺むかざるの致す處、其の人物實に伊藤公の上にある數等なりと許せりと聞く

それ恐らくは兩雄の肺肝より出てし評言なるべし、從て兩者の間に誠意の溢るゝや疑ふの餘地あらず

兩雄の誠意ある斯の如しと雖も、兩雄の身邊を四周するものにして迭ひに策を弄し、互ひに利害を計較して進止を爭はゞ、其結果未だ俄かに測るべからず、桂侯の大浦男の質問に對する、西園寺侯の原氏の質問に於ける、共に辭色を勵くして之を抑へしといふ、此斷乎たる意氣は、果して永久に相渝らざるや否や

情意投合の結果として、桂侯は明白に其の政黨に對する一視同仁の標榜を撤去したり、是れ果斷也、而して明智也

政友會の意氣盛滿なるに對して、看るも慘なるは國民黨也、爾來表に硬論を主張するも、裏に紛爭を絶たず、其の綱紐漸くにして解弛し、幾んど收拾すべからざらんとするは、寧ろ憐む可らずや、政局の事、一歩を過れば則ち斯の如し、利害得喪洵に然る也

（七）

吾人は政府と政友會との協同に就て多く喜憂する所あらず、唯だ如何なる場合にも、强力なる政府を必要とするが故に、寧ろ之を歡迎す、中外の大機を明快に運轉するもの、强力なる政府にあらざれば能はざれば也

願くは政友會善く政府を輔け、而して政府は其の最善の力を盡くして以て中外に爲すあらんことを、公平なる國民の希望は玆に在り、然り、是れ國民の最も眞率なる希望也

公論

日本獨特の國家主義

河上肇

(一) 吾國目下の思想界

東京を去りてより早く三年にも爲りぬ。銀座日本橋通は固より、嘗て住ゐたる駒込淀橋のあたりも、こゝ數年の間如何に變りたるやらんと思へど、たまに上京するも久しく滯留するを得ず、刺激多き帝都の盛觀も今や殆ど忘るゝばかり也。只だ時折大阪に行き、停車場を下りて右に曲れば、高等有料便所と云ふがあり、白き板に大便三錢小便二錢などゝ掲出せるを見て、さては脫糞放尿にも金の要る世の中とは爲りたるかと、日本文明の進步の著しきに驚かるゝ位の事にて、世相の變、目に睹ること誠に稀なり。平生多く書齋に閑居し、古人の議論を讀み古代の事跡を尋ぬるに忙くして、日々の新聞紙も見ずして終ること稀ならず。偶々家を出づるも、鹿ケ谷にて俊寛僧都を懷ひ、黑谷にて法然上人を慕ふと云ふの類に止り、遠く〳〵活ける現代の空氣に隔離せられ居ると雖も、而かも刻下日本の思潮の浪の音は、近く吾が山居の窓の障子にも響き、小波時あつてか吾が心の海に動くの感を爲すこと猶稀ならず。偶々文を徵せらる。流るゝ心を姑く此の一稿に盛りて需に應ぜんか。

（二）國民的自負の時代西洋文明輸入の反動時代

余の見る所――感ずる所に依れば、吾が日本人の思想は明治四十年代を一期として全く其の方向を轉化したるもの丶如し。

思ふに明治二十七八年の戰勝は、大に吾が國民の自負心を强めしに相違なし。乍併、かの清國人は吾等と等しく東洋人たるのみならず、其の文明は吾が文明の大部を構成せる要素たるが故に、我の彼に勝ちたる一事は、未だ以て、東洋人たる日本人としての吾が自負心を惹起するに至らず、寧ろ戰勝の原因を以て、西洋文明の輸入に於いて我國の清國に一歩を先んぜしの點に歸せんとするの傾向を免れざりき。然るに明治三十七八年戰勝の影響は、大に之と趣を異にするものあり。何となれば、露國人は東洋人に非らずして西洋人なれば也。此の西洋人に勝ちたりと云ふ一事は、實に甚しく吾が國民の自負心――東洋人たる日本人としての自負心を强めたり。從來西洋人にはとても叶ふまじと觀念して、偏に西洋文明の輸入を計畫したる吾が日本人は、此の戰勝に由りて、西洋文明必ずしも恐るゝに足らず、却て自家の文明に尊ぶべき或物あるべしと考ふるに至れり。清國に勝ちたる時は、是れ恐らく西洋文明の賜物ならんと樣に考へ居たれども、既に露國にも勝ちたる以上は、吾が日本人は、他の東洋諸國にも無く又た西洋諸國にも無き何等か偉大の特長を有し居るに相違なしとするの思想、勃然として吾が日本人の間に惹き起さるゝに至りたり。夫れ西洋文明の崇拜は、明治維新以來、上下都鄙を通じて實に國民一般の思想を支配せし所なりと雖も、今や其の西洋文明の崇拜は變じて輕蔑と爲り排斥と爲り、其の輸入の歡迎は變じて警戒と爲り禁遏と爲らんとす。是れ豈に驚くべき思想界の一大變化に非らずや。

既に日本人は、自家の文明に何等か偉大なる特長あることを自覺するに至れり。是に於いてか、輕卒なる一派の人々は、何等愼重の審議攻究を經ることなく、苟くも今日の西洋に無くして我が日本に在るものならば、其の文明史的意義の如何を問ふことなく、片端よ

り手當り任せに、各々其の思付きに從ふて復古的言說と運動とを開始するに至れり。曰く漢學の復興、曰く家族制の復興（維持と云ふよりも復古と云ふに近し）、曰く孝道の復興、曰く武士道の復興、曰く報德宗の復興、曰く何、曰く何、其の發する所各々異れりと雖も、何れも皆な新たに展びんとするの要求に非らずして一に古きを守らんとするの要求たり。而して是等のものを外にして、學者の研究に見はれし著しき一般的傾向は、日本民族性の研究と云ふこと也。倫理學者、史學者、憲法學者、經濟學者の或者は、近來頻りに此の方面の研究に志し、甚しきは日本民族の特徵を高調して、恰も現代の日本を謳歌するものなるかに見ゆるものあり。加ふるに海外に漫遊し又は留學して歸朝せる人々の說く所を見るも、西洋崇拜の語氣を示すは甚だ稀に、寧ろ多くは彼の短を擧げて我の長を示すに急なるかの觀あり。

　之を要するに、今の時代は西洋文明輸入の反動時代なり。吾が民族の特長を維持し又は其の特長の眞相て闡明せんとするの要求切なる時代なり。而して吾人は、此の反動及び要求を以て、社會の一部より起りたる一時的の現象と見ること能はず、民衆の底部より起りたる永續的の現象たるべしと觀測するもの也。其の故何ぞやと云ふに、明治三十七八年戰役の勝利のことは前既に述べたり。思ふに此の戰役たる實に國民的戰役にして、擧國一致、上下を通じて其の戰敗を憂ひ朝野を擧つて其の戰勝を祝したる大戰なれば、其の戰勝の產物たる自負も亦た國民的自負にして、即ち吾等は自負するに於いて復た擧國一致、上下朝野を貫きたるもの也。故に今の反動は其の根底廣く且つ深く、決して一部の思想家著作家の所產に非らず。（明治二十年代の反動は則ち然りき）。加ふるに、維新以來西洋文明の輸入は極めて迅速の速度を以て行はれたるが故に、爾來四十年を經過したる今日に於いては、其の所謂西洋文明なるもの既に社會の最下底に到達し侵潤するに至れり。――例へば帽子と洋服と靴とは、巡査軍人の制服として以外に於いて既に到る所の村落に見得るに至れ

り。而して西洋流の思想の臭味も亦た是等の服裝に伴ふて村落に入り、田舍漢の純き臭覺をも刺激し得るの程度に達せり。例へば小學中學の教育を受けたる子の親に對する態度に於いて。——故に吾人は、今の時代の自負を以て國民的自負と見、今の時代の反動を以て國民的反動と看做し、從つて又、其の勢力の强大にして且つ永續的なるべきを思ひ、乃ち明治四十年以降を以て明治思想史の改章の個處と爲さんとするもの也。

斯く考へ來らば、思想上の今の時代は最も大切なると同時に最も危險なる時代に屬することを知るに足るべし。何となれば、其の自負にして自負すべからざる所に行はれ、斯くて維持すべからざるものを維持し、變ずべきものを變ぜざることゝ爲り、或は妄りに天祐を迷信し過つて中華の謬想に陷ることあらんか、吾が日本文明の發展は全く是が爲めに封鎖さるゝに至るべければ也。故に少くとも吾等讀書人は、妄りに他の意に迎合せず、各々信ずる所を披瀝して思想の開發に努むること、蓋し刻下の任務ならん乎。請ふ吾人をして、少しく其の思ふ所を述べしめよ。

(三) 日本民族の特徴は今の時に於いて最も顯著なり

吾人の見る所に依れば、西洋人の歷史と日本人の歷史と、之を古代に遡れば、相似たる所頗る多きを覺ゆ。乍併、進化は即ち分化なり。乃ち今の西洋人を以て我が日本人に比するに、兩者の間に於ける民族的特徴の差異又た頗る顯著なるものあるを覺ゆ。而して以下論究せんとする所は、即ち此の現在に於ける民族的特徴の差異なり。語を換へて言はゞ、吾人は過去の日本人よりも現在の日本人を以て發展したるものと爲し、從つて日本民族の特徴も過去に於けるよりも現在に於いて最も能く發輝されたるものと爲し、從つて又た、日本人の偉き所以を過去に求めずして現在に求めんとするもの也。——(吾人は固より現在が歷史の產物たるを知る。乍併、幼年期の成育に有益なりし牛乳は必ずしも壯年期の食料と爲すに足らず、壯年期の發育に適當

なりし運動は必ずしも老年期の衛生法と爲すに足らざるが故に、吾人は現代の日本が今日の如く偉くなりたる所以を研究するよりも、今日の如く偉き所以を研究するの必要なるを信ずる者なり。否な、現代の日本が今日の如く偉くなりたる原因を研究して將來の日本を偉くせんとするの主義を否認し、寧ろ今日の日本の偉き原因を研究し、之を以て將來の國是を定むるの參考とせんと欲する者なり。斯く抽象的に言ひたるのみにては、吾人の態度は未だ明白なるを得ずと雖も、仔細は請ふ之を下文に徵せられよ。)

(四) 日本の國家主義と西洋の個人主義

余の見る所に依れば、現代日本の最大特徵は其の國家主義に在り。抑々國家主義の語既に日本獨特の術語にして、嚴格に之を歐語に翻譯するを得ざる程なれば、其の主義の精神の如きは全く歐米人の諒解するを得ざる所なり。蓋し日本現代の國家主義に依れば、國家は目的にして個人は其の手段なり。國家は第一義のものにして個人は第二義のもの也。個人は只だ國家の發達を計る爲めの道具機關としてのみ始めて存在の價値を有す。故に假りに最も極端なる場合を想像して、若し凡ての個人を殺すことが國家の存立を維持する爲め必要なる場合ありとせんか、縱ひ凡ての個人を犧牲とするも國家を活かすと云ふことが、國家主義の必然の論理的斷案にして、現代日本人の倫理觀は此の斷案を是認するに躊躇せざるもの也。然るに西洋人の主義は、國家主義に非らずして個人主義なり。故に彼等の主義に依れば、個人が目的にして國家は其の手段たり。個人は第一義のものにして國家は第二義のものなり。國家は只だ個人の生存を完うする爲めの道具機關としてのみ始めて存在の價値を有す。故に假りに又た最も極端なる場合を想像して、若し國家を滅すことが凡ての個人の生存を完うする爲め必要なる場合ありとせんか、國家組織の打破と云ふことが個人主義の必然の論理的斷案にして、現代西洋人の倫理觀は此の斷案を是

認するに躊躇せざるものなり。

（五）西洋の天賦人權、民賦國權と日本の國賦人權、天賦國權—西洋人の人格と日本人の國格

此の如く西洋と日本とは建國の根本趣旨が全く相違せり。而して此の根本趣旨の相違は、各種の方面に亘つて彼我國情の上に種々の差異を派生しつゝあるもの丶如し。今ま思ひ出のまゝ其の一二を述べんか。

西洋人の主義は個人主義なり。故に西洋に在つては個人を以て自存の價値あるものと爲し自己目的性を有するものと爲す。故に天賦人權の思想あり。人命を重んじ人格を尊ぶこと、日本人の想像の外に在り。然るに日本人の主義は個人主義に非らずして國家主義なり。故に日本に在つては個人を以て自存の價値あり自己目的性を有すと看做す能はず、獨り自存の價値を有し自己目的性を有するものは只だ國家あるのみと爲す。故に日本人には天賦人權の思想なくして、天賦國權の思想あり。個人の權利は只だ國家の承認を經て始めて存在す。國家は只だ其の自存の目的を逹するの手段として、個人に一定の權利を認む。個人の有する權利は、本來自己目的の爲めに非らずして、只だ國家の道具として役立つが爲めのもの也。故に西洋に在りては人權が天賦にして國權は民賦たりと雖も、日本に在りては國權が天賦にして人權は則ち國賦たり。西洋に在つて人命を重んじ人格を尊ぶことが日本人の想像の外に在るが如く、日本に在つては國權を重んじ國家を尊ぶことが又た西洋人の想像の外に在り。日本に在つては、個人が個人として獨立の人格を有すと云ふの觀念頗る乏し。極端に言はゞ、日本人には元來人格の觀念なし。乍併、彼等は西洋人の所謂人格を所有せざるに反し、各々國格を代表す。國格を代表すとは國家の機關として其の存在の意義を自覺するの謂なり。西洋に在つて最も高貴の人物は最も偉大なる人格を處有するの人物なれども、日本に在つて最も高貴なる人物は

最も多く國格を代表するの人物なり。恐れ多けれども日本の　天皇陛下は即ち最も完全なる國格を保有し給ふものにて、國家の利害を自己の利害とし給ひ、國家の公の利害の外別に個人としての私の利害を有し給はず。故に日本人の信仰よりすれば　天皇は最高最貴の方にまします也。　陛下の下に統御せらるゝ各個人は、決して此の如き完全なる國格を有し能はず、皆な國家の公の利害の外に、個人としての私の利害を有するものにて、而して日本人の信仰よりすれば、其の私の利害を有すること多ければ多き程、言ひ換ふれば其の保有せる國格の少ければ少き程、次第に卑しき階級に屬するものたる也。

（六）西洋諸國は凡て民主國なり、日本國のみ獨り國主國たり

既に西洋に在りては個人が主にして國家は從たり。故に西洋の國體は皆な民主制なり。或は其の政治の形式に於いて、君主を置くあり大統領を選ぶありと雖も、立國の根本精神は皆な民主にして、即ち國を輕しと爲し民を重しとするの主義なり。然るに日本に在りては國家が主にして個人が從たるが故に、其の國體は謂はば國主制とも名くべき一種特獨のもの也。故に此の根本精神にして變ぜざる限りは、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、日本は決して民主國たること無く又た民主國たり得ざるもの也。極言すれば、西洋に在つては國家は人民の奴隷にして、日本に在つては人民が國家の奴隷たり。

（七）日本は神國なり—西洋人の權利思想と日本人の國家思想—西洋は權利國にして日本は義務國也

日本は神國なり。國は即ち神なりと云ふこと、是れ日本人一般の信仰なり。此の信仰は明白に意識され居らずとするも、理を推して行かば一般日本人の必ず首

背する所たるべし。蓋し日本人の思想に依れば、國家は至善のものにして且つ萬能のもの也。國家は人民に對して害を爲すものに非らず否な爲す能はざるもの也。國家は人民に對し如何なる事をも要求し得べく又た要求し得ざるの道理なきもの也。何となれば、前にも云へるが如く、日本人の信仰に依れば、人民は凡て國家の機關にして、各個人は決して自存の目的を有し居るものに非ず。故に苟くも國家の利益の爲めならば、國家は如何なる時に於いても又た如何なる程度に於いても、常に一定の犧牲を人民に命ずることを得べく、而して個人は既に國家の機關としてのみ生存し居ることを其の信仰とするが故に、此の如き犧牲の命令は彼等の絶對に反抗し得ざる所たるは勿論、其の犧牲の命令に對し道德的批判を加ふるの餘地だも存せざる也。此の如きは縱ひ現在の事實に非らずとするも、少くとも一般國民の理想たり信仰たるもの也。西洋に在つては個人が個人の利益を主張すと云ふことが其の權利なり。權利のことは英語にてライト（Right）と云ふ。而して此のライトと云ふ語は元と公道正義を有し、ロング（wrong）即ち罪惡不正の意を有する語と相對するもの也。蓋し西洋の如き個人本位の國柄に在りては、各個人が自己一身の利益を主張すと云ふことが公道正義に合し、之を主張せざるが寧ろ罪惡不正なり。然るに日本の如き國家本位の國柄に於いては、權利の主張は決して此の如き道德的價値を有するものに非らず。故に英國のライトと云ふ語も、日本に譯されては權利と云ふ語と爲る。權は權道の權なり、利は私利の利なり、故に權利なる語そのものに本來道德的含蓄なし。もし西洋のライトを直譯すれば正に正義と爲すべきものなれども、日本に於いては斯かる事は決して正義に非らずして、只だ義勇奉公と云ふことが最上の道德なり。故に西洋を權利國と云はゞ日本は即ち義務國なり。而して西洋の權利と云ふは其の本源を個人と個人との關係に發すれども、日本の義務と云ふは其の本源を個人と國家との關係に發せり。それは兎もあれ、日本人の眼中腦中心中最も高貴なるものは國家を措いて他あら

ず。故に日本人は國家の爲めに何事何物をも犠牲とすと雖も、何事何物の爲めにも國家を犠牲とするを肯んぜず。國家は彼等があらゆる犠牲を供する唯一神にして、彼等は國家を犠牲とすべき他の神あることを夢想だもする能はず。彼等にとりて最上最高最大の權威を有する者は國家にして、國家以上に權威を有する者あるべしとは彼等の決して想像し能はざる所なり。故に學者は其の眞理を國家に犠牲し、僧侶は其の信仰を國家に犠牲す。是れ即ち日本に大思想家出でず大宗教家出でざる所以なりと雖も、而かも日本人は國家の存立と相容れざるが如き思想宗教を味ふの要求を有せざるが故に、彼等は斯かる大思想家大宗教家の出でざることを悲まず、或は寧ろ悅びつゝありと謂ふを得べし。

(八)　日本に於ては天皇即國家也、西洋に於ては天皇は國家の機關也—日本に於ける忠君と愛國との一致—忠存一本論及祖先崇拜論は時勢に適せず

此の如く日本人の神は國家なり。而して　天皇は此の神たる國家を代表し給ふ所のものにて、謂はゞ抽象的なる國家神を具體的にしたるものが吾國の　天皇なり。故に日本人の信仰よりすれば、皇位は即ち神位なり、　天皇は即ち神人なり。是れ帝國の憲法に、　天皇は神聖にして犯すべからずと明記しある所以にして、此の一條の明文は即ち日本國民の信仰箇條中最も重要なるもの也。蓋し前にも云ふが如く、吾國の　天皇は完全無缺の國格を保有し給ひ、國の政治に於いては、只だ國家公の利害を以て其の利害とし給ふのみにて、別に何等私の利害を有し給はず。故に日本に於いては、國家と　天皇とは一體にして分つべからず。而して國家は吾等の神なるが故に、　天皇は即ち神の代表者たり。故に吾國に在りては、愛國が最上の道德たると同時に、其の愛國と云ふことは軈て忠君と

同義なり。知るべし、日本民族の特徴は忠孝の一本に非らずして、愛國と忠君との一本に在ることを。是れ吾人が、忠道奬勵の前提として孝道を奬勵せんとする者を愚なりとする所以なり。

西洋に在つては、凡ての人が個人の立場よりする人格を有す。故に君主も亦た人民と同位同列の人格者なり。否な彼等の思想に依れば、個人は個人としての人格を保つが故に貴き也。故に君主も亦た一個人として人格を保ち、一個人としての私益私利を有す。故に西洋流の思想に依れば、君主は決して國家と一體たる能はず、國家以外別に隔離獨立したる人格を有するが故に、君主は即ち國家の機關たり。是れ西洋の國法學が皆な一樣に君主の地位を説明して、國家の機關となす所以なり。然るに、日本に於いては君主は國家と一體にして、而して凡ての個人が其の君主なり國家なりの機關たり道具たるもの也。兎もあれ、日本人の信仰に依れば、　天皇は完全に國家を代表し給ふものなるが故に、國家は神なりとの思想を推して　天皇を神聖と爲し　皇位と神位と爲すもの也。

世或は祖先崇拜、民族同祖のことを云爲し、以て日本人が　天皇を神の代表と爲すの信仰を説明せんとする者あれども、余の見る所に據れば、こは甚しき誤解にして而かも甚しく危險なる誤解なり。蓋し祖先崇拜の宗教は（之を以て祖先尊敬の美俗と混同すること勿れ）、各國古代の歴史及び現存野蠻人の状態に照らして考ふるに、最も幼稚なる未開時代の宗教に屬するものにて、言はば野蠻人の迷信無智に本いて發生したるもの也。即ち彼等の迷信に依れば、死者の靈は死後猶ほ其の生活を持續するものにて、此の神靈常に其の子孫を保護し、子孫をして能く禍を避け福を得せしむ。故に彼等は死者の靈を崇拜し神として之を敬畏するもの也。而して此の如き宗教は、幼稚なる凡ての社會に於いて常に見る所、決して日本人獨特の宗教たるに非らざる也。只だ其の日本獨特と稱すべきは、斯かる宗教が次第に發展して遂に今日の如き國家崇拜教と爲りたる點に在り。即ち今日の日本人が　天皇を神の代

表者と爲すは、己が祖先を以て神と信じ、而して皇室を以て同祖の宗家と爲し、祖先を神とするの信念を移して其の宗家の家長たる現在の　天皇を神の代表者とすと云ふに非らずして、只だ國家を神とし、而して其の國家の代表者として現在の　天皇を神の代表者と仰ぎ奉るものたる也。

（九）日本の合力主義と西洋の分業主義―日本に於ける高度の愛國道德と劣度の商業道德―西洋の人物は特種の人格を有し、日本の人物は一色の國格を具ふ

日本に於ける國家主義の妙用は合力の方面に表はれ、西洋に於ける個人主義の妙用は分業の方面に表はる。分業も一種の合力なれど、茲に合力と云ふは所謂單純合力を指し、複雜合力即ち分業を除外するものたるや勿論なり。例へば何百貫と云ふ巨大なる石を動さんには、數十人其の力を合して同じ方向に之を推すを必要とするものなるが、此の如きは即ち單純合力なり。然るに之と異り、例へば下駄を作るに各々其の分擔を分ち、或者は木を削り、或者は之を磨き、或者は緒を作り、或者は此等の材料を組み上げて一個の下駄と爲すが如きは即ち分業なり。而して合力は日本人の長所にして、分業は西洋人の長所なり。

抑々合力にして發達すれば必ず複雜と爲り（複雜合力は即ち分業なり）、分業は亦た合力を待つて始めて其の效用を全うするものにて、即ち合力と分業とは、譬へば車の兩輪と云ふが如く本と兩々相併んで進歩するを理想とするものなれども、而かも日本人の長所は則ち合力に偏し、西洋人の長所は則ち分業に偏するを免れず。而して此の如きは畢竟國家主義及び個人主義の當然の結果なり。

今日の時勢に於いて最も能く合力の妙物を發揮する

に足るの方面は即ち戰爭にして、最も能く分業の妙用を發揮するに足るの方面は即ち經濟なり。宜なる哉、今日の文明國中、戰爭に於いて最も强く經濟に於て最も後るゝものは則ち我が日本國を措て他あらざること。

近頃西洋人が日本人の道德性に就いて最も不可思議と爲せる現象二あり。其の一は日本人が忠君愛國の精神に富めることにて、此の點に於いては流石の西洋人も全く三舍を避けざるを得ざる也。然るに此の方面に於いて斯くまで高度の道德性を有する日本人が、所謂商業道德の方面に於いては粗製濫造を始めとして公然種々の背德を敢てして憚らず、是れ西洋人の不可思議と爲せる第二の現象たり。蓋し愛國的道德と云ひ商業道德と云ふ、等しく是れ道德の範疇に屬するものなり。然るに愛國的道德に於いては西洋人は到底日本人に叶はずと思へるに、他方商業道德に於いては日本人の德性殆ど話にならず。是れ西洋人の見て以て大に不可思議とせざるを得ざる所なり。乍併、吾人を以て之を見れば、これ何の不思議にも非らず。何となれば、戰爭の際は日本固有の國家主義が其の最高調に達するの時にして、即ち日本人の合力主義の妙用は所謂擧國一致の態度に於いて最も能く發揮せらるゝに反し、平素無事の際商業取引に從事するに當つては、此の如き妙用少しも發揮せられず、主として各人個々の人格に信賴し其の自治に放任するの外なければ也。

思ふに戰爭と云ひ貿易と云ひ共に外人と交捗接觸するの方面なるが爲めに、其の間に見はるゝ德性の差異、偶々外人の怪む所と爲りしのみ。されば啻に商業道德の方面に於けるのみならず、公園にては妄りに花を折り、汽車に乘るには互に先を爭ひ、立食の饗應には紳士にあるまじき振舞を演ずる等、苟くも人格觀念を基礎とする道德の方面に於いては、日本人の短所として指摘すべきもの實に少しとせず。否な租税の納付と云ふが如き國家的義務に對しても、平常無事の際、其の國家主義の高調に達せざる時に當つては、日本人の德性たる頗る疑ふべきものなくんば非らず。

單純合力に依り何百何十貫と云ふ巨岩を動かす場合

には、凡ての人が同じ方向に力を合はすことを必要とす。此の場合に於いて最も戒むべきことは、力の方向一ならざること也。或者は東に推し、或者は西に推し、或者は北に引き、或者は南に引く等のことあらば、合力の效果全く擧らざる也。今ま日本人の主義は此の合力主義なり。故に日本に在りては、個人の人格を尊び其の特性を重んずと云ふの思想甚だ乏しく、而して統一主義劃一主義に至つては其の力甚だ大なり。故に日本人の間には特色ある人格甚だ稀にして、世に人物と稱せらるゝ者は殆ど凡て同一模型を有す。凡ての人物が其の力を發揮する所は、直接に國家の爲めと云ふ同一の方向に向つてなり。而して人物の大小は、其の同一方向に向つて直接に貢献したる力の大小に依つて評價せらるゝ也。換言すれば國格の大小が人物評價の標準にして、西洋に所謂人格の高下が人物評價の標準たるに非らず。故に西洋の人物は皆な個々特異の人格を具ふるに反し、日本に在つて人物として世に尊敬せらるゝ者は、皆な一色の國格を具ふ。

日本に於いて尊敬せらるゝ人物は、凡て直接に國家の爲めに貢献する人々なり。官尊民卑と云ふこと是に於てか在り。武尊文卑と云ふこと是に於てか在り。而して或は煙草の製造に從事せる某々の商人、或は麥酒の製造に從事せる某々の會社が、屢々國益の語を以て其の利己的事業の哲學的背景と爲さんとせしも亦た是が爲めのみ。

（一〇）日本にて無政府主義社會主義の排斥せらるゝ所以—日本には西洋流そのまゝの社會主義、社會政策、立憲政治、政黨政治は在り得べからず

要するに日本人が最大至高の價値を認めつゝある者は國家なり。而して現代の日本（又は其の日本に在りて最大の勢力を有しつゝある民衆の大多數）が最も恐れつゝある所のものは、此の國家至上主義の破壞なり。

故に日本に於いて最も恐れらるゝ所のものは、かの所謂無政府主義なり。西洋にて無政府主義者の恐れらるゝ所以は、其の一派のものが暴擧を敢てするに在り。乍併、是等の輩の恐れらるゝ所以は、殺人犯人、强盜犯人等の恐れらるゝ所以と異ならず。然るに日本に在つて、無政府主義者の恐れらるゝ所以は、之と全く選を異にす。縱ひ彼等にして極めて平和的なりとするも、猶ほ彼等の抱ける思想主義そのものが、最も恐れられ最も嫌はれ最も憎まるべき也。蓋し無政府主義と雖も必ずしも凡て暴力を以て其の傳道の手段と爲すに非らず。例へば米國のタッカーの如き、傳道の手段としてはスピーチ、エンド、プレッス(演說及著述)あるのみと爲し、只だ此の如き平和的手段にして全く其の自由を奪はれたる場合のみ、暴力に訴ふるも亦た不可ならずと爲せるに過ぎずと雖も、而かも此の如き主義者に向つて言論の自由を得せしむと云ふこと其れ自身が、日本國民の最大多數の擧つて反對する所なり。少くとも是等の輩の言論を抑壓すと云ふ事は、日本國民の最大多數が決して反對せざる所なり。日本人が無政府主義者を恐れ且つ憎むは、之を以て强盜殺人狂者の類と同視するが爲めには非らずして、其の主義が日本民族の最高の信仰たる國家至上主義に絕對正面の反對を爲すが爲めに外ならず。

日本に於いて社會主義の恐れられ且つ憎まるゝも亦た之と趣を同うす。一見する時は國家主義と社會主義とは其の性質相近似し、共に彼の個人主義と對峙するものゝ如く見ゆ。何となれば、かの所謂社會主義なるものは一切の土地資本を公有と爲し凡ての產業を公營と爲すべしと主張するものにて、如何にも個人主義と相容れざるが如くなれば也。乍併、此の如きは眞に外形上の事なり。即ち其の精神に至つては、所謂社會主義なるもの亦た全く個人主義の上に立脚するものに外ならず。其の土地資本を公有にし一切產業を公營とすべしと云ふは、その事が國家の爲めに必要なるが故に非らずして、全く各個人の爲めに必要なるが故に外ならず。即ち其の根本の精神、本來の出發點、最後の立

脚地は依然として飽くまでも個人主義なり。即ち其の個人主義が偶々其の目的を實現するの手段として姑く國家主義に類似したるの主張を敢てするに至りたるのみ。而して此の社會主義が吾國に於いて極力排斥せらるゝ所以のものは、其の根本の精神、本來の面目が這個の個人主義なるが爲めのみ。否な、一步を進めて語を切にせば、排斥せらるゝは社會主義に非らずして實は個人主義なり。故に見よ、吾が國民は彼の鐵道國有を始めとして、既に諸種の資本を公有とし又た諸種の事業を公營としたり。而して此の如きは即ち社會主義の主張の一部の實現に外ならずと雖も、而かも朝野舉つて毫も之を怪まざる所以のものは、其の動機が個人の爲めと云ふとを主眼とせずして國家の爲めと云ふを眼目と爲せば也。是れ恰も漢學復興を唱ふるが如き一派の人々と雖も、亦た其の帽を西洋帽にし其の服を西洋服と爲して怪まざる如きのみ。排斥する所は形に非らずして心に在り。排斥する所は、產業の公有そのものに非らずして、實は個人主義に立脚せる產業公有論そのもの也。

吾人は嘗て佐藤信淵の遺著を讀んで一驚を喫したることあり。何となれば、彼の主張する所は一切の土地資本を公有と爲し一切の產業を公營とすべしと云ふに在りて、即ち全く今の所謂社會主義の主張と符節を合するが如く、而かも其の時代を稽ふれば、恰も所謂社會主義の先驅者たる佛人フーリエ、サンシモンの徒と相前後するものなれば也。余即ち『幕末の社會主義者佐藤信淵』と題し、兩三年前嘗て此の事を『京都法學會雜誌』に詳論せり。後ち福田博士、此の卑稿を讀み謂ふて曰く、吾輩之に依つて始めて吾國に社會主義者なかりしを知り得たりと。一句能く卑論の缺を道破し得て遺憾なし。蓋し佐藤信淵の論は縱ひ土地資本の公有と一切產業の公營を主張するに在りしとするも、其の議論の根本精神は飽くまでも國家主義にして個人主義に非らざるが故に、彼の論は西洋に謂ふ社會主義なるものと全く其の根本の精神を異にするものなれば也。乍併、此の意味に於いては、吾國には未だ社會政策

の實行なしとも謂ひ得べし。何となれば、例へば工場法を制定するに當つても、我國に在つては、其の趣旨が勞働者の人格を尊重し勞働者階級の階級的利益を增進すると云ふことを本來の目的とするに非らずして、飽くまでも彼等を以て國家產業上の道具と爲し、只だ此の道具の精神上及び肉體上の健全なる發達が恰も國家產業の健全なる發達の爲めに必要なりと思惟せらるゝが爲めに外ならざれば也。要するに、西洋の經濟論にて八釜敷は分配論なれども、日本の經濟論にて最も重きを爲すは生產論なり。蓋し個人の立場よりすれば凡ての經濟論は分配論的と爲り、國家の立場よりすれば一切の經濟論が主として生產論的と爲るを免れざるべければ也。固より個人集つて始めて國家を成すものにて、個人を別にして國家あるに非らざるが故に、多くの場合に於いては、たとひ個人主義より出發するも又た國家主義より出發するも、其の到達の結果は形式に於いて屢々相一致するに至るものにて、即ち其の形式より云へば、日本にも既に幕末當時より立派なる社會主義あり或は社會政策ありたりと云ふを得べく、又た政治の方面に於いては維新以來議會の開設あり立憲政治の樹立あるに至りたれども、其の根本の精神より立論し來らんか、日本には未だ社會主義なく社會政策なく立憲政治なく政黨政治なく、否な社會主義、社會政策、立憲政治、政黨政治は到底日本に於いて在り得ざるものと云ふも或は大過なかるべし。

（一二）西洋及日本に於ける言論の自由不自由の差異—西洋の基督教と日本の國家教

或る意味に於いて日本ほど言論の自由なる國はなく、又た他の意味に於いて日本ほど言論の自由なき國は非らず。其の故何ぞや。

生物進化論は諸君の熟知せらるゝ如くダーヰンの著書に依つて始めて廣く世間に流布するに至りたるものなれども、而かも斯かる思想は近世に於いて（希臘古

代のことは姑く舍く)ダーキン以前の學者の夙に懷抱し居たる所なり。例へばバッフォンの『自然史』の中には明かに生物近化の事實を認めたる一節あり。乍併、彼は其事を記載せる後直ちに一轉語を下し、夫れ然り豈に夫れ然らんや(But no!)と云ふて說き加へて曰く『聖書の示す所に依れば、凡ての動物は神が直接に創造したる者にて、凡ての種類の動物の最初の一對は神の手に依り初めより完全に造り出されたる者也。』是れ即ち基督教の教義に迎合せるもの也。而して此の基督教たる、當時に在つては絕大の勢力を有し、苟くも之に反對する意見を發表せんか、忽ち其の身命を危くするの運命を免れ得ざりしもの也。故に彼は生物進化論を一の假定として述べ置き、而して次の頁に於いて聖書の示す所を權威として直ちに其の假定を打ち壞し置けるなり。

バッフォンに後るゝこと約四十年にしてラマルク出づ。而して彼は實にダーキンに先つこと約五十年前、始めて生物進化論を世に公にせし者なり。乍併、彼は是が爲めに『凡ての方面より攻擊せられ、凡ての方面より悄むべき嘲弄に依つて迫害せられ』、かくて『長き間、凡ての人に見棄てられて、貧乏と盲目との生活を爲したる者なり』。(彼が一親友の言)。然るに彼と同じ時代の動物學者たるキユヴイエーは當時の俗論に媚び盛にラマルクに反對したるが故に、後には擢んでられて文部の局長と爲り、華族に列せられて男爵を授けらるゝに至りたり。

扨て聊か餘談に亘りたれど、之に依りて考ふるも、西洋の社會は如何に宗教に關する言論の不自由なるかの一斑を知るに足るべし。固より之は百年前の昔話なれば、之を以て直ちに今を律すべからずと雖も、總じて西洋の社會に在つては基督教の事を惡し樣に云ふが禁物にて、此の點に於いては我國の方遙に〳〵言論の自由あり。然るに他の方面、例へば社會主義に關しては如何と云ふに、彼に在りては演說著書雜誌新聞紙の類の公行せらるゝは勿論、社會主義者にして或は大臣と爲り局長と爲つて政府の要路に當るものすらあり。然

るに我國にては、自ら社會主義者と名乘らんには、民間の會社にても雇傭を斷ることあるべし。即ち此の如き方面に於いては、我國の方彼に比して遙に〳〵言論の自由なし。

されば我國の方彼に比して一概に言論の自由ありとも言ひ難く、又た一概に然らずとも言ひ難し。要は言論の自由の拘束せらるゝ方面が彼我の間に相違あるにて、即ち彼に在つては宗教の方面に於いて八釜しく、我に在つては政治の方面に於いて八釜しとも謂ふべき也。乍併、斯く云ひたるだけにては眞に表面上の事にて何の面白味もなし。一歩を進めて言はゞ、實は彼我共に宗教の方面に於いては、一樣に言論の自由が拘束せられ居るもの也。

蓋し茲に吾人の宗教と云ふは、社會的宗教とも云へ程の意にして、眞の宗教的宗教のことを謂ふに非らず。即ち一定の事項が民族一般の感情と爲り信仰と爲り、而して其の感情信仰が社會に於いて最高最大の權威を有するに至るならば、吾人は之を稱して茲に宗教と云ふなり。而して此の意味に於いては、基督教が西洋の社會に於いて一の民族的宗教たるが如く、日本の社會に於いては國家至上主義が一の民族的宗教たり。故に彼に在つて基督教を非難することが禁物たるが如く、我國に在つては國家至上主義を非難することが禁物たり。殊に其の主義が今日の如く其の最高調最頂上に達し、一般民衆の間に牢乎として動かすべからざる最廣最大の信仰感情と爲れる目下の情勢に於いては、之に向つて攻撃を爲すは勿論、價値判斷の尺度を當つることさへも、誠に最大禁物たらずんば非らざる也。

斯く觀じ來らば、今の日本に於いて、或種の事項に關する言論の自由の非常に拘束せられ居る所以を理解するに足るべし。而して人若し目下に於ける言論自由の束縛を以て、或は在朝政治家の專斷に出づと爲し、或は或る一部の社會に於ける頑冥者流の僻見に本くと爲さば、そは恐らく眞相の大誤解たらん。少くとも余の見る所に依れば、今の時代に於いて或種の事項に關する言論の拘束の爾く嚴重なる所以は、爾か拘束する

事が民衆一般の要求たり輿論たるが爲めに外ならず。此の點に於いては、政府の政策たる、新聞雜誌記者の多くが裏書する所たり、議員政黨員の多くが裏書する所たり、否な國民の多數が皆な一樣に裏書する所たる也。而して吾人は亦た、讀書人の一人として茲に又た之に裏書するを餘儀なくせられざるを得ざらんとする者なり。

(一二) 傳來的信仰に對する新興科學の謀叛—妥協と矛盾は刻下の特徵

蓋し國民の團結は其の一切の階級を貫くの統一的感情、一般的信仰あるに依つて始めて固し。故に政治の要訣は、感情信仰を統一し、或は統一されたる感情信仰を維持するより急なるは無し。

古き知識は集積せられ凝結せられて信仰と爲り感情と爲る。而して新しき知識は其の信仰感情を發展せしめ進歩せしむる所以の材料なり。乍併、舊知識と甚しく相違せる新智識が突然に發生する時は、舊知識は其の新知識を攝取し同化して國民的信仰の內容に包容するの機會を有し能はざるが故に、信仰の統一は是が爲めに破壞せられ、必らずや國情の激變、國礎の動搖を來すもの也。而して今の時代の日本は、斯かる危險を避けんが爲めに漸く言論の拘束を嚴にせんとするの方針に向へる也。然り、是の故に今の時代は即ち矛盾の時代なり。

蓋し嘗て本誌に於いて論じたるが如く、而して近刊『時勢之變』に於いて稍々詳論し置きしが如く、今の時代は、獨り日本のみならず實に世界を通じて未曾有なる物質界の進步の實現されつゝある時代なり。(其の原因は嘗ても述べたるが如く、一に機械の發明及び發達に在り)。然るに此の物質界の進步に伴ふて又た未曾有なる智識界の進步あり。而して既に未曾有なる知識界の進步あり。故に今の時代は、是等の新知識が盛に舊智識の破壞を敢てしつゝあるの時代なり。夫れ新知識は學問科學の所產にして、舊知識は傳說信仰の內容な

り。故に他語以て之に換ふれば、今の時代は科學と信仰との激烈なる衝突の時代なり。西洋に於いて既に然り、然らば其傳來の文明と全く其の系統を異にせる新文明を極めて急激に輸入したる我國に於いて、科學と傳說との間に、一層激烈なる衝突を見んとするに至りしも亦た必勢の命數なり。是に於て乎、日本の現代は最も甚しき矛盾の時代たらざらんとするも亦た得べからず。何となれば、苟くも國際の競爭に於いて他に負くるを欲せざる限り、吾人は全力を盡して科學の進步及び普及を計らざるべからず。然れども又た他方に於いて、苟くも國內の信仰の動搖を防がんとする、吾人は全力を盡して新智識の急激なる發生及び普及を妨げざるべからず。是れ豈に矛盾の極に非らずや。而して此の如きの矛盾を最も痛切に感じつゝある者は、恐らく吾等學問を以て官吏の職を奉ずる者にあらん歟。蓋し吾等は、一方に於いては泰西日進の知識に一歩も後るゝ勿れと要求されつゝあると同時に、他方に於いては吾國傳來の感情は一毫も之を動かす勿れと要求されつゝある者なり。乍併、知識は感情を動かす。新知識に對する信念の强ければ强きほど、舊知識より成る信仰は則ち動搖せざらんとするも能はず。故に畢竟吾等は、進め進むなと云ふ矛盾極まる命令を奉じて纔に其の生を保ちつゝある者と云ふも、場合に依りては必ずしも過言ならず。乍併、此の如きは必ずしも獨り吾等が身の上のみに非らず。例へば政府當局者に就いて云ふも、彼等は即ち科學の保護者なり、否な保護者たらざるを得ざるなり。然るに其の熱心に保護しつゝある所の科學そのものが、又彼等の熱心に維持せんとしつゝある所の信仰の破壞者なり。されば如何にして此の科學の「謀叛人」と妥協するを得べきかは、妥協政治中の最大問題なり。知るべし、矛盾と妥協は現代日本の一大色彩たらざるを得ざることを。

（一三） 信仰に理由の說明あり得ず——日本人は無宗教に非ず——日本人に煩悶あり得ず

吾人は旣に國家至上主義が吾が國民の信仰たり宗敎たることを述べたり。然らば何が故に彼等は此の如き主義を奉じつゝあるかと質問すること勿れ。(此の如き質問は即ち多くの西洋人の皆な一樣に提出する所たるが如く思はる)。何となれば、此の如きは旣に吾が國民の信仰たり、故にそは議論の結論として生ぜしものに非らずして、却て演理の前提に置かるべきものなれば也。即ち吾人は、只だ其信仰を記述して是れ歷史の成果なりと云ひ得るのみ、何が故に個人主義に比し國家主義を優れりとするかは、歸納論法を以てするも將た演繹論法を以てするも、吾等の制底論證し得ざる所なり。

旣に國家至上主義を以て日本人一般の信仰たり宗敎たるものとせば、多數の日本人は此の意味に於いて皆な一種の宗敎を有せりと爲すを得べし。西洋人は、日本の敎育ある紳士の多數が、余は全く無宗敎なりと公言するを聞きて誠に奇怪の感を爲すと云へり。乍併、怪むを已めよ。其の無宗敎と云ふは、佛敎を信ぜず基督敎を信ぜずと云ふのみの意にして、彼等の凡ては皆な實は國家敎の信者たるもの也、少くとも國家敎の信者たらずと公言し得るものには非らざる也。

而して現代の日本人に甚しき宗敎的煩悶なきは（今は恐るべき動搖の時代にして宗敎的煩悶の正に大に起るべき時代たるに拘らず）、其の最大多數のものが皆な國家敎の確き信者たれば也。彼等にとりては、人生の目的は即ち國家に在り。彼等は國家の爲めに生き、國家の爲めに死するを以て理想と爲す。されば日淸日露の二大戰役に於いて、壯丁の死する者算なかりしと雖も、吾等日本人は是が爲めに懷疑煩悶に陷りたること無く、又た陷るを得ざる也。固より多少の懷疑煩悶を訴ふるの聲を聞く。乍併、そは未だ國家敎の信者たるを得ざる一部の靑年のみ。而して彼等も遂には國家敎の信者たるべき命運を有するもの也。

旣に國家主義は日本人の宗敎たり。故に看よ、此の國家主義に殉じたる者は死後皆な神として祀らるゝことを。靖國神社は其の一なり。而して余が鄕の先輩、吉田松陰先生も亦た是の故に神と崇められ、伊藤博文

公も亦た將に神と祀られんとしつゝあり。

（一四）國家主義の利弊―强き國家と弱き個人

吾人は既に國家主義を以て日本人一般の宗敎と爲すもの也。故に今ま斯かる公開の論文に於いて、余は此宗敎に對し、自己一家の尺度を以て之が價値判斷を敢てするを好まず、少くとも目下の情勢に於いては憚りて之を避くべきものと考ふるが故に、以上只だ事實の記述を爲したる止まり、之が批評は凡て省略したる積りなり。乍併、讀者にして若し許さるゝならば、余は終に臨みて只だ纔に數言の批評を附加し置かんと欲す。

思ふに、此の國家主義は吾が日本國の精華なり。此の貧國小國を以てして猶ほ能く强國たるを得るは、全く此の國家主義の賜なり。彼の蟻の社會を看よ、吾等人類社會を除きては、彼等ほど高度の文明を實現しつゝある者は非らずと雖も、此の如きは全く彼等の社會に於ける極端なる國家主義の賜なり。個人と個人と比較せば、吾等日本人は、富力に於いて知識に於いて將た體力に於いて、到底西洋人の敵たるを得ざる者なれども、其の合して日本國を成すや、かの國家主義の精神の爲めに能く一大强國を實現し出す。

故に吾人は今後に於ける此の國家主義の健全なる發展を熱望して已まざる者なり。乍併、吾人は日本民族の特徴たる此の國家主義に無用有害の媚を呈せんとする一切の論説、運動、政策乃至制度に反對す。吾人は此の國家主義を善導せんことを熱心に希望するが故に、之を邪路に陷れんとする者に熱心なる反對を爲す……乍併、吾人は今日の情勢に於いて、これ以上の論議を、甚しく迷惑なる誤解を蒙るの危險を冒すこと無くして、玆に之を述べ得るの手段を有せざるが故に、只だ此の事を一言するに止めて凡て詳論を後日に延し置くもの也。

既に述ぶるが如く、蟻の社會は、人類社會を除かば、生物中最も高度の文明を發揮しつゝあるもの也。(其の大略は昨年「太陽」に記載したることあり)。乍併、其の

個體は如何にも小弱なり。獅子虎の類をして蟻と同一の社會組織を採らしめば如何に恐るべきものと爲るべき。日本國は如何にも强けれど、日本人は偕に弱し。西洋の個人主義を甘く同化して、(必ずしも之を敵視するの要なからん)日本人をして鬼に金棒たらしめんとするの念願切なり。思ふに彼の個人主義を同化するが爲めには、吾人は先づ個人主義をして國家主義の洗禮を受けしむる必要あらん、即ち差し當りては國家的個人主義乎。此の事嘗て本誌に於いて新道德觀を說けるの際、少しく觸れ置きたり。先きの愚論を發展せしめて茲に附記せんは、余の論にとつては無用の事に非らざれど、今夜も早や一時を過ぎたり。されば斯かる餘論も亦た之を後の日に讓るとすべきか。(二月十日稿)

(一五) 追錄數則

以上認め終りたる後、思ひ出すこと猶ほ頗る多し。今ま何の順序も立てず、只だ其の中主なるもの二三を左に追記し置かんと欲す。

(一)戶田博士は、西洋を以て主我主義の國と爲し日本を以て沒我主義の國と爲し、此點に彼我民族性の差異ありと論ぜられたれども、余の見る所に依れば、日本人の沒我的なるは只だ國家に對してのみなれば、一概に之を沒我主義と云ふは如何やと思ふ。日本人は果して、一身の利益と一村の利益と衝突する時は則ち一身の利益を棄て、一村の利益と一縣の利益と衝突する時は則ち一縣の利益を棄て、一縣の利益と國家の利益と衝突する時は直ちに一縣の利益を棄て、國家の利益と世界人類の利益と衝突する時は直ちに國家の利益を棄つるの國民なるや否や。余は大に之を疑ふもの也。余の見る所に依れば、個人が國家と相對する時にのみ始めて(或は、其の時にのみ特に)沒我の精神を發揮するが日本人の特徴にて、即ち此の特徴は沒我主義と云はんよりも寧ろ國家主義と云ふを當れりとすべきに似たり。試に之を國際關係に就いて見よ。日本人の組織せる日本國と云ふ國家は決して沒我的國家に非らず。恰も西洋諸國の個々人が其の權利を主張するが如く、日

本國家も他の國家と相對する時は甚しく主我的なり。否な主我的の外交こそ、吾等日本人の理想とする所にして、即ち外交は軟なるよりも硬なるが常に歡迎されつゝあり。更に之を地方の行政に就いて見るも、吾等日本人は此の方面に於いて亦た決して沒我的なりと云ふ能はず。一村の行政には字の利害の爭あり、縣の行政には郡の利害の爭あり、各々自家の利とする所を主張して容易に下らざるかに見ゆ。而かも之を稱して沒我的國民と云ふこと如何あらん。

（二）自治と云ふことは個人主義の國に於いて當然行はるべく、又た行ふて好成績を擧げ得るの制度なり。之に反し日本人の如き國家主義を奉ずる者に在りては、官治と云ふことが之に相應するの制度なり。故に余の見る所に依れば、國家主義の論理を貫く爲めには、吾國現時の自治制度は宜しく廢止すべく（少くとも其の根本の精神に大改革を加ふべく）、又た或は强ひて自治の制度を發達せしめんとすれば、宜しく今年の如き國家主義一偏の教育を改正して、加味するに個人主義の教育を以てすべし。今日の教育は國家主義を高調するに全力を費し、而して個人主義的傾向は全力を盡して之を抑壓せんとす。此の如くにして自治政治の發達を望むは、山を掘つて貝を求むるが如きのみ。要するに自治は個人主義の產物にして、國家主義の下には只だ官治あるを得るのみ也。

（三）日本人は國家に沒我すれども國家以上のものに沒我する能はず。故に我が國家の利益と世界人類の利益と衝突するの時、前者を取つて後者を棄つと云ふことは、恐らく一考すること無くして多數民衆の直ちに答へ得る所ならん。國家の爲めに戰死することは人々の望む所にして且つ世人の賞讃する所なれども、例へば米國獨立戰爭の如き場合に於いて、自由の爲め人道の爲めに、其の獨立軍の軍隊に投ずと云ふが如きことは、日本人の望まざる所にして且つ世人の賞讃を博する所以の行爲にはあらじ。

（四）佛教は既に日本化したれば舍いて問はず、只だ今日に於いて國家主義當面の敵とすべき宗教は彼の基督

教なり。基督教は個人主義を其の最大特色と爲す。而して其の個人主義は即ち我が國家主義の敵たる也。此の意味に於いて、加藤弘之博士の基督教と我國體とは相容れざるもの也と云ふの論、正に眞相を得たり。神と國と相衝突する時、國を棄てゝ神に殉ずるが眞の基督教徒たらん。然らば眞の基督教徒は我が國體と相容れざるもの也。

(五)國體と政體とは正に區別すべきもの也。乍併、西洋諸國は皆な民主國體なるが故に、西洋學者の國家論には政體と國體との區別を立てたるもの曾て之れあらず。日本國が國家論の一材料たるに至つて、始めて政體論の外に國體論あることを得。而して政體は政治の方法に依つて定まり、國體は政治の目的に依つて定まる。政治の目的個人に在るを民主國と云ひ、其の目的國家自體に在るを國主國と云ふ。從來我國に在つて國體の論を爲すもの、多くは民主國又は共和國に對して君主國を擧ぐと雖も、その君主國と云ふを排して別に國主國の新名辭を立つるは、即ち余が一家見なり。

(六)日本の國家主義は今の時に於いて其絶頂に達したるもの也。國家主義は明治に入りて毫も衰へず、却て明治に入つて始めて眞の發展を爲したるもの也。余は此の如く信ず。而して偶々余の尊敬する史學專攻の一學者が余と同じ意見を有せらるゝ由聞きて、余は大に其の自信を强めたるもの也。

(七)今日の國家主義は固より歷史の產物なり。而して其近因は恐らく二あらんか。一は明治以前の所謂武士道なり。武士は農工商の輩と異り、平生其の君より封祿を頂きて其の生命を維持する者なり、故に一朝事ある時は、其の恩に酬ゆるが爲めに君の馬前の討死すべきもの也と云ふが、即ち武士道の要領なり。而して此昔時の武士と同じ狀態同じ思想を維持しつゝある者が今の軍人にして、即ち今の軍人道は昔の武士道の發展したるものに外ならざる也。蓋し彼等軍人は、經濟學者の言葉を假り用ひば、全く不生產的の人間なり。然るに其の不生產的の人間が、位を賜はり勳章を賜はり、生ける時は年俸を賜はり、戰死する時は年金を賜はる。

即ち其の經濟狀態に於いて旣に昔時の武士に酷似すると同時に、一朝事ある時は　陛下の爲めに一命を棄つべきものと覺悟し居れるも亦た頗る相似たり。加ふるに、今の軍人階級が世間に勢力を有し居ること亦た、封建時代武士階級が非常の勢力を有し居たりしと稍々相似たるものあり。故に封建時代に道德と云へば即ち武士道のことの如く看做されたると同じく、今は此の軍人階級の道德が即ち國民道德の中堅たり。而して軍人階級の道德は即ち國家主義なり、忠君愛國主義なり。是れ我が日本に於いて國家主義が最大勢力を有するに至りたる一因なり。而して第二の原因は、此の封建時代に接續せる明治維新以降の歷史なり。特に其の敎育史なり。吾人は明治の政治家があらゆる手段を盡して、國民敎育の上に國家主義を鼓吹したるの事實を徒勞に歸したるものと看做す能はず。固より敎育の普及に伴ひ、個人主義も社會主義も無政府主義も起らざるを得ざるに至りたれども、而かも是等のものは皆な偶然の副產物にして、譬へば工場の石炭ガラの如きのみ、國民敎育の最大產物としては即ち今の國家主義が製造し出されたるもの也。即ち吾人は、維新以前の歷史と、維新以後の歷史と、此の前後の歷史の成果として今の國家主義ありと看做すもの也。此の點に於いて、其の主たる原因を維新以前にのみ求めんとする一派の論者と稍々見る所を異にするを免れざる也。

（八）現代國家主義の中堅は軍人階級なり。換言すれば、國家主義に對し最も熱烈なる最も純一なる絕對の信仰を捧げつゝある者は即ち軍人なり。然るに軍人以外のものに在つては、縱ひ國家主義を奉ずるも其の熱心彼等に及ばざる者多く、或は之を口にするも心に之を疑ふ者あり。故に軍人以外の者には終始フル、ハートを以て事に當り得ざる場合も或は多からん。夫れ人は信仰を以て生く。縱ひ同一力量の者と雖も、一方の者が信仰を有し其の信仰を以て事に當るならば、信仰を有せず信仰を以て事に當り得ざる他の者に比し、能く之に十百倍するの效績を擧ぐるを得るもの也。是れ今の時代に於いて、軍人が最大の勢力を有し、且つ其の勢

力に値するの實力を有する所以なり。軍人階級が最も眞面目にして最も人物に富むは、刻下の爭ふべからざる事實なり。

（九）商業に從事する者も屢々國家の爲めと云ふ事を口にす。乍併、その國家の爲めと云ふ精神の力は、軍人が武を錬る場合の如く、明瞭切實なるを得ざるは當然の勢なり。故に彼等は國家主義の信仰に於いて、到底軍人階級に劣るあるを免れざるものにて、即ち是れ商人階級に人物少くして軍人階級に甚だ多き所以なり。

（十）乍併、兎も角も國家主義は現代日本の民衆的一般的信仰なり。故に敎師は生徒に向つて國家有爲の人物たれと要求し、親は子に向つて又た國家有爲の人物たれと要求す。而して人の健康を祝するにも、猶ほ、邦家の爲めに之を慶すと云へり。國家々々、是れ現代日本の一大主義たること爭ふべからず。

兒、病を獲て病院に在り、妻行きて看護に從ふ、余亦た日々行いて看る。而して次兒猶ほ幼、家に在つて余が讀書を妨ぐること尠からず。故に昨今、講義の草稿を作るも纔に辛うじて也。只だ宿約あるの故を以て、強ひて此の篇を起せしと雖も、起草以來前後十日を費しぬ。思想斷續、文氣一貫せずと雖も、今は暫く之を以て責を免れ置くの外なし。

猶ほ筆を擱くに臨み、余は此の論文起草に關し、戸田博士の論文（『太陽』一月號及二月號所載）より有益なる刺激を受けたる事を附記し置くの適當なるを覺ゆ。（二月十四日附記）

我邦の生活問題

每月坊

生活問題は歐米列國の共通問題にして、學者、政治家は勿論、國民を擧げて皆其解決に勉めつゝあり。近頃我邦に於ても又此問題は漸やく世人の注意を惹かんとするの傾向あり。然れども吾輩を以て之を觀れば、

我邦の生活問題は、歐米の生活問題とは其趣を異にし、從て之が解決方法の根柢に於ても亦自ら異らざるを得ずと信ず。

一言にしていへば、歐米の生活問題は、富の分配問題にして、我邦の生活問題は富の生産問題なり。勿論我邦の生活問題にも富の分配問題が全く與からざるにはあらざれども、其主もなるものは富の生産問題たるは疑を容れず。若し富の生産問題にして解決すれば、富の分配問題の解決も亦自ら其中に含まる丶の趣あり。

合衆國の産業は近十數年間に長足の進歩をなし、今や英國の富强を以てするも、其後へに瞠若たらざるを得ざるに至れり。合衆國の今日ある其原因一にして足らずと雖も、其主因は關税政策によつて國内無限の富源を開發したるにあり。然れども産業の長足の進歩は、同時に物價の騰貴を來たし、貧富の懸隔を生じ、從て到る處生活問題を惹起し、終に國民多數をして、十年間政權を掌握したるレパブリカン黨を去つて、相率ゐてデモクラット黨に趣かしむるに至れり。而してデモクラット黨にして生活問題を解決せんと欲せば、勢ひ關税を輕減し、物價の騰貴を防遏し、多數細民をして其生活を容易ならしむるの手段に出でざるべからず。若し其政策茲に出づるに於ては、多年其基礎を關税に置きたる合衆國の商工社會は一時之が爲めに非常の打撃を蒙らざるを得ざるべきなり。

聯邦統一以來、獨逸の産業亦長足の進歩をなし、其富强大陸を壓倒して儼然覇者の地位にあり。而して其之ある主として、又關税政策を行へたるに由る。然れども今や獨逸に於ける諸物價大に騰貴し、勞働者の賃銀亦漸やく騰貴して、之が爲めに生産費の増加を來たし、一旦英國の工業を奪つて販路を世界に擴張しつ丶ありし處の工藝品中、再び英國工業者の手に恢復せられしもの尠からず、動もすれば産業衰退の徴候を現はさんとするに至れり、關税政策は一面産業を助長したると同時に、他の一面に於ては、物價を騰貴せしめて貧富の懸隔を大ならしめ、以て社會主義の流行を來さしめ

たり。而して關稅政策によつて勃興したる產業は又關稅政策の弊害によつて適々衰退を來さんとするの狀あり。

英國產業の發達は世人の知るが如く、自由貿易の政策によつて今日の隆盛を來したるもの也。これ國情自ら自由貿易主義を取るに便なるに出づるものにして、合衆國及び獨逸とは全然其趣を異にせり。然れども近年に至つて、生活問題の解決を迫るの急なる、終に現內閣をして、陸海軍費に次ぐ所の巨額の國費を養老年金に投ぜしめ、又富豪の最も厭ふ所の地租增徵案を提出せしむるに至れり。又在野黨をして、建國の基礎ともいふべき自由貿易主義を廢して、極力關稅政策を唱導せしむるに至りたるもの、畢竟するに依て以て國內の產業を發達せしめ以て無數窮民をして其職を得せしめんと欲するに外ならざるなり。

之を要するに、世界の三大强國は、至難なる、而かも當然來るべき生活問題を解決せざるべからざるの地位にあり。而して之を解決するには、何れも富の分配を按配するの政策を取らざるべからずして、富の生產問題に至つては殆んど之に與らざるなり。

凡そ一國の產業は、土地、資本、及び勞力の三要素に依ることは云ふ迄もなし。而して我邦は、其富源に於て、將た其資本に於て、到底歐米三大强國に及ぶ能はざるは甚だ遺憾とする所なれども、幸に勞力の供給に於て頗る豐富なるの一事は、以て土地資本二要素の乏しきを補ふに足るべし。然れども試に近年我國の經濟狀態を觀察すれば、頗る憂慮に堪へざる者あり。例へば近十年間に物價殆んど四割を增加し、勞働の賃銀亦三割を增加せり。人或は物價の騰貴が、勞働賃銀の騰貴の程度に超ゆるを見て、直ちに勞働の豐富なるに基くと解釋するものありと雖も、凡そ物價下落の際には賃銀眞先に下落し、物價騰貴の際には賃銀最終に騰貴するの世界的事實を知るものは、勞働賃銀が遠からずして物價騰貴と同一の程度に騰貴するの日あるを信じて疑はず。歐米三大强國の國富に比すれば、我國の富は現に十の一に過ぎず。而して年々增進する所の國富

の分量も亦此三大强國に若かざる我邦に於て、獨り物價の騰貴と賃銀の騰貴の速力に於て、殆んど此三大强國にも優るの事實を見るに至つては、我邦は果して何れの日に於てか、よく富强を世界に爭ふことを得べき。寔に心細き次第と云はざるを得ず。

此故に我邦に於て産業の發達を圖るには、主として勞力の豐富なる供給により、低廉なる賃銀を利用して以て、土地資本の供給の足らざるを補ふの一法あるのみ、而して低廉なる勞力を供給するには、勉めて物價の騰貴を避けざるべからず。國の富の自然の增加により若くは、國の産業の發達に基く勞力の需要より生ずる所の賃銀の騰貴は敢て忌むべきにあらずと雖も、誤れる政策によつて生ずる所の物價及び賃銀の騰貴は、我國の富の唯一の要素たる勞力をして終に之を用ふるに所なからしめんとす。

人爲により、誤れる政策によれる不自然の物價騰貴は、我國に於て産業の發達を阻害すること殊に斯くの如きものあるに反し、歐米に於ける物價の騰貴は、貧富の懸隔を生ぜしめ生活問題を惹起すと同時に、一面には産業の發達を助長せしめんとする事實あり。故に歐米の生活問題は、之が解決の途を主として富の分配を按配するの政策に取るに過ぎずと雖も、我國に於ける生活問題は、主として之を富の生産に屬する政策に待たざるべからず。生産問題確立する時は、生活問題も亦自ら解決せられ、純然たる富の分配問題を攻究するの時代は我邦に於ては遠き未來に屬すべしと信ず。物價の不自然なる騰貴を來たす誤れる政策については、更らに題を改めて之を評論するの日あらん。

佛國大革命の巨魁と社會主義

文學博士　箕作元八

ヨーロッパ現今の社會黨は、追々に進化して、ドイツ社會民主黨の如きは必ずしも財産廢止や軍隊廢止を主張せず、其勢力も益々盛んになつて、今や何人も其存在を認めざるを得ぬものとなつたのである。然しながら從來社會黨の大主趣とする所は、財産を共有にし、個人を社會に隷屬せしめ、各人成るべく、他よりも餘計に不幸なることなく、又他よりも餘計に幸福なることを得せしめぬにあつたのである。其起りは、ラッサール、マクルスの徒よりズッと以前、即ちフランス大革命時代にあると云ふ者がある。彼の社會黨の新聞杯を見ると、例の鮮血杵を漂はしめた、酸鼻極まる恐赫時代(Le Terreur)(千七百九十二年より同九十四年に至る)に於て、阿修羅王の荒びを爲したる、革命黨の大首領、ロベスピエール等を以て、彼等の高祖の如く唱へて居る。然し仔細に調べて見ると、これはチト間違つて居ると思ふ。今此事を少し許り談して見よう。

或一派の學者は、フランス大革命は一の政事的革命て、千八百四十八年の革命は社會的革命であると、既に定說であるかの樣に云つてのけるのがあるが、之も亦チト間違つて居る。彼の大革命の前には政府が專制て、社會が不平均て、貴族獨り權を專らにし、富を專らにし、負擔を免れ、凡ての階級が互に隔離して居つて、組合等の組織が面倒て、總ての自由の行動が出來なかつた。然るに革命の結果、此階級的社會組織を打破して、第一番に、個人自由の社會組織を形成した。之は社會的革命てはあるまいか。さり乍ら、之は勿論消極的てある。そこて其時代の極端派の大立物は、此マンチエスター主義と云ふ可き、個人放任自由組織を

以て滿足して居りながら、この個人主義の正反對なる現今の社會主義を唱へて居つたが、其邊を研究するは頗る面白い事であらうと思ふ。

大革命は、十八世紀の革新文學論者の議論が基になつて居る。其中で最も名高い、社會主義の預言者(プロフェット)と、普通稱せられて居る、ジァン・ジアック・ルッー（Jean Jacques Rousseau)は如何なる考であつたか。彼の財產に關する說は、時に依つては如何にも彼が社會主義の預言者と云はるゝ確かな理由となるが、又時に依つて全く夫と反對で、詰る所彼の所論は自家撞着に陷つて居る。多分ルッー自らも、明瞭に分つて居らなかつた爲めであらう。先づ彼が社會黨臭き意を示したのは、彼の著書「人類不平等原因論」(Discours Sur L'Origin De L'Inégalité Parmi Les Hommes) に見えて居る文句で、即ち左に擧ぐる如きものである。

始めて土地に圍ひして、「これは吾物だ」と云つた人ありとせよ、而して他の者等は愚にして、それを信じたりとせよ。この人こそ眞の文明の創立者なり。若し此時更らに一人ありて、其仲間に向ひ、「汝等此大騙者の云ふことを聽くこと勿れ。汝等若し、生產物は凡ての共有にて、土地は誰人にも屬せぬといふことを忘れなば、それこそ汝等の身の破滅なるぞ」と絕叫したならば、人類の爲めに、如何に多くの罪惡、戰鬪、殺戮、不幸、殘禍は、無くて濟みしならん。

これは確かに財產共有論、即ち現今の純社會共產主義を預言したものに相違ない。然るにルッーは、決して何時でも財產を非難しては居らぬ。彼は「財產所有は根本的權利であつて之を樂むことは、社會より個人に許した事だ」といふ樣に斷言して居る。畢竟ルッーの理想は、現今の社會を變じて、人間の需用少き自然の有樣に回復するといふにあるから、思ふに、彼の注意は、貧民をして富人と等しく利益を得しめる、といふ外には出ないのである。彼は社會の顚覆を唱へて居るが、實際の手段は餘り述べて居らぬ。自分にも分らなかつたのであらう。唯やゝ彼の實際手段とも云ふ可

きは奢侈税と進級的租税を課することてある。然らば彼の目的は、極端なる貧富の懸隔を減却するにあつて、今の國家社會主義——即ち經濟學者中に行はれ、日本を初めとして諸先進國家政府の取つて居る主義——以上に馳せては居らぬものと見える。ルソーの所謂自然狀態に返るといふ事は、多少最もな理由を含んで居る。彼は文明は不自然を產出すと唱へて居るが、或場合に於ては、如何にも其通りである。彼の十八世紀のヨーロッパの社會の組織は、實に不自然を極めて居た。此不自然なる狀態を形成して居る聯鎖を引切り、障壁を打破るは、即ち自然に返るのである。然しながら併せて文明をも捨てゝ仕舞ふのは、禽獸に近き野蠻時代の自然狀態に返ることとてあつて、餘り感服することてない。當時の人が、此說に瞞着されたのは、ルソーの議論の組立てが如何にも上手だから、十分素養のない人は迷はされ易いからてあつた。ボルテール（Voltaire）が嘗て、「ルソーの著書を讀めば、何となく四つ這ひになつて、草を食ひ度なる」と冷評したのは、ルソーの文學的腕前の好き證辯てある。去り乍ら野蠻的自然に返るとは、如何にも愚論てある。文明を維持しつゝ、否之を進めつゝ、自然的狀態を成るべく保つて行くのは、最良法てある代りに、又非常に込入りたる經濟的問題てある。ルソーはそんな事を少しも考へずに居つた。

そこて大革命が起つて來た時、初の程は主働者は重に上中等の財產家てあつて、彼等は階級制度を廢して、其政事上の權利、社會上の位置を得ようとして、小農社會勞働社會を其助にせんとし、大に人權說を唱へて之を煽動した。其結果革命の初期に於て、財產社會は、社會上同等權を得、經濟上運動の自由を得た。農民は封建的農業の重き壓力を免れた。勞働者は勞働の自由を得たが、さて此勞働社會が、自由、平等、同胞の三主義を歡迎するに當り、之に非常なる好望を屬して居りしにも拘らず、彼等の狀態を顧れば、以前と大した差異はない。彼等は依然、小給料の下に勞働せねばならず、其勞働の口とて矢張り前の通り、何時でもある

と極つて居らぬ。彼等が疾病不幸等に出逢へば、失張り少しも其困難を救濟する道がない。否彼等が幸福を得る手段として歡迎せる大革命は、經濟社會に一時不安を與へたる爲め、事業は手控となり、物價は騰貴し、高利貸抔が之を利用して跋扈し、勞働者は恰かも財產社會に欺かれ、その道具に使はれた上、酷い目に逢はされたといふ感を起したのは無理もない。從つて彼等は一方ならず憤激の念を發した。ダントーンが「我々は革命を仕遂げたり。我々は其代價を受取らざるべからず」と絶叫したのは、直ちにパリの勞働者の聲であつた。

然しながら、此時勞働者(プロレタリア)の勢力は未だ固定して居らず、財產家(ブルジョアジー)は議會で多數を占めて居り、又國民軍隊(ガルドナシヨナール)を其助として居るから、此等勞働者の不平を、力を以て壓せんとし、千七百八十九年十月には、暴動一揆に關する法案を通過し、千七百九十一年七月には、勞働者の運動を銃火によつて鎭靜した、また勞働者黨はストライキを作戰計畫に用ひ初めたから、之に對して一工場內の勞働者の聯合を嚴禁する法案を作つた。又最初に作つた憲法には、業々しく「人間の權利の宣告」を前置とし、自由平等說を無暗矢鱈にひけらかし乍ら、選擧權は年々三フラン以上の直稅、或は三日間の賦役を爲す者に限り、被選權は、五十フラン以上の直稅を拂ふ者に限つた。其位なら馬鹿に平等〳〵と、ルソーの空想を繰返するに及ばぬ筈である。故に勞働者黨の巨魁マラー(Marat)は、「階級的貴族に勝ちて、黃金的貴族に蹂躪せらるゝは、飛んでもなき利益だ」と叫んだ。

然し此時勞働者黨の勢力は、決して大したものではなく、若し外國との關係が無かつたならば財產社會が尙久しく勝を制したてあらう。之はフランスの歷史的發達上には、或は利益であつたかも知れぬが、此處にかの空想家を以つて滿ちたる財產社會が、わざと外戰を挑發した。此戰爭は外國の君主が、佛國の自由主義を惡んで、其撲滅を計つた結果であるといふ論者が隨分ある。成程多少此戰爭は主義衝突の意味が無いても

ないけれども、要するに此戰の起りは、フランスより挑發して居ることは動かないと思ふ。此戰を起したのは、財産社會にて、共和主義なるジロンド黨（Girondins）であつて、ジヤコベン黨（Jacobins）即ち勞働者を代表する過激黨は、初には此戰に大に反對したのである。然しながら戰爭の結果は、反つてジヤコベン黨の利益となつた。それは何故といふに、イギリス・オーストリア・プロシアの三國が聯合して攻めて來る。そして其宣言に從ると、全く革命の初る前の專制主義に復する目的である。少くともフランス人は左樣解釋した。之に於て人民は、とても之を忍ぶことが出來ぬ。況んや外國の兵に蹂躪さるゝは國辱である、と斯ふ云ふのが輿論で、此國難の爲めには、如何なることを忍びても、擧國一致で、防がねばならぬ。といふ意氣込である。斯樣な内亂外寇一時に來り、而して外寇が主として恐るべきものである場合には、保守にまれ、急進黨にまれ、極端黨が多く勝を制するものである。何故なれば、極端黨は其主義明瞭に定まつて居るから、處置に遲疑することが少なく、何んでも遠慮なしに、快刀亂麻を斷つ勢で、サツ／＼と遣つて行くから、ドーシても勢力を得易いのである。而して此時の形勢は過激共和黨に便であつた。それは王が私かに敵と通じて居る、と云ふ事が一般に信ぜられ、人々不安の情を有つ所であつたから、終に王は廢せられた後裁判となり、其後死刑となり、其餘勢は凡て多少舊時の狀態に戀々たる溫和派を仆し、終に勞働者を代表するジヤコベン黨が殆んど二年間、獨り勢力を振ひ、斷頭臺（ギヨツチン）を用ふるのみならず、多數溺殺（ノアヤード）、多數銃殺（フユジヤード）の如き酷刑を用ゐて、凡ての反對黨をして、疑懼の中にあつて、又抵抗するの氣力なからしめた。

そこで、此勞働黨萬歳の時に於て、社會主義が行はれたかと云ふと、決してさうでない。一時昔のローマ共和政治に倣うて、土地を人民に平等に分配する、所謂農的法案（ロアザグレール）（Lois Agraires）を用ゐ樣といふ話があつた。之に付き、ロベスピエールはジヤコベン黨會の席上で（千七百九十二年六月）云つた。「これまで、農的法

案は、富豪を威嚇する目的を以て唱へられた。然し此法案は、甚だ危險で、不正當で、而して實行し難きものである。……財產平等は、財產共有を前提とせねばならぬ。財產共有は、一層明かに迷想である。……我々の要求する所は、權理の平等である。何となれば、權理の平等なければ、自由も國民の幸福も得られぬものである。社會にして一度各人に必要物を與へ、勞働によつて生活するを得しめて、以て其義務を果したる上は、自由の友は富饒を求むることを爲さない。アリスチデスはクラッススの寶物を羨みはせぬ。正淨高尙の精神には別に尊重すべき財產がある」と、此中にあるアリスチデスは、ギリシヤ古代の名士であつて、淸廉の聞へ高き人である。クラッススは、ローマの非常なる財產家であるが、隨分不義の貪慾を顯はした人である。

此演說及び其他(千七百九十三年四月二十一日)の演說(餘り長くなる故略する)によつて、ロベスピエールは、社會黨の議論とは正反對であることが分る。國會(コンメンシオン)に於ては、終に「以後農的法案を提出する者は、死刑に處す可し」と決議した。

さて國會(コンメンシオン)は、王政顚覆後、新に共和政を立てるに付き、其憲法製定の爲めに會したのであるが、其憲法の首めに、「人間の權理」と「國民の權理」に關する一般定義の樣なものを置くに付き、前に述べたジロンド黨即ち財產家を代表する共和黨が、當時尙可なり勢力を占めて居つた頃て、起草委員會に多數を制して居つたから、財產所有權に關し、下の如く決議した。「人は其財產、資本、歲入に關し、凡て各の欲する儘に爲すことを得べし」と、之れ個人主義を何處までも唱へたのである。然るにロベスピエールは、極力之に反對し、「各人は、其財產中法律に依りて許さるゝ部分を樂み、且之を處分することを得」及び「財產所有權は、凡て他の權利と同じく、他人の權利を尊重するの義務に依りて制限せらる」と、斯う修正することを提議した。

彼が、ジヤコベン黨會に於て、財產所有權に關する其意見を述べた時に、斯う云つた、「若しこの人肉賣買

者(奴隷商並に仕用者を云ふ)に、財産とは何ぞやと問はゞ、彼は生きて居るらしき人間を多數に推つめてある、船と名づくる長き棺を指して、是我財産也、我之を一頭若干にて買取りたり。と答へるてあらう。土地臣下を所有し、或は之を失ひたるは、世界が顚覆した樣に心得て居る。この貴族に問へ。彼等は似寄りたる返事を爲すならん」

此演説は其語勢随分過激にて、(余がこゝに殊更ら略したる部分は更らに過激也)社會黨の臭氣少々見ゆるけれども、ロベスピエールの考は、現今一般法理學に認めて居る所以上には出て居らぬ樣てある。畢竟ルソーや、ロベスピエール等の考は、國家社會主義、即ち富人に課税して、貧民を救濟し、政府が自ら勞働問題に立入り、資本家と勞働者と共に適當の利益を得しめ、一をして他を厭はしめぬ樣にすること以上には、甚しく出て居らぬ樣てある。

ロベスピエールは、大革命の時、あれ程の勢を振ひ、一時殆んど獨裁君主の如き有樣にまて、威つたけれども、元來一の空想家て、且創始(オリヂナリテー)の才の無い男てあつて、ルソーの空想を丸飲にして居つた。そこて彼はルソーの唱へた進級税法を作り、又勞働者は必らず或勞働を與へられる法律を作つた。彼の人間及國民の權利起草案に斯う述べてある。「社會は之を組織する各人に對し、生計を助くる義務あり、即ち之に勞働を與へ、又勞働する能はざる者には、生活を維持する必要物を與ふべし」「貧困救助は、貧民に對する富人の義務にして、法律は此義務を行ふ方法を定む」此處を人が評して、社會主義だといふが、熟考して見れば、此理窟は現今已に先進諸國に多少認められて居る。プロシアの法律ても、イギリスの貧民救助法ても皆此理窟てある。我邦ても一部分此理窟を認めて居る。

ロベスピエールは、斯くの如く、個人主義には反對てあり、又純社會共産黨の論とも一致して居らぬ。寧ろ國家社會主義に歸して居る。然しながら甚だ不明瞭なる頭腦を持つて居つたから、財産の價値大なることを知らず、唯眞の國民は貨殖を思ふべからず、といふ

空想を根據として居つたのである。尤もジヤコベン黨中にも彼よりもモット純社會共産主義に近づいて居るものはあつた。マラーは甞て「權利の平等は、享樂の平等を來す」と云つた。これは大に純社會黨の理想に近づいて居る。又ジヤコベン黨の一人は「賤民黨(サンキウロット)の人權とは、凡ての生産物を仕用し、之を樂む事、衣食するの權利、賤民黨の繁殖を計る權利である」と絶叫した。之は隨分彼等の爲めに實際的の要求である。

さてジヤコベンが矢鱈に人間の理想を併べ立てたにも拘らず、彼等は實際に於て亂暴極る事のみして、經濟を甚しく攪亂した。即ち無暗矢鱈に財産を沒收し、無數の紙幣を發行し、麵包の最高價格を制限して、以て僅かに職業なきに苦める賤民を饑餓せしめざらんとした。

現今行はるゝ社會主義の先覺者ともいふ可きは、ロベスピエール等のジヤコベン黨仆れ、恐嚇政治終を告げたる後、即ちモハヤ所謂革命時代の終頃、其主義實行の陰謀を企てたバブーフ(Baboeuf)其人である。これは最も過激なる破壞論者で、ジヤコベン政府にさへ惡まれて數々捕縛された位の難物であつた。彼は千七百九十六年に、時の政府を顚覆して、其理想の社會を作らうとして、陰謀發覺し、裁判の末終に死刑に處せられた。彼は其謀の成りたる曉には、凡ての個人の財産を沒收し、之を共有し、政府之を管理し、人民に悉く勞働を當付けて、貧富の凡ての區別を除いて仕舞ふといふ考であつた。其人物は甚だつまらぬが、近世に於て社會主義を實際に試み樣としたのは之が初めてゝある。(完)

碁の名人



倫敦　大谷繞石

倫敦日本協會(ヂャパン、ソサイチー)の會頭はギルソン、クルウドソンといふ人てある。頗るの日本贔負(ひいき)て、日本の事物、何んても英吉利へ紹介しやうと力められる。住宅は倫敦正南の海岸へスチングスて、同地のヂャスチス、ヲヴ、ピイスを勤めて居られる。そして英國第一との評判のへスチングス、チエス倶樂部の會長もやつて居られる。

此人が日本總領事館の知人に碁を打つとが出來、そして說明を英語て爲し得る日本紳士二名の紹介を求められたのは十二月の初めてあつたさうな。そして小〇〇學士と僕とがその選に當つた。そして兩人とも同地へ出張して、碁を實地に打つて說明をするとを承諾したのが十二月の十五日頃だつた。

碁盤碁石は總領事所有のを豫め先方へ送つて置くから、當日行つて一二度打つて呉れさへすればよい。然し充分の歡待がある模樣だから、フロックコートにシルクハットて出掛けて貰ひたい、そして燕尾服を用意して行つて貰ひたいとの注意を、その領事館員から受けた。

承諾したはいゝが、仲々説明が六つかしさうだ。劫だとかセキだとかは何んといつて譯すべきだらう、なんどゝ、閑な折に考へ〳〵して居るうちに正月の四日に正式の招待狀を受取るとになつた。招待狀には一等往復切符(六ケ月間通用)が入つて居る。三時四十五分キヤノン、ストリイト停車場發に御乘になれば、五時廿分セント、レオナアヅ、オン、シイ、に御到着に成る。停車場まて御出迎致しますと添書してあつた。

當日――正月の六日、豫定の如く停車場までクルウドソン氏自ら自用自働車て迎へられ、その宏壯な邸宅へ案内された。着後早速茶の御馳走になり、二人別々の寢室へ案内をうけ、二人は其處て燕尾服に着換へ、鄭重な晩餐の饗を受け、八時過に自働車てクインス、ホテルへ連れられ、そしてその或る大廣間の倶樂部へ入つた。

四間に十五間位の長方形の大廣間だ。短い方は兩方とも壁て、長い方の一方も壁、その反對の側は廣庭の見晴らされる窓が幾つかある。燕尾服の紳士、盛裝の貴女が其處此處に一團を爲して話して居る。僕等がクルウドソン氏に導かれて、とある扉から入ると、何れも起立する。氏はその主もなる紳士貴女へ僕等を紹介される。僕等は一々握手する。

今夜日本の圍碁に就いて一場の講演をするといふチエシア老翁とは握手の後ち、色々碁のと、將棋のとを話した。

見ると、長い方の壁の中央に塗板が立て掛けてある。そして碁盤目に白墨て線が盛つてある。その塗板の四五歩前の處に、低い臺が置いて、碁盤が載してある。そして兩方に椅子が一脚づゝ置いてあつて、碁盤から二三歩の半徑を以て、椅子が幾列にも半圓形に置いて

ある。御前競技といつた見えてある。聞けばチエシア老翁はチエス、ドラフトに類した古今東西の競技を心得て居られるのださうて、日本の碁を此の倶樂部員に紹介せんとて、自分て講義されるのださうな。僕等は實地對局の上、倶樂部員の合點しかねる箇處をちよい〳〵說明しさへすればいゝといふ。少しく安堵の胸を撫てる。

間も無く男女倶樂部員は幾環をか爲した椅子に就いた。僕等もその間に座を占めて、鹿爪らしい顏をして居る。ふと見ると部員は何れも四五枚綴ちと見ゆる小さいパンフレツトを手にして居る。一寸借りて表紙を見ると驚いた。

Hastings and St. Leonards Ches Club.

GO

Summary of the Game

written For the Occasion of the Visit of

Prof. T. K...... ....

and Prof. M. Otani,

January 6th, 1911,

At the Club Rooms

Queen's Hotel, Hastings.

と立派に印刷されて居る。裏を見ると、

I put these few notes together for the visit of the Japanese experts to the Hastings Chess Club....

とある。エキスパアトには冷汗が流れる。僕は笊も笊の大目笊だ。初段に正目風鈴ても覺束無い。そいつが名人として披露せられて居るのだから驚いてしまう。

チエシア老翁徐ろに立つて、塗板を後ろに咳一咳辯じ出した。

"Go" is a great Japanese national game, taking the place with that Oriental people that Chess does with us.

てなとを冒頭にしてその傳來の筋道を述べて、さて

Its rules are simple enough but the strategies

and finesse of skilled play make it exceedingly complex.

など、一寸嚇かして置いて、四つ目殺しから話を初めて簡單に方法を說く。進んで

When a player has an adverse man or group in his power from its not being able to form more than one mé (eye), he does not, as a rule, immediately surround it, as he would be losing valuable time elsewhere, but in leaving it too long he sometimes loses the opportunity.

といつたやうな注意まですする。そして簡單な死活を塗板の上で聽衆に書いて說明した。仲々旨いものだつた。

講演が終る。愈僕等二人の番だ。

二人はえらさうな顔して塗板を横に、椅子に腰かけて盤に向つた。僕等の手を、遠くに居る聽衆否な觀客に充分見えるやうに、石を下す毎に、塗板にそれを現はさうといふ。然し大變な手間だ。それよりか僕等自ら塗板で打ちませうかと提議した。それならば殊に好都合とあつて、燕尾服の二人塗板の前に突っ立つ。拍手の聲四方から起る。微笑したくなる。

塗板の地が黒いので、黒石は厚い赤い紙を圓く切つたので現はし、白石は白紙を圓く切つたので現はすようにしてある。留針が幾百本か箱に入れられて兩人に渡される。

塗板の下の左隅へ、高目に僕は黒紙を置いてピンで留める。小〇〇學士は上の右隅に三の四と打つて、ピンで留める、といつた次第で、一度〳〵ピンで留めるのだから厄介だ。

相濟まぬ譯だが、早く勝負をつけぬと見物の退屈を催うす恐れがあるので、二人とも思考もせずにずんずん打つ

「八百長でやらう」

とは、倫敦で決めて來たのであ　。大速力で打つ。右手の親指がピンの尖頭で痛くなつて來る。

どうかして僕が白の二目を取るとになつて、ピンを

抜いて白の圍紙二枚取り除けたら、三四の貴女が拍手した。も少しで吹出す處だつた。チエシア老翁

『まだ勝負ぢやありませんよ。二つや三つ取つても大局には關係がありません』

といふ。幾十の見物は鳴を鎭めて見て居る。僕は考無しでトツトと打つ。不圖氣が注いて見ると、左上隅近くの僕の二十目計りの石が、缺目許りで、死んで居る。驚いた。

『殺さんやうにしたまへ。餘り違ふと可笑しいから』

と、他人にはきこえぬ程の聲で小〇〇學士に日本語で歎願に及ぶと、

『どうも困つたな。もう圍んでしまつたから仕方が無いぢや無いか』

と、同じく日本語で小言で囁く。そこで僕は、

『貴女並に紳士諸君。一寸私の石に就いて說明を致します。此の左の上隅の、此の私の石には、所謂眼がありません。此處へ敵の白が打つと、已むを得ず此處を黑がつながなきやなりません。此處へまた白が打つと、此處をつながなきやなりません。畢竟黑には眼が二つは無いことになります。私は此處で他の黑と連絡して居ると思つて居ましたが、考違てありました。それで此處は見棄てゝ、他の方面で戰爭をすることに致します』

と、餘り滔々でも無い英語で辯ずる。チエシア老翁

『他の黑と連絡は出來ませんか』

と尋ねる。小〇〇學士が

『もう出來ません。假令黑が斯う出るとしても、私は白で斯う防ぎます。斯う出れば斯う致します。それで如何にしても黑は他の黑と連絡する譯には參りません。』

と說明する。チエシア老翁は、何か書いた物で碁の方法を知つて居られるらしい。對局されたとはないらしい。小〇〇君が說明し終ると、

『フフーン、成る程』

と言ふ聲が、見物の或る紳士の口から洩れた。

僕はどうにかして、失つた丈けの黒を他方面て恢復しやうと力めたが、其甲斐無くして終局に及んだ。地の勘定が事件だ。一々留針を拔いて圓紙を置き換へなきやならぬ。

斯うして双方占領地域の數量を一目で判るやうにするのです、と説明する。

地を造り上げて見たら、小〇〇學士の地が八十一、僕の地が五十八、差引き二十三目の大敗だ。名人が聞いて呆れる次第である。

チエシア老翁の後に居た、古い燕尾服着た小男が小〇〇學士の横へ來て、

「スコアはどうです」

と尋ねる。

「黒の方が二十三敗ケてあります」

その男は手帳に何んだか書き留める。新聞記者らしい。そして

「随分長時間かゝると豫てきいて居りましたが、唯今のは三十二分で勝負がつきましたな」

と言ふ。ボクシングでも見るやうなとをいふ。名人の對局三十二分にして終つたかと思ふと、可笑しくて仕方が無い。

二人は見物の方をむいて厚く一揖して退いた。喝采と拍手の音室を撼かす。

別室でリフレッシユメントの馳走になる。今夜の會の招待劵の裏へ日本字と英字とで郷貫と姓名とを書いて吳れと請求せられる。われも〱と紳士貴女——多くは貴女が二人を取圍む。小〇〇學士は

日本〇〇〇
小〇〇〇〇

と認める。僕は同君の書いた後へ、或は前へ

日本金澤
大谷正信
Masanobu Otani
Kanagawa,
Japan.

と切りに萬年筆を振ふ。金澤生れてはないんだが、

都合上金澤の人間だといふことにする。
中に熱心な人があつて、碁盤で一局打つて見して呉れといふ。倶樂部の部屋へかへつて四五十手打つて見して、布石の説明をした。

再び自働車に乘せられてクルウドソン氏方へ歸つたのは十一時に近かつた。更に食堂へ誘はれてサンドキッチやカフエーの御馳走になつて居ると、電話が掛かつて來た。主人は

「エキスキユウス、ミイ」

て出て行かれたが、暫て歸つて來て

「此處の新聞に御兩君の御肖像を掲載したいから、御承諾を希ふ。就いては明朝九時に撮影に參上しますから、よろしく御願する、といふことです。許してやつて下さい」

とのことだ、小〇〇學士

「承知致しました」

といふ。主人は直ぐそのことを返事に電話口へ行つた。

僕は主人にきこえぬやうに、日本語て、

「えらいことになつたものだな。日本の碁の名人なんて見出しを置いて新聞に書くんだよ」

と囁くと、小〇〇學士は、

「仕方が無いから明日の晩方迄は碁の名人になつて居やうぢや無いか」

と言ふ。

翌朝果して正九時に新聞記者が寫眞師を伴ふて來た。二人は庭園程よき處に椅子に掛けて撮影された。

明治四十四年は一月の九日の發行にかゝるヘスチングス新聞(撮影の翌日は日曜て新聞は出ぬ)には僕等兩人の寫眞が、當地へ出張されたる日本圍碁の名人として麗々と載つて居る。(一月十五日認)

島の人（中）

黒頭巾

其一

●吾輩嘗て、肥前の名護屋城に登臨し、茫々たる碧海に、鵬雲の飛ぶを望む。「絶海樓船震大明」の遺址は則ち此處、勝男嶽の絶頂に立ち盡して、パノラマを開展するが如くに、山下の平原に殘る諸將の陣營に、草の美しく綠なすを見れば、太閤の雄圖は尙ほ眼前に在り。

●名護屋の事は、茲に絮說せざるべし。名護屋灣には、今、尙ほ無數の和船を泊す。其の呼子港に對するの岸上、老樹蓊欝として、翠を凝らす、一帶の蒼崖則ち、太閤が、征韓軍の出帆を見送る處といひ傳ふ。

●松浦法印日記にいふ、全軍旣に艤裝し畢り、錨を拔き、帆を揚ぐ。法印、舷頭に立ち、拍手して、八幡大菩薩を三拜して、勝聲を揚げ螺を吹く、日まさに午也。太閤、乃ち、崖の上に立ち、陣羽織を着け、日の丸の金扇を擧げて全軍を麾く。日光赫灼として、金扇に輝く。

●勝男岳の絕頂は、名護屋城の本營の在りし處、頂上、方數町に過ぎずと雖も、四邊、老松聳えて、長風に聲あり。吾輩、頂きの草原をあさりて、諸大名の紋打つたる古瓦數枚を得たり。時には五三の桐の瓦を堀出すこともありといふ。

●五三の桐の紋、何んぞ雄偉なる。此古瓦の一片に對すれば、無數の感興湧く。想ふに、彼の蓋世の英雄は、此の瓦の下に立ちて、韓海を睥睨したりし也。

●此の感興多き大本營の古址より見渡す海上に、雲濤縹渺たる中に壹岐の島あり。稍近くして、青々たる長き島は、馬渡島。而して、名護屋半島の眞前、名護屋灣の入口に、眼下に見る田島あり。

其二

●太閤の名護屋城に在ること數年。日々、策戰に忙はしと雖も、英雄自から閑日月無くんばあらず。美人を蓄へ、風光に憧がる。愛妾廣澤の宅の址には、朝鮮土產の美しき蘇鐵、青々として繁茂す。

●或はいふ、太閤、明月に、軍營を微行す。月漏る萱

の屋根の下に、破鍋掛けて、芋を煮つゝも、一曲の尺八に秋光を賞する武士あり。

●軍中の風雅は、いみじき物語少からず。茲に說き盡さず。大閤が餘念無く、閑日月を樂みたるは田島なるべし。

●田島には、田島神社あり。國幣中社也。此島、古より人家あり。其の風景の、溫藉にして變化に富めるは、九州の一美島たるを失はず。

●田島神社の、社務所のある處は、海水灣曲して深く入り、翠樹四周、風景溫和。實に、別莊の理想境といふも不可ならず。

●島の人、相傳ふ、田島は、太閤の晝寢の床也と。太閤ならずとも、涼風に、此の島に、閑臥せば、飄々として羽化するならん。

●田島神社の扁額に、極めて痛快なるもの一あり。伯副島蒼海の筆蹟、雄健、殊に見るべし。此の額や、小鷹丸の艦材を以て造る。小鷹丸は、征韓軍の報知艦。功就つて、解きて艦材を神社に納む。厚き〳〵楠の板、餘香尙ほ傳ふ。

●神社の祠官は、中將宇都宮太郎の養父、元氣能き老翁なりき。童顏にして白髯毿々、盛んに伯大隈を論ず

吾輩、此人に請ふて、神社の寶物を得るを得たり。今、健在なりや、如何。

●寶物の中、紀念すべきは、古祠の板に樂書せる太閤の筆蹟也。今、小祠無し。常年、小祠ありて、其の內扉に、晝寢の寢覺めに、太閤の樂書したるものにや。

●樂書の扉は、板舊るく、墨痕殆んど浮び上る。平假名ばかりにして、往々、異字あり。讀み易からざれども、俗歌や、出鱈目の文句を並べしと思はるゝところ少からず。

●此の筆蹟に、太閤と傳ふるのみ、證左あるにはあらず然れども、神祠の內扉に樂書するは既に容易にあらず。文句の中に『犬千代どのは、日本一の若衆』とあるもの、尤も面白し。而して筆勢雄渾、何となく、太閤なるらし。

●今、社前に、小祠あり。佐用姬を祀る。相傳ふ、佐用姬、頭巾振山に登り、狹手彥を慕ふて已まず。飛んで、此島に落ちて、化して石となると。祠中に祀るもの、則ち佐用姬の留魂石也。戲曲に「夫を慕ひ、石になつたる松浦潟」といふもの、或は是乎。

●吾輩、其の留魂石を見るに、醜岩、約一坪の中に廣がる、渾沌として、巨牛を潰ふしたるが如し。如何に、

佐用姫の大女なるぞや。

●此の石、昔より在り。太閤、此石を見たるとき、其の愛人に、何とか囁やきたりけん。

其　三

●吾輩、名護屋城上より、馬渡島を望み、其の翠色の美なるを見て、何と無く、遊意の勃々として起るを禁ずる能はず。

●其後、島の人に依つて、島の歴史を聞き、此の島が、吾が西敎史に逸す可らざるものなるを思ふ。島と、本陸との交通は甚だ少なし。郡長と雖も、知ること稀也唯だ、其の小學校あるに依て、時々、郡視學の出張するあるのみ。

●長崎附近の小島は、切支丹の殘黨に因縁ある者少からず。而して馬渡島は尤ゝ趣味の深きものたる也。

●世人は、長崎に、浦宗の一區劃、三百年來、切支丹の餘壘なることを知る。馬渡島あるを知る者無し。大村は、一時、切支丹の巣窟たり。今、其の舊蹟に、僅に一の天主敎會あるのみ。天草の東向寺は、稍、其の名を知らる。然れども、馬渡島は、海上に於ける、唯一の切支丹の五家庄たりし也。

●聞說、馬渡島は、全島擧つて、切支丹也。全島、一村、風俗淳撲、尙ほ、共產制度の太古風を帶ぶ。扶養、救濟の美俗甚だ厚し。

●此島に、今、天主敎會あり。小學校の敎師と共に、全く、島人の精神界を支配しつゝあり。

其　四

●「姉は長崎に、妹は島原に、櫻花かや、散り〳〵に」の一曲、天草島を現示す。天草島は甚だ大也。然れども、語るべき人物、多くあること無し。移住民、醜業婦、長崎藝者。天草島の名產也。

●吾輩、一夜、神田を過ぐ。明月、中天に懸り、滿月唯だ寂寥。蕎麥屋の出前男、右掌に出前を載せて、「雲耶山耶吳耶越」を吟じつゝ行く。

●天草の島人は、山陽に感謝せざる可らず。天草の名を出前男にも知らしめたるは、彼の賜也。幕末に柴秋村あり。阿波の詩人也。天草歌の一篇、光采あり、また誦するに足る。

●德富蘇峯、嘗て、撰擧運動の應援の爲に、天草に往く。惡路、島中、俥頗る困難を極む。而して、到れば、有志者の幹部、入り違つて、既に熊本に去る。

●男肝付兼行水路測量の時、嘗て、舟を天草に泊す。風起つて行く可らず。村家に滯任すること十日、米無

きに苦しむ。如何に懇請するも、麥と芋とを饗するのみ。

●彼、遂に一策を案出す。齎らすところの太白砂糖を出して主婦に贈る。家人皆いふ、これ砂糖に非ず、必らず鹽也。砂糖ならば黒かる可き也。彼いふ、試みに之を嘗めよ。

●此の島人、彼に依つて、砂糖必ずしも黒からざることを發明す。主婦、深く、彼に感謝し、秘藏の白米を出して答禮とす。平凡なる奇計、遂に米を海し得たり。

●此の島人にして、現代に知らるゝ者、唯だ細川雄次郎あり。篤實なる老學者也。汲々として、財政統計の學に從事すること、十年一日の如し。

●細川の財政史に關する著述少からず。いづれも統計的の論述ならざるは無し。彼は、數字より割り出して、財政史論を立つるを得意とす。而して、彼が財政の統計を記憶するの精博なるは、大藏官吏を驚倒せしむるものありと聞く。

其 五

●九州より下關海峽にかけて、尙ほ著名なるは、鬼界島。姫島。志賀島。及び、岩柳島、彦島、六連島あり。彼の三島は、海峽に在り。

●鬼界島は、俊寛に依つて、文學に入る。此島を描くの精なるは、馬琴の俊寛僧都島物語を推すべし。俊寛の女が、其の父に寄する文の哀婉なる、平安朝有數の名文たるを失はず。而して、馬琴が、俊寛の臣有王丸の忠義を寫すも亦た涙に滿てり。

●俊寛が、島の生活は、眞箇に戯曲の好材料たり。馬琴は、此島を知らず。然れども、彼や、島の研究に深き趣味を有す。島の生活を描く、筆致、苦心の見るべきものあるは、之に歸因せずんばあらず。

●志賀島は、島人の紹介すべきものある無し。元寇の殘兵の漂泊するに依つて國史に傳ふ。今、唯だ白砂の茫々たるを見るのみ。

●姫島は、筑前海上の翠一塊。筑前の勤王史に、不滅の異彩を有す。女丈夫野村望東の謫居たりしに依つて也。望東に、姫島日記あり、文藻傳ふべし。

●望東は、筑前の勤王論を鼓吹して力あり。孤島に、配所の月を眺む。淼漫たる波上に、忠義の涙、美しき眼を霑ほす。

●望東は、博多の山莊に在り。筑前の史家は、月形洗藏、薩長の調和を斡旋するとき、此處に、高杉、西鄕の二雄を會見せしむることを主張す。而して當時、二

雄、酒間の詠懐數紙、尙ほ月形の家に存すと傳ふ。
◉一夜、海上、波濤暗し。高杉、孤舟に乘じ、姫島に來り、望東を救ひ出し、急に、下關海峽に向つて去る。
◉岩柳島は小倉の冲に在り。島といふよりも、寧ろ岩礁也。宮本武藏、佐々木岩柳の果し合に依つて知らる。碧血、沙石に沒し、唯だ松の木殘れり。
◉彦島、六連島は海峽の出口を擁す。六連島には燈臺あり。去る四十年、下關海峽開鑿の論、沸騰せしとき彦島を堀割りて、潮流の疏通を增進せしむべきの議あり。島稍大、町あり。

歐洲の美人

林田龜太郎

僕は西洋通でない。通でない僕に西洋の事を話せと云ふは無理な注文だ、其の無理な注文と知りつゝも浮かと君の上手に乘せられて、お饒舌をするのである。一寸お斷りしておくが、僕の西洋美人觀は所謂皮相の觀て其眞髓を穿つことは難しいと思ふ。

世界一の美人郷(倫敦)

さて、世界で一番女の美しい處は巴里だと聞いて居たが、吾輩が洋行して實際に就いて見ると、倫敦の女の方がズット優れて居る。一寸英國へ行つたばかりの時には左程にも感じなかッたが、一度大陸に遊び、再び倫敦に歸つて見ると、どうしても倫敦女の方がいゝ。第一倫敦の女は血色が優れて居る、巴里女の青白いのとは大變な違ひである。薔薇の花の樣な色、——日本で云ふなら、所謂櫻色だ。其の原因は幾個もあるだらうが、英人は佛人に比して(一)夜早く臥して、朝早く起る事、(二)運動が好きな事、(三)食物が善い事等であらう。脊はスラリと高く、皮膚は美麗で且つ健康が非常に勝れて居る。——巴里女は夜見ると非常に綺麗だ。倫敦の女より優れてゐるのも尠くないが、それは巴里女は化粧が巧みなからであらう。巴里の女が、英吉利の少女は口紅を用ゐぬと聞いて、三嘆したと云ふのは名高

い話てある。奈何に化粧に巧みても到底天成の美には及ばない、此點からして吾輩は軍扇を倫敦女に上げるに躊躇せぬ。

此の美しい倫敦の女は、更に一層吾人を惱殺する底のものを持つて居る。英國人は他人を欺すといふ事を非常に嫌ふ。賣春婦と雖も此特質は備へてゐる。たとへ一夜たりとも、自分の爲には大事なお客として、全力を注いで歡待する。それに感心な事には他の國々の賣女と違つて、客の物を竊んだり、飲食をねだるなどゝ云ふ事をしない。

倫敦には今日十數萬の內侍が居ると傳へられて居る。芝居や寄席に行くと至る處に、それらしい姿が見える。下等なのは街道にも公園にも居る。芝居や寄席の打出しはかれこれ十一時半近くになるから、一寸紅茶の一杯も欲しいと云ふ時刻てある。その頃の飲食店はどの机も大抵花帽鶴裳の美人連が其の一角を占領して居る。程のよさそうな机を見付けて椅子に着くと女の方から何か話題を提出する、そして男の情緒を惹く様なあらゆる方法を講ずる。男が承諾すれば直に此處を切り上げて外に出る。若し此時女の方て、その占領して居る机に來た男が、嫌な奴だと思つたら、一切話しかけもしないばかりてなく、こちらから誘つても他に約束があるとか何とか云つて相手にしない。女の方から口說くといふのが、日本の女と違つた所て、而かも其口說き方が頗る巧みて、そして上品なものてある。

愈情約が整つて、外へ出ると、女は男と手を組んで自働車か馬車の合乘て自分の住居へ走らせる。住居だからといつて却々あなどられたものではない、少し腕の達者なのになると、月何百圓と云ふ家賃を出してゐる。勿論是等は上等の部てあつて、下等になれば公園のロハ臺や芝生を住居の代用として兵士や勞働者を相手にするやうな階級もある。是は何れの國も同樣てある。

倫敦の內侍は皆英國人ばかりかと云ふと、必ずしもさうてはない。たまには佛蘭西の女もあれば、獨逸邊から出稼に來てゐるのもある、所謂「渡り者」といふので危險分子は此種の者に一番多い樣だ。

英國は世界て一等風紀の嚴肅な處てあるから、魔性の出入する芝居や寄席抔は自ら限定されて居る。加之良家の子弟は、飲食店に往くにしても十一時までには引上げる。そこて十一時半頃になれば、町の空氣は一

變して嚴肅な英人も、淫佚な遊野郎と化した樣な看がある。併し是等遊冶郎の多くは他から入込んで來る羈旅の客であつて、純粹な英人は稀であるといふ事だ。

十一時半頃からのピカデリー邊の珈琲店の賑合は實に驚くべきものがあるが英國では警察がやかましいので、十二時半になるともう時間(タイム)だ「時間(タイム)だ」とは店の燈火を消して客を追ひ出す事である。此時間を勵行せずに大陸流の事をやらかさうものなら忽ち營業禁止を申付かるのだ。

大陸流といつたが、巴里では善良な社會と離隔せんが爲めに、十一時半頃を劃して全市を魔性の手に委するのは倫敦も巴里も同じであるが、倫敦の十二時半を限り料理店を閉鎖するに反して、巴里では夜の十二時又は一時から開店するのが多い。余は夜の一時からの宴會に招待された事がある。是は餘程考へたものであらう、全體風流の遊はドンナ嚴令酷罰を以てしても禁遏する事の出來ないものである。のみならず巴里にとつては此方面は非常な財源である、金穴である。巴里繁昌の大根源である。從つて之を禁遏するどころか却て之を奬勵する――までにはゆかぬともたしかに保護してゐるのである。巴里の巡査が袖下欲しさに異邦人を魔窟に案內するといつて嘲笑するものもあるが、是は外人の財嚢を絞る一策に過ぎない。列國の競爭猛烈である結果こんな方面にまで收入の道を付けねばならぬとは情けないが、そんな事にばかり君子振つたつて仕方がない。競馬券も同樣である。斯樣な事は獨り巴里ばかりではない、伯林でも維也納でも皆同じだ。

巴里美人

巴里は美人の本場である。一夜、巴里の繁華な街を散步して見給へ、到る處に無數の寶石を光らした、數十の美人に會ふであらう、貴婦人や令孃の散步と見ては甚だ失禮、孰れも有名な巴里美人の御本尊で、さそふ水あらば去なんとぞ思ふ柳の方であるのだ。外國人で一度巴里に足を印したる者は是等優美な巴里女の濃厚なる待遇を外に見て、手を空くして出立し得る者幾人あるであらう?

道德堅固な英國人でも巴里では治外法權だと云ふ。まして米國人と來ては一層烈しい。米國人が一年中巴里美人に捧げる賽錢の高が常に四億を超ゆるとは、驚くてはないか。如何なる事業にしても年に四億と云ふ利益は到底上らないのである。警察が內々保護してる

のも無理はない。

勿論巴里美人だつて上等のばかりてはない。十法よろしい、二十法オーライトも居る。普通の處なら一夕五十法から百法てあるが、女優となるとズット高い、時には五千法だなど丶偉い事を吹き懸けるのも居る。

賣春婦——彼等とて生れたてからの內侍てはなかつた。親しく其の話を聞いて見ると、又面白い。

「一寸した事が原因て墮落したのてす。こんな事をして居てはと思はないてもないんてすが、一度はまつてはもう足を洗ふことは絶對に駄目てす。考へて御覧なさい、資本といつて別に要えてはなし、常にうまいものを食べて、好きな男は一人ても二人ても三人てもこしらへられる、到底他の商賣てはどんなにしようたつて出來やしません。私も以前には暫く足を洗つて或る紳士のお圍ひ女になつた事がありましたが、やつぱり究屈てね、自分のしたい放題の事は出來ませんし、何處に行くのだつて旦那と一緒てなくてはならないんてしよう、ほとんど一年もたゝない内に惡い事を見つかつてお拂箱になつてしまひました。やつぱり昔の儘の此の商賣がよう御座います どうも今暫くはやめたくありません」

昔も今も人情に變りはない、遊女氣質は東洋も西洋も共通てあると見える。

伯林の花柳界

伯林の花柳界の盛んな事と來ては、有名な巴里も今の處てはそつちのけの有樣てある、とはある通人の話だ。

伯林には二種の賣女がある。一は鑑札を有するもの即ち娼妓て、一は鑑札を有せざるもの即密賣婦てある、而して鑑札を有するものが下等て、有せざるものに上等が多いのは巴里あたりと同じてあるが、伯林ては娼妓が日本あたりの樣に籠見た樣な所にのみ這入つて居ないてどん〱街頭や公園に出張して行く。たゞ皇居又は學校兵營の附近何丁より内に入るべからずと云ふ樣な制限と、外に其の女に特定せられたる散歩區域が鑑札て指定せられて居る。併し客と同行の場合は區域外に往つても差支ない。實に調法に出來たもので、到底日本あたりとは比較にならぬ。

無鑑札の連中に警察がやかましいのは當然てある。捕つて服罪しなければ、常に其の住居の周圍を警戒して商賣の出來ない樣にするから、三ヶ月ばかり國外か

何處かに逃げなければならぬ、若し逃げる事が出來なかつたら潔よく服罪して若干の罰金を拂ふて鑑札を受ければ安全になる。而して鑑札を受ける事を肯じない者も、三回取押へられると強制的に警察から鑑札を下附する、と云ふ話てある。殊に面白いのは、警官は賣女が客を家に喰へ込んで居る時には、決して踏み込んて之を檢擧する等の事をせぬと云ふ事てある。これは風俗の上から云つて或は本當てあるかも知れぬと思はれる。兎に角こんな有樣てあつて見れば前に言つたやうに伯林の花柳界が巴里を凌ぐといふやうになるのも無理てはないのてある。

維也納及ブダペスト美人

維也納は東歐の巴里だと云はれる丈けあつて、流行の第二中心點てある。女は色が白くて伯林よりも尤物が多い樣だ。寄席ても、芝居ても大體は伯林に似て居るが凡てが遙かに自由が利く。

ブダペストに往くと又一層自由だ。寄席て煙草を吹かしたり飮んだり食つたりする、日本のと同じだ。ブダペストの女は髪や眼の色が黒くて身長も比較的に低く眼鼻立ちが非常に日本人に似て居るので、日本人には非常になつかしく見えるし、日本人も亦非常に歡迎さるゝ。是れは匈國人は匈奴の末裔て日本人と同人種てあるとの觀念が幾分かあるからも知れぬが、實は日本人は武勇てあつて、其の不倶戴天の仇敵たる露人を敗つたからてあると思ふ。

又習慣も我邦に似てゐる。氏名を書くにも西洋ては龜太郎林田だが、匈國ては日本と同じく林田、龜太郎てある。町名番地も西洋ては一番地内幸町二丁目麴町區だが、此邦ては麴町區内幸町二丁目一番地だ。時日ても西洋ては二十一日二月四十四年だが、此處ては四十四年二月二十一日だ。コンナ工合てあるから種々の點に就て、我故郷懷しの夜などは、共に手を携へてゲレルトの古城趾に登り、或は多腦河に掉し、又はマルガレット島に遊ぶと、何だか他邦に居る心地はしなくなる。市は歐洲風だが市外に出ると其家屋や庭のつくり等はどうしても我邦の田舍てある。昔は隨分淫風の甚しい所てあつたが、近年、英國流の謹嚴な警察の下に取締を勵行して以來風俗は大に革まつて來たとの事てある。

露西亞女

余は虎疫に妨げられて、聖都には往かなかつたから、露西亞美人の本據を衝くことが出來なかつた。たゞ莫斯科で三日の間探検をやつた。随分美人は尠くない。而して淫風の盛んな事は恐く歐洲第一等だらうとの風評である。現に淑女の集會で「女は其の夫を定むるに先ち假に之と共棲すべし」抔といふ決議があつたのでも分明る。

結論

余は不幸にして伊太利と西班牙を見なかつた。併し其國々の美人には、倫敦でも巴里でも伯林でも維也納でも出會つた。伊太利美人の唱歌、西班牙少女の「カストロ」踊は中にも深く余の心を動かした。此の兩者は獨逸種族（チユートンレース）よりも日本人に近い、が、併し匈國女程ではない。言ふまでもなく美人は多い。が、之も矢張倫敦女には及ばない。以上の各國美人を喩へて見ると、倫敦女は江戸子である。巴里女は西京美人である。維也納女は大阪式、伯林女は或る意味から云へば鹿兒島式、或る味意から云へば名古屋式の樣だ。和蘭白耳義の女に至りては和歌山、松江のそれに比すべく、露國女は新潟美人としたら適當であらう。要するに各國皆其の特長があるが、全體として之を云へば其の色の淳白にして其姿のスラリとしたる、其の擧動の活潑にして健康の秀れたる、其の交際に巧にして表情に富みたる我邦に比類を求めても決して得られぬ特質である。余のやうな非「ハイカラ」主義の男と雖も、之を思うて長大息をしないわけに行かないのである。（完）



人物評論（十五）

西園寺侯論



△西園寺侯爵

尾崎行雄

西園寺侯は世間一般の人に對しては、疑問の人とせられて居るやうである。然しながら侯をよく知つて居るもの、眼から見れば、必ずしもさうではない。私は侯爵を頭腦極めて明晰で、總ての事が、人よりも早く、遠く見える人と思ふ。人は白粉を塗つた顔を見て、其皮膚を白く奇麗だと感服する、が西園寺侯は其白粉の

下の生地がよく見える。白粉に誤魔化されて先きの見えない人は、物事に熱中するが、西園寺侯の如く先きの見える人は何に詰らんといふ事になつて、熱中する氣になれない。之が世間から疑問とせらるゝ所であらう。功名富貴畢竟轉瞬の間に消ゆる水上の泡の如きもので、白粉の下の皮膚が見え、皮膚の下の骨が見ゆるやうな西園寺侯にとつては、どうしても功名富貴などに眩惑さるゝ譯に行かない。侯が物に熱中することの少いのは寧ろ當然の事である。獨り西園寺侯のみならず、さういふ人はいくらもある。尤も人によつては先きが見えても物に熱中する人が全くないでもない。さういふ人は多くは婦女子に驕るの情に富んだ人であるがそれは人の性情各々異るに由る故、孰れが高いとか低いとか、優るとか劣るとかいはれない、然し西園寺侯に至つては、婦女子に驕るの情の極めて薄い人であることは確かである。

西園寺侯は聰明絶倫とも稱すべき人故、苟も眼先きの利いた人は、侯が默つて居ても人が皆之を恐れる。無識者は或は之を侮るかも知れぬが、識者は必らず之を恐れる。即ち中以下の人には西園寺侯は左まで驚嘆せられぬが、中以上の人には畏敬せられる。

◎

唯、侯が現代のやうな世の中に政治を執るに適するや否やといふと、世の中の調子が一體に低過ぎる今日に於ては、侯の調子は少し高過ぎはしないかと思ふ。世人皆鄭衛の樂を喜ぶ時には本當の音樂を奏しても聞くことが出來ぬ如く、侯の調子は明治四十年代の日本人には或は分らぬかも知れぬ。西園寺侯の政治家としての本領については天下何人も之を疑ふものなからうが、其經綸を遂行するの手段方法及び本領以外の應接振り等については、餘り世人を引着して喝采せしむることが出來ぬ、侯は何處となく世間と少し離れて居る。世人の喝采を博するには矢張り時流と同じ位の迷信も持ち、又希望、勇氣其時代相應のものを持つて居らねばならぬ。然るに侯は少し高過ぎるか、遠過ぎるか、時流とは一寸離れて居る。だから喝采もされぬし、又今日の政治家として最上適任者とも思はれない。但し、他の今日喝采を博し、時勢に適したる政治家は、世の中から忘れられ、若くは唾棄せらるゝ時代が來るとすれば、さういふ時代には却て西園寺侯の光が大いに増すだらうと思ふ。

西園寺侯が物事に熱中しない、執着しないといふ主なる理由は勿論、其性格から來て居るが、又一つは

身體の虚弱なる所から來て居ると思ふ。兄の德大寺侯などから考へると、西園寺侯も元來弱い人ではなかつたらうと思ふが、若い時から華奢の外貌の中に豪放濶達の氣象を包んだやうな所があつて身體の攝制を重んぜずいはゞ身を持ち崩した趣がある。其結果から何時も餘り强壯でない。寧ろ虚弱な方である。身體の虚弱は精神に影響して氣力が乏しくなる。故に尙更ら、熱中忍耐することが出來なくなる。公卿中から出た維新以來の人物の中で、岩倉公と西園寺侯とは相並ぶべき二大人物である。然しながら寫眞でも分る如く岩倉公は身體强壯であつて、聰明に加ふるに熱力が强い。其他にも異る點があらうが此點最も兩卿の異る所と思ふ。

政黨の首領となつて仕事をするといふ事については、伊藤公も餘程困難を感ぜられた所である。其首領となるに當つてや、舊同僚からは殆んど逆賊呼ばゝりをせられ、後にはとう／＼樞密院に祭り込まれた。此點は伊藤公も終りを全うしたとはいへない。其他大隈伯、板垣伯、皆其志を廟堂の上に實現することが出來なかつた。政黨首領となることゝ、志を廟堂の上に實現することゝは、今日に於てはなか／＼兩立し難い。伊藤公も終に政黨をやめて了ひ、大隈伯、板垣伯は政權から離れた。獨り其中間を歩み得るやうに見えるのは今日の處西園寺侯一人である、尤もそれは、ゐ一公二伯の首領振りを研究した結果でもあらうし、又伊藤公が大いに力を添へた點もあるかも知れぬが、西園寺侯の聰明にあらざれば出來ぬ事と思ふ。まア此位で止めておきませう。よいやうに書いて置いて下さい。

△西園寺侯の特性

中村彌六

○明治十四年に墺國維納で、當時同國駐在の公使井田讓と憲法調で洋行中の伊藤公とが會談の折、井田は福澤諭吉翁の自助論に及んで頻に之を褒め立てたが、其時其席に居合せたのが今の西園寺侯爵で、盛に反對意見を出し反駁した、論旨詳明才思が溢れて居るので、伊藤公に陪して行き、此狀を目撃した私には、華胄者流に珍しい人才だと思つて來た、是が私の侯を知る最初なので、爾來昨年迄相會する兩三度ではあるが、深く相知るといふ中でない、從つて侯に就いては何等の

語るべき話材も持ちません。唯人の口からして聞いて居るのは、侯は非常に我儘の人だといふ位の事です。
○左樣ですな、伊藤公と西園寺侯！、先づ類型の人です、頭腦明徹共に理想を重んずるといふ點に於て。桂侯の如きは現實七分理想三分の人ですが、伊藤公と西園寺侯とは共に反對に、理想七分現實三分の人です。が一公一侯の間には一つの相違がある、それは功名心である、公にはそれが強いが侯にはそれが冷たい、功名心があれば從つて物事を華やかにしたがる、衆の歡心を得やうと勉める毀譽褒貶を氣にする、物外に超然として事に洒脫なるを得ぬ、西園寺侯にはそれがないから自然寡慾恬淡頗る禪味を帶びて來る、事に當つて執着心が無く、意に適せなければ、人臣の重位をも颺然として一朝に拋擲し、肯て拘る事をせぬ、行く雲流るゝ水の如くである、侯の我儘といふことも畢竟するに矢張り之を以て解する事が出來る。我儘といつても愛憎の念の強い人の勝手に人を近づけ又遂ふといふ樣な事でなく、華族社會に通有な我儘、例せば懶ければ用ありて訪ふ人にも辭を設けて面會せぬとか何とかいふ位の處、行住坐臥天眞の自由に任せて人の羈束を受けぬといふ程の事である。

○黨首としての如何？、左樣！其恬澹な所が却つて宜いでせう。型が同じいと上下互に抵捂して旨く行かぬものだ。即ち其下に就く幕僚連が名利心に富み、政權に憧れて二六時中心を痛める時に、其上に立つ黨首が又同じ樣な心を以て行動する人であると所詮は調和が保ち惡い然るに左樣ではなく虛無恬澹只理想を追ふて居る人であると、所謂ネゲチーヴとポジチーヴ、此兩極の作用に由つて電氣も作用を起し、熱を生じ光を發するといふが如く、互に相得て悖る所が無く、物事がスラ〳〵と行はれて行つて能く調和統一が保てる。
○政友會は今順境に居るから統一を保つに利があるが、若し逆境に居る政黨の首領としたら如何であらうと？、それでも矢張り能く行かうと思ふ、皆が功名心に強く、利達に志して居る時に、其上に明朗透徹な頭腦を有し、而かも胸懷脫俗事を斷ずるに直に理想を以てするといふ風の黨首であると、一層其人物に崇高の度を添へて見、敬服の念を強むる者である、此處が如何にも我日本人に特有な德性な樣である。衆心を歸服せしむるには如何しても此點が必要かと思ふ。大隈伯の如きも彼れだけの人物であるから、若し今少し功名心なく事に恬澹であつたなら、今少し政界に於て成功し、

大きい仕事が出來た事と想ふ。左も無くば類型なら類型でも宜しいから、黨首となるものゝ型がもちよつと大きくなくては行けぬ、例へば星亨の如く、同じく功名利達に憧るゝにしても、以て十分他を壓倒し、其下に慴服せしむる程大てなければならぬ。

○侯の特性は如何しても俳味とか禪味とかいつた様な超越的の處に在るが、天分固より然らしむるとはいへ、尙ほ其所以を尋ぬれば、家系閲歷、即ち境遇の上より自ら又然らしむる所以が存すると思ふ。一體華族顔なるものは如何様な賢い人といつても打見た處からして違ふ。微賤より起つた伊藤公などの顔は如何しても世の潮風に揉まれた食へぬ處が有るけれども、生れ付いての公卿大名などゝなると、田舍芝居の丹次郎宜しくの顔て何處か間の拔けた處がある、侯の如きも矢張り左様てある。特に侯に於ては其祖先に攝政とかいふ位置に就いた人が多くあらう、即ち長く續いて來て居る系圖書を調べたなら屹度其中には一國の政權を掌握して來た人が多く有るに相違ない、して見れば他の政客連の人臣の榮位として望んで居る首相の椅子の如きも、侯に取つては平凡の事て、特にそれを以て新に家門を飾るといふ譯てないから、大した執着心も起るま

いと思ふ、是が此前に内閣を棄つる時にも極めて無雜作に、一旦時非にして面倒臭しと見るや、幕下の閣僚にも謀らず、咄嗟に考へて直に辭表を呈出するに至る理由てある、他人なら終生の目的とするものが、侯の胸に在つては常に弊履の如くであるからてある。

○それに又西園寺侯は　陛下の御親任が極めて厚い、桂侯の御親任などいつた所て只政治上のそれ丈てある、此點に於て桂侯は西園寺侯の力を賴む必要があるてあらう、政治上の御親任とそれを離れた私情的御親任とは又格別の差のあるものてある、我々にしてからが左様だ、共に書生時代に燒藷を嚙つた友人などゝ逢つて、當年を談り合つたなどすると、用務て親くなつた友人とは違ひ、言ふに言はれぬ一種の情味の漲るを覺える、それが上つ方となると尙ほ左様てある、それもその譯、親しく御交りになるべき範圍が御狹いだけに、一層情味の濃かなるものが御有りになる、　陛下の竹馬の御親しみの仲としては、只今ては西園寺侯と藤波侍從だけてある、皇威猶ほ式微の御生立の時代、陪從の數も備はらぬ折に、共に禁園の池に小斑魚(メダカ)を追ひ廻し、土ほりをして御遊び申したのは此二人てある。して見れば時折謁見を賜はる時などには、「陛下も御年

を召させられましたな、共に彼の御池て小斑魚を掬ひました時には……」などゝ古い幼な遊びの物語なども出るに相違なく、左様な物語の出る間柄となつては到底他人の窺ひ知り得ぬ御情愛があらう。陛下暫しの御不豫の御砌などにも、敢て親しく御寢所に入つてかにかくと御慰問申上ぐるものは侯と藤波侍從との外にはないとの事てある。此點に於ては何人も侯とは爭ひ得ぬ。

○此御親任が更に侯の恬澹に與つて甚だ力ある事と思ふ、今の政客連の功名心と言つても、之を具體的に言ふならば、一つには位人臣の榮を極むると同時に、又一つには畏こきあたり御思召に與かつて、御覺え目出度からんことゝてあらう。此二つだけが希望の焦點て、之をさへ得れば滿足する事てあらう。横濱の選出代議士に原といふ男があつた、原六郎てはない、何とかいつたつけ、其男の話が面白いてはないか、自分の代議士となつての滿足は只二つある、其一つは外務大臣の夜會に臨むこと、今一つは年首に年賀を申述ぶべく馬車に乘つて二重橋を渡ることゝてある、人力車ならば通行を許されぬが馬車なら許されるからね。即ち肥馬に鞭あてゝ意氣揚々と行くと、衛兵は嚴かに捧げ銃の敬禮をする、車上鷹揚に之を見て宮門を拔けて上つて行く、顧みて東京全市を眼下に見晴るかす。此時の滿足といつたら實に自ら安んぜず、全身ゾク〳〵して寒氣を覺える程嬉しいと、稚氣笑ふべき樣てはあるが、箇中に欺かざる人心の幾微の告白がある。然るに侯には此樣な事は尋常茶飯、幼少の時から慣れて居る事て、又新に心頭の火を燃やすに値せぬ。此の如く他人には餘程重い事に感ぜらるゝ慾望を侯は平生に得て居つて慾望と名づくるには當らぬのだから、從つて又何をか執着し何をか憧れんやてある。即ち此等の事情が侯の恬澹を餘程助けて居る事と察する。

△西園寺侯

衆議院の一政客

一言にして評すれば、西園寺侯は無慾恬澹の人てあつた、功名心などは極めて乏しい。政黨の首領としては、もう少し功名心が強く、自分の乾兒の爲めには、自ら水火を侵すの氣慨があつて欲しいと思ふ。若し今日の政友會員をして、無記名て以て、西園寺侯と桂侯

と、何れを首領に戴くかと投票せしめたらば、其投票の十分の七は桂侯に入るであらうと思ふ。然らば何故西園寺侯を首領に戴くかといふと、君主が惡人でない限り、共和政治よりも立憲政治の方がよいと同じ理窟に基くのである。

西園寺侯は無慾恬澹であるが而して、人格なども非常に高い、又風流韻事に富んで居ることは勿論である。座談などもなか〳〵旨い。今までの宰相としては、其方向については、亡くなつた伊藤公などにも讓らんやうな人だ。佛蘭西から歸つて來た當時は、新聞にも關係して、盛んに自由民權の説を主張した。氣慨もあり、手腕もあり、又天下の經綸も餘程ある人だ。唯之を伊藤公に較ぶれば、政治家として最も必要な、膽力と執着心に乏しく、之を桂侯に比すれば敵でも味方でも擒縱自在といふ手腕に缺けて居る。然しながら、之に近けば、温容誠に親しむべく、之と談ずれば人をして恍惚たらしむるものがある。而してあの大きな政黨を率ゐて、一人として侯を不信任呼ばりするもの丶ない所を見ると、そこにいふにいはれぬ德があるに違ひないと思はる。

△五分の隙の無い通人

巖谷小波

◎西園寺侯は頭腦の玲瓏な人、執着心の無い人ですが、一語でいふならば左樣、先づ大通ですね、通人といふタイプですね、

◎侯に取つて先づ一番感じたのは勉むるといふ事です、雨聲會なるものを開いて多くの文士を招待される、其豫期は如何であつたのか知らぬが、開いて見れば大して面白い事でもなからうに、一度で止すといふ樣ではなく、此後も續けてやられる積である、是が趣味から出て居るのか交際術から來て居るのか知らぬとしても、彼の弱い身體に其勉めらるゝ點は十分に見える。第一回の招待の時などは、侯は總理大臣の現職に居られ、而かも國事甚だ多端であつたに拘らず、三晩文士を招待された、のみならず、他では思ふ樣に親しめず、面白くないからとて招宴を自宅に開かれた、私は其二晩目に招かれたのだが、丁度偶然であつたか如何かは知らぬけれど、刹那に感じた事は、我々の居る間一寸も座を外されぬことである、電話にも起たれねば玄關

にも出られぬ、長時間の事だから何等の用向の其間に生ぜぬとは一寸考へられぬ、電話の用は人に聞かせ、玄關は客拂ひをされて居たのではないかと思ふ、藝者が多く出たの御馳走が澤山有つたのといふ事よりも優つて、最も鄭重な待遇と思ひました、斯様な事は他の華冑社會には有り得まいと思ひます。

◎其次に文士連中から侯を招待しましたが、何しろ文士連中の貧しいポケットマネーを醵出しての事であるから、碌な御馳走も出來ぬのでしたが、侯は其招をも快く受けて出席される、自分の口に合はぬ料理には薩張り箸を着けず、只酒を少々飲まれた位の事だけれども、時間は割合に長く居られ、隔意なく膝を交へて物語らるゝ、揮毫を請へば氣輕に受けてサラ／＼と書かれる、一寸も尊大ぶる所はなく、主人側にも十分の満足を與へて、歸邸の後にも、折からの月明き夜、心行く清遊てあつたと丁寧な禮狀をも寄越されました。即ち他の貴族者流に見る様な、野暮、强情、尊大などいふ、人に惡感を與へる様な點は一つもないのです。

◎更に感ずるのは其記憶力の尋常ならぬ事である、文學物などても古いものは誠に能く讀んて居られ、それを亦細かに覺えて居られる、新しいものは用務多端て讀む隙がない、君の傑作は何てす、是非其中に讀んて見たいものだがなどゝ、其席の文士に語られて居つた如く、現代文學には沒交渉てある、けれども西洋の物ても支那の物ても廣く能く讀んて居られて、其上詩の句や文章の句等を精確に覺えて居て語らるゝには、仲々生中の文士連中に答も仕切れぬものがあるといふ風てす。

◎此間の會の前の事てすが、京都て偶然同じ宿屋に落合ひました、侯は女を連れて居るのてもあり、旁々此方は暫く遠慮をして居たのだが、侯は玄關て私の泊つて居ることを承知され、早速遊びに來よとの使てある、て行つて見ると、別段女を隠すといふ様な事もなく、毫も拘らぬ風で初中終側に侍らして居らるゝ、耳の洗濯をしやうと思つて東京から態々清元を呼び寄せたから一所に聞かうなどゝ言はれる、て又行つて見たが、他に多くの取巻があつて如何して騒ぐといふてはない、しめやかに唯興に入つて居られる丈の事てある、御相手としては土地の俳人、即ち舊派の俳人連が伺候して居る丈の事てした。其滯在の間は政友會の人達などの訪問を避け、暫く身を物外の人として日々所々の佛閣所々の名勝をと尋ね廻つて遊び暮されたのてす。

◎要するに侯は醒めた、怜悧な人てある。そして恬澹てはあるが、併し其根本の性質は物に周密な人、即ち五分の隙の無い通人、他からは一寸でも切り込めぬといふ人だと思ひます。周密であれば氣六かしくなければならぬ筈、一體通人なるものは氣六かしいものなのだが、併し侯は其氣六かしい處を表面に現さぬ丈の禮法を十分に心得て居らるゝ爲に、その樣子が少しも無い事と思ひます。

◎侯は如何なる場合にも自己を忘却して他に還沒する事はせぬ人てあります、それ故酒は飲まれても酒に捉はるゝ事はなく、女を愛されても女に迷はさるゝ事はあるまいと想ひます。（談話）

△西園寺侯論

田川大吉郎

西園寺侯の世上に尊敬さるゝ所以は、第一に容貌、第二に言語、第三に思想にあるてあらう。但し其淵源ある思想、趣味饒かなる性情が根抵をなして容貌にも又言語にも高尙にして上品なる姿をあらはすのかも知れない。さすれば其第一の德は寧ろ思想にありといつてもよからう。三十九年の秋、西園寺內閣の時代に所謂電車値上問題が起つて、私は同志と共に先づ原內相を訪うて、次ぎに西園寺首相を訪うた。原內相は辯論の雄を以て稱せらるゝ丈け、私等を相手に腕まくりをなし、口角泡を飛ばして議論した。私が、引下つてから諸君はどう感じたかを同志に訊いた。異口同音に下品な大臣を見たといふ答てあつた。次いで首相に行つた時には首相は唯靜かに、こちらの言ふ所を聞かるゝのみて、別に質問がましい事もいはず又別に慰撫的の言葉も發せられなかつた。然し其會見には倘一脈の春風が漲つて居つたやうな譯て、歸つてから私がどう感じたかと同志に訊くと、上品な大臣を見たといふ答てあつた。且つ我々が原內相に對しては言ふた事も聞いた事も多かつた。首相に對しては簡單に一部の事を語つたのみてあつた。其れにも拘らず、多くの同志は、內相に對しては慊らず感じ、首相に對しては滿足した趣があつた。何の原因だとはいへないが、玆に首相の人に秀てたる德がある。其後一二年尾崎氏を始め、政友會の代議士六七名並んで居られた席て、私が偶然に話をした時に、原君に行つて電車の計算論をした時に、原君

が解されたか否かと疑つた。西園寺さんに逢つた時は、其れが解されたかの如くに自分は思つた。然し果して解されたか知らんと話したら、並居る人々は無論解して居る。それは餘程聰明な人で、算數にも明るい人だと一致して言つて居つた。彼は實に聰明穎達を以て萬人の前に嘆稱されて居る。

今回の桂侯との提携については、政友會の關係者は政友會内閣が近きに出來るものと觀じて居る。西園寺侯は第二次首相となつて、第二次内閣を組織するものと期待して居る。然しながら私は之を疑つて居る一人である。西園寺侯は果して算數上の明あるものとすれば、今日の財政上並びに經濟上の狀態に對して多少の考がなくてはならぬ。前西園寺内閣の失敗は、財政上に起因して居る。全國の銀行業者が西園寺侯の計畫に反對し、若くは不安の念に襲はれた事が其失敗の主因であつた。桂内閣は其後を承けて、銀行業者の歡心を得て居る。此歡心は桂内閣成立の當時に比ぶれば一段も二段も低減して居ることは勿論であるが、今の信用を失しかけた桂内閣の位置でも、未だ先きに呪はれたる西園寺内閣の位置以上である。此形勢事情は萬人の眼に明かである。西園寺侯にして之を知らざる筈がない。之を知れば何を以て第二次内閣を組織せんとするか。其勇氣の由つて起る所が分らない。故に私は西園寺侯は内閣を組織せぬであらうと想像する。然らば政友會と桂侯との提携は破るゝだらうかといふにさうではない。西園寺侯は内閣を組織せずとも桂侯に政友會の領袖を味方に引入れ、若くは列座せしむるであらうと思ふ。或人は此想像をも當らずとして、桂侯は決して政友會の人を大臣に入れまいといつて居る。けれども私は以上の如く一二の大臣は迎ゑるであらうと想像する。只西園寺は首相になるまいと想像する。西園寺侯の心の樂む所をいへば、大磯の濱邊に閑雲野鶴を伴として靜かに、餘生を送らうといふ事が又希望であらう身邊の事が若し之を許さぬとすれば、或は樞密顧問官になるか若くは議長となつて今日の政界に不就不離の位置を守り、桂侯と政友會の相談役にもなるかも知れない。私は此想像に於て、西園寺侯が政友會を去ること遠くあるまいと思ふ。實は其政友會を去るべき計畫の一節として今後の提携談が持上つたものと思つて居る。西園寺侯の性質品格を以てしては、到底永く政友會の首領たるに堪へない。どうかして政友會を窮地に陷らしめずに、自ら身を保つの路を求めやうといふのが

西園寺侯今日の希望であらう。政友會と桂侯と提携する一箇月も前に、私は政友會領袖の言を聞いた。西園寺侯は其領袖に向て政友會の方針を語るのに諸君にして若し成敗利鈍を省みず戰へと希望せらるゝなら私は何時でも戰ふ。今日でも戰ふ。戰に於て一日も猶豫せぬ只其戰が政友會の後圖をなすに便利であるか、有効であるかを疑ふまでゞある。而かも諸君が現狀に不滿を抱いて何とか打破の途を講ぜらるゝには同情に堪へないといつて居つた。私は此一語の出處については少しも疑はない。此言葉によつて考へれば彼は提携の以前に、和せんか戰はんかについて心を勞したものに相違ない。最近のアルサス、ロートリンゲン州に新政を布くに當つて、其知事を終身官とするや否やの論爭が獨逸議會にあつた。而して獨逸の內務大臣は之を修身官とするの希望に反對して、二州には特別の宮廷を要しないてはないかと明言したらしい。修身官即ち宮廷の意であらうが、同時に又宮廷は一種不可侵なる神聖の府と思はるゝ。私は政友會に於ける西園寺侯の位置を以て神聖不可侵の位置を占て居るものと思ふ。即ち政友會に對しては又一種の宮廷である。西園寺侯が政友會に此位置を占て居ることは西園寺侯をして和戰の機を決するに自由手腕を揮はしむる所以である。西園寺侯は屢此態度を以て政友會の方針を左右した。けれども歐米の立憲政治の趨勢を解し、特に佛蘭西に育つて、民權共和の思想に薰陶せられた侯は、此宮廷的位置を政友會に作ることに中心から滿足してゐないに相違ない。箇樣な態度をとつて一令の下に萬軍を動かしたる威は彼の生涯忘れざる所ならんと同時に、平常の主義理想を顧みれば、我れながら專制に過ぎると悔ゆる所あるに相違ない。それて政友會總裁といふ最も得意の位置が、中心には極めて苦悶の位置であらうと思ふ。其原因は獨り侯をのみ責むべきでない。寧ろ政友會多數者の不明、卑屈、因循の病もあるてあらう。けれども侯としては之を滿足に思うてゐないに相違ない。此思想が凝つて、政友會の終りをよくせしむるには如何にすべきか、政友會と侯自身の關係の終りをよくせしむるには如何にすべきか。此二つの問題に圍まれたる侯は久しき間政府に對する和戰の決を考へたてあらう而して政友會の多數を潰亂せしめず、桂侯多年の情誼に酬い、自家一身の終りをよくするの手段としては、不本意ながらも今日の提携を是認するに落ちたてあらう。侯を庸流の人と見れば此以外に想像のし樣が幾つ

もある。侯を多數者の認むる如く聰明餘りあるの人とすれば必らず此考が此度の擧に出てたものと解するの外に途がない。故に私は侯が內閣を組織するの望は空て、政友會の實權者たるの位置を去るの日は遠くないと想像する。

彼は大隈伯の如く惡戰努力の氣が少い。然し彼の思想、趣味、性情は彼をして政治以外の第二の大隈伯として多方面の指導者たらしむるに適して居る。只其努力の氣の足らないのを惜む。が事實上政界ヶ遠のいた彼は必らず他の方面に於ける社交上の中心として長く殘るてあらう。私はそれが彼の性情に適し、且つ其晩年を全うする所以の道と思ふ。彼の左右は今政界の亡者によつて取まかれて居る。而して彼の爲めに此說を勸むるもの一人もなからうが、彼の聰明は其等の亡者を拂つて、眞の途に出づるに惑あるまい。私は大凡侯を斯くの如き人と見て居る。

△西園寺侯について

内田魯庵

○恬淡洒落といふ文字は、特に西園寺侯の爲めに作られたものではないかと思はるゝ程、侯の性格をよくあらはして居る。國家の大問題などを決せらるゝ時の態度は、我々は知らぬが、知つて居る限りでいへば、大抵の事には喜怒を色にあらはす樣な人てないやうに思はれる。何時も靜かに落附いて、ちつとも物に拘泥せぬといふ風がある。それにも拘らず何處となく、人を壓服する――壓服せぬまでもどうしても侵し難き威重が備つて居るのは、侯の氣品の高い爲めてあらうと思ふ。あの氣品は全く昔の攝關清華などに備つてる自づからなる品位て、今の新華族輩の眞似ても眞似られないものである。

○西園寺侯が我々と一所に會合せられるといふのは、所謂詩酒徵逐て、其以上の六づかしい理窟はなさゝうに思ふ。一體侯の文學に對する態度は、云はゞ風流三昧て、詩とか俳句とか、又は短い洒落れた話とかいふやうな遊戲文字を喜ばれるので、今日の思潮を脊負つ

て立つといふ眞劍勝負の、生命掛けな――風流文字から見れば頗る殺風景と云ひたいやうなものは餘り好まれないやうだ。侯が小説を讀むといふのも、一つは佛蘭西に留學された爲めてあつて、若しも英國に留學されたなら、假令スコットやヂッケンスを二三册讀まれたにしろ小説などは輕視されたかも知れぬ、或は無視されたかも知れぬ。兎に角ヴォルテールとかルッソーとかユーゴーとかいふ人物の勢力を實際に識認されたのて、相當に文學を重く見られるのであらうが、侯自身が現代の文學に就て餘り多く理解されてるとは信じられぬ。侯は大デューマのものを愛讀されたやうて、「三銃士」や「廿年後」などは屢々口にされた。ゾラの初期の作も讀まれたやうだが、三都小説や四福音書小説などは讀んてをられんやうだ。侯は曾て獨逸に滯在されて居たが、其時分フォンタネとかブライトロイとかホルッとかシラーフとかいふ人は多分名を鳴らしてゐた筈てあるが、侯は爾ういふ人の作を讀まれたのてあらうかドウカ。又日本人ては紅葉山人の才筆を感服して居られたやうて、三條公の書卷物の文章を紅葉に作らせるとか或は書かせるとかいふことに斡旋されたといふ傳説があるが、多分之はウソてあらう。紅葉が如何に才筆にしろ、アノ蜀山風の書牘が如何にウマイにしろ、紅葉山人と三條公の書卷物はちと不調和てある。東洋自由新聞時代の突飛なる侯てあつたなら知らず、其後益々円熟された侯がマサカに紅葉を推薦するやうな事は無からう。多分何かの間違ひてあらう。紅葉も中々エライには違ひないが、紅葉の作を以て最高文學と見る事の出來ぬのは今の人たちは誰ても知つてるだらう。夫故、今日の最高標準に照して侯の文學的眼識が高いとは思はれぬ。シカシ侯は能く文學を理解し、文學の價値を認め、且文學に同情する事の出來る人てある。

○が、侯が頗る綿密に讀書されるのは驚く事がある。私の譯した『復活』の中にある或る佛蘭西語の譯し方が適切てないと云つて正された事があつた。之は露西亞の原本にも矢張佛語て書いてあるので、私も佛語を其まゝに入れて、英譯のフートノートに從つて六號活字の割註に英譯通りに和譯して置いたのてあるが、侯は其の六號活字の割註までも注意して讀まれたのてあらう。英國人はよくあの字を間違つて譯して居るが、佛蘭西の書生などゝ交際すれば、直ぐ分るので、丁度アノ反對の意味だと云はれた。確かに侯の云はれた通

りて、私は英譯者のフートノートのまゝに譯したのだが、多分英譯者が間違へたのであらう。斯ういふ事は餘程の注意と興味を以て讀まなければ氣の付かぬ事てある。

○侯はなか〳〵の話上手て、上品な爽かな辯舌て、時々輕い皮肉を云はれる。竹越三叉君が私に薔薇の自慢咄をして、「私の所の薔薇は岩崎の出入の薔薇新から買ふたのですが、岩崎の家にも無いやうなのがあります」といふと、侯は傍から口を出して、「爾うだらう、君の所ては岩崎が上等のを買つて了つたあとの殘りを買つて來るんだらう」

○侯の洒落なお話をすれば、雨聲會の時に大町桂月君が杯を持つて侯の前に行つた。其時、侯はキチンと正座まつてをられたが、桂月君は侯の前にドッカと趺座をかきつゝ侯の膝を指さして、さういふ風にカシコマつて居ては窮屈だから、サア趺座をおかきなさいと。ドッチが主人だかお客だか分らぬやうな調子てやつた。すると直ぐ侯は座り直されて大町君の杯を受けられたが大町君の斯ういふ磊落な性格を十分擅にし得るのは亦西園寺侯の寛容なる徳てあらう。昔しの日野亞相といふ人はドンナ人だつたか知らぬが、多分恬淡風流の人てあつたらう。山陽の公に對する態度を布衣を以て王公に傲る大見識のやうに云ふが、何アに、矢張ヤンチャン小僧の本色を發揮したのサ。日野公の方がエライよ。

○雨聲會が社會的に文學の重みを若干增したは爭はれぬと思ふ。が、若しあの會が風流三昧てなくて——風流の好きな侯に取つては迷惑てあらうが——美人をヌキにした眞面目な會てあつたなら最つと世間的の効果があるだらうと思ふ。平たく云ふと、私は雨聲會に列席して餘り面白いとも思はぬが、シカシ西園寺侯の如何にも垢拔けがした、少しも尊大振らない平民的の態度は眞に歎服する。自づから備はつてる云ふに云はれぬ氣品があつて、シカモ誰にも打解けて悠揚迫らざる態度て奥底なく語る侯の前には恐らく如何なる政敵も感歎せずにはゐられないだらう。政黨の主領としてはあの恬淡な性質が累をなすといふ説があるが、シカシあの野武士のやうな黨人原を感服するは侯の氣品と雅量とてあらうと思ふ。取留つた咄も無いが、先づこの位な事にして置かう。好い加減に書いて呉れ玉へ。

△西園寺侯

法學博士　草莽之人

西園寺といふ人は、餘程聰明な人て、よく物の分る人だ。極く無慾淡泊な人て、功名心も無ければ執着心もない。從て思ひ立つた事を何處までも遣り遂げやうなどゝいふ氣もない。だから政黨の首領としては本當に適當な人とは思はれない。

あの人の經歷を考へて見ると、維新の頃は山陰道を征服する總督といふ役目であつた。處が戰をせずして濟んだ。其後に於て年も若かつたから、餘りよい役にも用ひられなかつた。それから歐羅巴に行つたが、一通りの勉强はして歸つた。歸つてから松田正久、中江篤介などゝ自由新聞といふものを起した。あの新聞は岩崎や何かを攻擊したりして、名盛なか〳〵盛んであつた。處がさういふ事をするのは都合がわるいといふので德大寺さんを通じて　陛下からお留めになつたといふ事である。それから西園寺さんは參事院か何かに入つたが、矢張りよい役ではなかつた。それから累進して、大臣となり、遂には政黨の首領となつた。

今までの行動を調べて見ても、執着心功名心などは認められない。只極く聰明で、利害などの直ぐ分る人といふのが動かない處である。學問の點には非常に秀てた人て、和漢の事も出來るし、又佛語も出來る。あれ位の地位の人て、あの位學問の出來る人は他にあるまいと思ふ。又字を書いても實に旨いものである。經綸はある人であるが、何處までも遣らうといふ熱意がない。だから政治家としては物足らぬ所がある。別に乾兒を可愛がるといふ事もないから、人は西園寺さんを尊ぶけれども尻について行く人がない。

政友會總裁としての西園寺さんについていへば、西園寺さんは政黨を以て藩閥と戰ふことは困難と思つて居るらしい。といふのは、政黨といふものは未だ宮中の御親任が無い。西園寺さん自身の御親任は固より厚いが、個人〳〵の政黨員には御親任は殆んどない。之に反して藩閥の方は多年養ひ來つた御親任が非常に深い。其處で西園寺さんは政黨を以て藩閥と戰ふことは不利と見て居る。だからさういふ不利な事を企てずに桂さんと手を握つたのである。桂さんも亦長く藩閥を維持することの出來ぬのは分つて居る。それで西園寺さんと手を握つたのである。政友會と政府との所謂情

意投合についてはいろ〳〵の說を爲す者があるが根本の理由は其處にあると思ふ。それで藩閥を倒すを以て能事畢れりとする連中から見れば、西園寺さんの遣り口が或はまどろつこいかも知れぬ。然しそれは全く宮內省の勢力を度外に置くもの丶見方であつて、日本現今の政治の眞相の分らぬもの丶いふ事である。

西園寺さんは談話がなか〳〵旨い。又支那のことでも明淸の事までよく知つて居る。大隈さんもなんでも知てつ居るが、あれは多く人の話を聽くか、もしくは人に本を讀ませて聽くのである。西園寺さんは自分で讀むのである。又大隈さんは文學の事はよく分らぬが西園寺さんはよく分る。兎に角當世に珍しい人である。

△西園寺侯の性行一斑

伊藤痴遊

世間の人は西園寺侯を以て、唯氣品の高い、行に弱い人であるといふやうな事を言つて居るが、非常な間違であると私は思ふ。輕々しく動かんけれども、一度決心するとあの位きつい人はない。然し利慾の念に淡い爲めに、其行動が餘りに正道を行つて少しも詭道を踏まないから、唯見て居ては餘り面白くない。で世間では餘り侯に喝采せぬ。けれども我々が知る限りに於ては、西園寺といふ人は見識もあれば、勇氣もあり、先づ近世の立派な人物であると斷言するに憚らない。

只あの人についての缺點は多病であるといふ事だ。如何なる事業でもさうであるが、殊に政治家には健康が第一である。現に近い例をいへば、星亨君があれまでに奮鬪したのは確かに健康の爲めで、星君がいくらエラクッても若し病身であつたら、決してあれ丈けには行かなかつたに違ひない。病身だとどうしても根氣が續かなくなる。從て自然、物に執着することが出來ぬ。而して其執着心の强いのが、政治家の成功する一の原因である。多病の爲めに其特性を缺くのが西園寺侯の缺點である。然しそれは政治家として成功するかせぬかの點についていふので、政治家としては方さに正しき政治家であることは疑ひない。

若い時分からのあの人の履歷の概略を述べて以て其性行の一斑を示さうと思ふ。

元來西園寺侯は德大寺家の出であつて、今の實則卿

とは異母弟の關係になつて居る。即ち德大寺家を出て、西園寺家を相續したものである。で西園寺家は元來琵琶の宗家である。今日の琵琶師は一體ならば西園寺家に運上を出さねばならぬ筈なのである。我々は勿論聞いた事はないが西園寺侯も時折、御前で琵琶を彈奏されることがある、それは實に旨いものだといふ噂である。

西園寺侯に頗る同情すべきことが家庭の上にある。それは何時の頃からは分らぬが西園寺家には當主になるものは正妻を迎ふることが出來ないとなつて居る。何の爲めであるかは流說紛々として捉へ所ないが、或は昔の京都の邸内の稻荷樣が祟るとか、或は化物が出るとか、いろ〳〵說を立てゝ一向其秘密が分らない。兎に角西園寺侯は此家憲の爲めに、美しい家庭の樂は知らずに盛んなる時代に過ぎて了つた。酒に親み女に戯れて、盛んな時代に多少の放蕩をしたのは幾分かさういふ事の刺戟があつたからと思ふ。

慶應四年の一月の三日に京都の御所に於て殆んど徹夜の會議が開かれた。それは德川慶喜が大兵を率ゐて大阪から京都に引上るといふ噂だが之を何とするかといふ寄合である。公卿の多くは一萬以上の大兵を率ゐて慶喜が自ら上ると聞いて殆んど震ひ上り、氣の早い膽のない奴は、龍駕を山陰道に移し奉るなどいふ事をいふた。一代の怪物岩倉少將具視は流石に公卿に似合はぬ膽のあつた人であるから、頻りに慶喜の兵を迎へて伏見鳥羽に打たうといふ議論をする。けれども殆んど同意を唱ふる者もない、さればといつて不同意を唱ふる者もない。何だか議が定らないで混沌として居る。其時眉目清秀の一貴公子がグット席を乘り出して「今日の會議は果して何事を議するのであるか。慶喜は朝敵なのであるから、打取るといふ事について德川は已に昨冬岩倉卿の手を經て薩長二藩の代表者に密勅が下つて居る。綸言は汗の如し、事一度聖意に基いて、德川を朝敵として御沙汰が下つて居るのを、今や慶喜が大兵を引いて入京するといふ爲めに之を如何にすべきかといふ事を議論するは何事であるか。假令德川より侵し來らずとも、こちらから進んで討つべきものではないか、然らざれば昨冬に下した勅は僞りであるか、聖意を矯めたのであるか。」此時岩倉は膝を打つて喜んだ。滿廷の公卿一人も反駁するものなく、事は直ちに決定した。此一貴公子は即ち西園寺侯であつて此時年は僅かに十九歲であつた。事は餘事に亘るが、一すい

ひたいのは、其時開戰をして勝利の見込があらうかといふ御下問があつた。此際西鄕南洲は天兵の向ふ所敵無し、必らず勝利でありますとお答へ申上げた。其答が餘りに明快であつた爲めに、却つて左右のものが之を疑うて、南洲が別席に下つた時に、岩倉、大久保などが隨いて來て、「僅かに二千か三千の薩長聯合兵を以て一萬五千に餘る大兵を打破る方法があるか」と問うた。西鄕冷然として答へて「ソリャ戰つて見なければ分らんサ。」「然し君は必らず勝てるといつたぢやないか」西鄕曰く「あゝいはなけれや戰にならんぢやないか。」南洲の大なる所以こゝにあるので、此二つの事の爲めに伏見鳥羽の戰は決したのである。

それから西園寺といふものは朝廷の間に於ても問題になつて、雲州松江藩へ歸順を勸むる勅使となつて行き、松平出雲守は歸順をする。更らに歸つて來てから北越鎭撫總督となつて出發をする。其時にも一の可笑しな說があつた。口賢しく叩いたつて、根が公卿の一少年、鐵砲の音を聞けば腰を拔かすだらうとの蔭口も大分あつた、然るにいよ／＼出發する時に凛々しくも武裝した西園寺公望は馬上ゆたかに乘り出した、其風采、馬術に於ても亦一廉の人であつたのに舌を捲いて驚いた。當時其年少の身を以て、これ丈けの大任を一時に果したといふ事は、陛下と御學友といふ關係からも多少のお引立もあつたに違ひないが、本人の力量がなければ、聖意に基いた成功はしなかつたらうと思ふ。

それから後に佛蘭西に洋行をした。洋行中にも一寸した奇談がある。當時留學生などにも廣く交際して、場合によつては、金をやつて世話をした人なども澤山ある。松田正久や中江篤介は其當時からの關係である。なか／＼負けぬ氣の人であることは、一夜料理店へ行つて、非常に酒に醉うて、どういふ過ちであつたか、硝子戶に觸れて一枚割つた。處がボーイがなか／＼承知しない。いろ／＼譯をいつたが承知しない。「結局どうすればよいか」と聞く。「償ひを出せ」「よろしい、いくらだ」「いくら／＼を出せ」「さうか一枚いくら／＼だな、それ丈けを出せばよいのか」「よろしい」それから侯は傍らの器物を持つて殘らず硝子戶を破つて、其數丈けの償ひを置いてスウと出た。今日の西園寺侯を以て、當時のそんな事を思ふと實に意外の感を起こす。

歸朝してから後明治十三年に起したのが、東洋自由新聞。それは當時民權自由の議論非常に盛んであつて、佛蘭西の留學中に得た所は自由平等の議論て、平

民主義であつた。殊に幾分か佛蘭西流の革命の氣にも觸れて、餘程主張が變つて居つた。其眼て當時の政府を見たのであるから、第一には自分の主義の上から折合がつかない、第二には自分の維新の際の功といへ家柄といへ、洋行歸りといへ、閣員の一人となれると思つたかも知れぬ。然るに却て疎外されるといふ其不平も手傳つて新聞を起して、中江篤介に椽大の筆を揮はして、盛んに政府の攻撃をやつた。之が爲めに政府の間に非常に物議が起つて、樣々の手段を以て威壓して新聞の關係を絶たせやうとした。が西園寺は頑として應じない。假令自分は改つて平民となるとも敢て苦しくないといふ意氣込であつたから、三條岩倉公などは心配して屢々勸告したがなか〳〵承知しない。德大寺卿などは涙を流して意見をしたが、假令兄弟義絶をしても差支ないといふ見幕であつた。一方に於ては中江篤介は盛んに例の辛辣な筆て、政府の秕政を叩く。地方の民權家は之に激勵せられて益々政府に當るといふ話て、一日を緩うすれば一日の害が政府に及ぶ。此事が何時か宮中に及んで、終に御前に召出されて何事かの御沙汰が下つた。是に於て西園寺侯は泣いて其新聞との關係を絶つに至つた。事は一新聞の出來事に過ぎぬが、其騷ぎは實にエライものであつた。此等の事情を考へると、西園寺侯の性行の一斑が分るが、從來屢々病に犯され、其健康は殆んど氣候と戰ふ事が出來ぬ。爲めに政治家に最も必要な奮闘も出來なければ、一事に執着してそれを遣り遂ぐることも出來ぬ。然し性格がさういふ性格だから、一度思ひ立てば、隨分エライことをする。例へば鐵道國有の如き、重要なる一閣臣の頸を切つてまでも斷行するの勇氣に至ては、當代の政治家に見難きのみならず、利益の伴ふあの大問題を果して後、西園寺侯の手に何物も殘つてゐないなどは、一般の政治家に比較して見ると實に奇麗なものだ。

政黨首領としての西園寺侯を見るに、滿足の人とはいへぬまでも先づ缺點のない人に庶幾らうと思ふ。不淨の財を集めて部下に散ずるといふやうな事はしない。內閣明渡の時分に大抵の場合には內閣機密費といふものが一文もなくなつて次の內閣に讓渡さるゝのてあるが、西園寺內閣に至つては厘毛の間違もなく帳面に書き記して、ソックリ其儘渡す。こういふ點は西園寺侯以外に見るを得ざる所てある。こういふ遣り方だから部下に金を散ずるといふやうな事がない。若し批難があれば其等の點てあらうと思ふ。

昨年政友會の幹事を選任する時分に、齋藤、福井、松田、田中、清、此五人を選まれた時、誰も意外の感に打たれた。理解力の少い新聞記者などは、之に向て冷評を加へた位てある。けれども私の見る所ては、實に其當を得た遣り方だ。西園寺侯なか〳〵隅に置けぬ人と思ふ。あの大政黨の事務を托するのに少壯氣鋭の後進者五人を選拔した所などは普通の總裁に出來る事ぢやない。又五人の人物の配合といひ、五人が選出されてゐる選擧區の關係といひ、實によく情意を盡して居るものである。幹事長として伊藤大八を指名した事は尚一層の批難あつたが、人格の上に於て多少缺ける所あつても、黨務に鞅掌させる人として大八を選んだ所などはなか〳〵面白い。然し之れは政黨の事情に通じた人てなければ餘り感服しまいと思ふ。

兎に角西園寺といふ人は政治家としても政黨の首領としても、不足をいへば限りがないが、現在に於ては第一位に數へなければならぬ人と思ふ。（完）

△財政經濟に暗き西園寺侯

靜觀居主人

西園寺さんの特色は何時まで立つても知られない。詰る所知られないでお終ひになる人でなからうかと思ふ。それアまア、極く品のよい人だとか、名利に淡泊な人だとか、閑雅な遊びの好きな人だとか、それから讀書家であるとかいふやうな事はあるかも知れない。が、それは政治家としての特色ぢやない。政治家としての特色は何かといふ事は未だに分らない。外交の事などにも平常なか〳〵心配さるゝかの如き模樣が見える。それならば外交に長所のある政治家であるかといへば、それもどうだか分らない、が割りに其不長所は分つて居るやうである。財政經濟だらうと私は思ふ。其方になつて來ると、丸て氣を附けやうとも思はないやうである。そして又財政經濟が今日それ程重要であるといふ事も分つてゐるかどうか今の所疑問である。いはゞホッタラカシのやうな事を此前の西園寺内閣てやられた。最後に山縣阪谷が罷めた後て、貴族院から新大臣を二人作つて椅子をいろ〳〵遣り繰して、大藏大臣に松田を据ゑた。松田といふ人が財政經濟の任に堪ゆると思はれたのが已に財政經濟を了解せられぬ證據だといふ人があるかも知れない。ソコて西園寺内閣は財政經濟上二進も三進も行かなくなつた。事實上まだそれ程てなくても振り廻し方が拙い爲めに手も足も出なくなつてとう〳〵倒れた。そして不長所を殘る所

なく曝露した。内閣が維持出來なくなりかゝつた時に、西園寺さんは、自分で大藏大臣をやれば維持出來ぬ事はないが、大藏に頭を突込めば健康が許さぬと或人にいはれたさうだが、健康が許した處で私はどうかと思ふ。詰る所あの人は總理大臣として政府に立たれゝば立たるゝより外はなからうと思ふ。もうアの人を平大臣として入れる内閣が今後出來るとも思はれない。矢張遣れば總理大臣でせう。が、總理大臣としても、桂さんの如く自ら大藏大臣をやらなくてもよいが西園寺さんはどうも餘り財政經濟が暗闇の如く見える、之はどこまでも私はあの人の不長所と思ふ。此不長所あつては今日の日本の政治を取るにはどうも困つた政治家といはねばならぬ。若し今後總理大臣として政府を組織さるゝ時分にどういふ人を大藏大臣にするか、之が見物であらうと思ふ。自分で大藏大臣などは斷じてやる人ぢやない。ソコで誰を取るか、こいつが一寸面白い。

外に不長所があるかも知れないが我々の眼には分らない。先づ概していへば、あの人は存外に、立憲國―議院のある國の政治家には不適當でないかと私は思つてゐる。議院國での議院の辯論の主もなるものは大抵財政經濟のものである。それを旨くやつて行く人が大抵立憲國の政治家の上等なのである。之に缺けて居るのが私は大缺點といつてもよいと思ふ。

それから今度の情意投合一件だ。コイツはどうも今の處では私等には分らないが、桂さんが旨く西園寺さんを使ふことにしたのか、西園寺さんが桂さんを使ふ端緒を作つたのか、上になり下になりして分らんことだらうと思ふ。形跡から見ると、西園寺さんはヂッと構へ込んで了つて只政友會を持て、逸を以て勞を待つて、桂さんの方から持込ませ、桂さんの秘書官をして居る息子さん(西園寺八郎)が傳言か何かするのを、大磯に居て、默つてゐて、なか／＼出て來ない。議會が開けて問題が大分面倒になつて來てから突然やつて來た。大分桂をヂラした。ソコラを見ても取組には西園寺さんの方が餘裕があるやうに見える。本當にヂラしたかどうか分らんが形跡はさう見える。ソリャ畢竟名利に淡泊な人だから冷靜に判斷し、冷靜に行動するので、さういふ事になるかも知れない。ソコラが先づ長所といへば長所でせう。然しそれ丈けでは何だか物足らない。要するに餘り特色の分らない人だ。(完)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

幸田露伴先生校訂

日本文藝叢書

校訂嚴正

印刷精美

何人に拘らず必一本を藏すべき珍本名著の國民的大寶庫

全卷幸田露伴先生の精鑒を經たる日本文藝の代表的傑作全集

（新刊目録）

- 第一巻 曲亭馬琴著 ◉椿説弓張月（上編）製本既成
- 第二巻 湖南文山編 ◉通俗三國志（第一）製本既成
- 第三巻 曲亭馬琴著 ◉椿説弓張月（中編）印刷中 二月下旬發賣
- 第四巻 十返舍一九著 ◉東海道中膝栗毛（前編）印刷中 三月上旬發賣
- 第五巻 近松門左衛門 ◉近松浄瑠璃佳作集（第一）印刷中 三月中旬發賣
- 第六巻 湖南文山編 ◉通俗三國志（第二）印刷中 三月中旬發賣
- 第七巻 曲亭馬琴著 ◉椿説弓張月（下編）印刷中 三月中旬發賣
- 第八巻 井原西鶴著 ◉西鶴佳作集（第一）印刷中 三月下旬發賣

▲堅五寸‖横三寸 携帯至便
▲毎冊‖三百頁内外
▲密行細字振がな付
▲紙質佳良洋装本綴 装帖高雅

空前廉價 一冊均一 貳拾錢
送費（一冊に付）四錢

▲毎月三冊以上
▲五冊以下刊行 全貳百巻完結
▲第九巻以下原稿整理中‖續々刊行

（日本文藝叢書發行所）
東京神田今川橋大通
東亞堂
振替東京一七一一番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●鮫島大浪氏著「ある女の日記」は發賣禁止せられたり●

鮫島大浪氏著

製本成る●

追懐

定價金四拾五錢　郵税金二錢　著者寫眞入

本屋の主人と著者との問答

本屋の主人『追懐……おもしろい題ですね。一體これはどんなことをお書きなつたんです?』

鮫島大浪氏『……どんなことゝ言つて……ちよッとお話しできませんが……なあに小説としてはくだらぬものですけども、たゞ**事實**といふ處にねうちがあるのです』

本屋の主人『へえ、なるほど、して見ますと何か**モデル**が御座いますので……してやつぱり**女學生**かなんかで……』

鮫島大浪氏『まあ、あむまり訊かないでください……たゞ一言**此女主人公**は先日**發賣禁止**になつた「**ある女の日記**」の女主人公とおなじで、今赤坂ある町のある**大商店**に**嫁**て居るといふことだけを申しておきませう』

發行所　東京麻布區箪笥町五百十五　飯野書房

發賣所　京橋　良明堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



赤い鳥

鈴木三重吉

冷吉はその時代には、考へるべき何も自分にはなかツたものだから、赤い鳥を逃がして出て行く、讀んだものゝ中の女を自分の女にして考へてゐた。さうしてそれがために自分に何んにもない事が餘計に暗愁を增すのだツたけれども、それでもほかに考へるべき何もないのだから、やはりその話の鳥の女を考へ續けずにはゐられなかツた。

それは一寸長い話なのだけれども、冷吉はいつも、女が、家から逃げて出るきわどい際に鳥の籠を下ろしにはいるパセーヂを考へ浮べるのが癖になツてゐた。或、表紙が好きだから買ツて來た、譯したものを集めた本に出てゐたもので、「死せる戀人」とか言ツた作であツた。——母に見附けら

れて、間もなく取り上げられてしまッたのだからその話の作者の名前も、耳馴れぬ長い外國名前だッたといふ事しか記憶してゐなかッた。けれども、それがだれだらうと冷吉にはもとよりそんな事はどうでもよかッたのだからいゝ。何の本でもたゞ女の事さへかいてあれば、了解らない句などがあッてもいゝからたゞずん〳〵貪ッて讀むだけの事なのだッた。

オランダの、何とかいふ、昔からのもの丶蹟の多い、小さい都市のエーレンといふ女の戀である。相手の青年である畫家はフランスから此町へ來て此處の女のしめりッぽい碧い目と、琥珀色の絹のやうなふさ〳〵しい髮と、質素な純白な裾長い着物を着た、典雅な痩せた形を寫し取るために止まッてゐて、さういふモデルに相應しい女を見出す前に、或古い寺院の壁畫の中の、十字架に倒れたキリストを私かに取り下ろして土に葬り入れつゝある女が、わが求めて來た女の型をしてゐるのに戀をした。活きた女への戀のやうに戀する。さうして、毎日戀ひては見に行く或夕方、同じ此畫の前に禮拜して、も早うす暗くなッた圓柱の蔭にはいりつゝ下りて行く女の目差と色と白い着物の痩せた形とが、壁畫の中の、マグダーレンとか言ッたキリストを抱きかゝへる女が拔け出たよりも、もッとそれに似て居るのに愕いて、そのまゝどこへどう去ッたかとも別らぬその女を戀する。それからは毎日その姿を求めて町をさまよふのであッたさうして話の記載の何十頁かを置いて、再び或物古い町角でその、わが悲しい妻となるべきエレーンが圖らずも、小さい雨の中を、此男の戀ひ求める目の前を過ぎるのに會ふ事が出來た。男は急いて跡に附いて行ッた。さうしてそれは全く自分の目の迷ひてあッたかのやうに、いつしかその女の姿

を見失ッて、雨のみ蜘蛛の糸のやうに絶え〳〵に落ちつゞく、静かな町筋の路上に空しく立ち停まらなければならなかッた。かくしてまた久しい間のはかない求めの續きに返りつゝ、しほ〳〵と行くと、とあるしめやかな家の窓に、此小さい雨にぬれつゝかゝッてゐる、薄い赤い色の鳥のゐる鳥籠を、入れ忘れたらしい飼主の女の手が、丁度男が下へ來かゝる時にカーテンを開けて取入れるよと見ると、それが見失ッたそのマグダーレンの女であッた。――

男はそれからはいく度も、此窓の下を過ぎ返るために出て來ても生憎戀ひる女の一部分をも見る事を得ずして、毎日同じその窓に置かれた鳥籠の中へ、紙切れに「わが戀ふる、マグダーレンに似た女よ。」とかいては入れて行き〳〵した。女は夕日の沈む時刻にその鳥を取り入れする度に、いく度も得る同じ手の同じ文字の紙切れをいくつもためて、やッと自分を戀ひる男だと知ると共に、日夜小さき胸をとゞろかせてそのだれだとも別らぬ男を戀ひる。男はその前に書のマグダーレンに戀ひた。女は生れてはじめての戀であッた。――

かくしてやがて女は男の熱した心を私語かれる或日が來た。日を置いて遂に男は自分に從うて、晝と夜との麗はしい、人に見られぬ國へ落ちやうといふ。女は小羊のやうなる心に愕き惑ひつゝも、たゞ男のいふ何事にも從ひたいために、何を考へ返す餘裕もなく共に走る事を約して小さい胸を戰かせた。――

翌る日の夕方男は馬車を町角に待たせて窓の下に立ッた。私かに待ッてゐた女は、身も空にそッと抜け出てたそがれの影りの石段を下りて男の肘に投ずる。

「いゝか。」と男はわな／＼と私語く。女は打ち振へつゝ現ともなく手を引かれて小走りに駈け出したが、走せつゝも何だか心にかゝる。何かもう一度一寸戸口まで引き返さなければすまぬやうな心持が後(アト)に引かれる。

「まッて下さい。一寸まッて。」と遂に女は男に請うてつと走せ歸した。――あの鳥。出しわすれたあの鳥。――。女は背延をしてそッと窓の鳥籠を下ろしたが、せか／＼とその金網の口を開けて鳥を取り出して。放して了ふ。鳥はばた／＼と夕方の目を掠めて立ち上ッた。女はわが久しく飼ひつゝ馴れた、その赤い姿が、どちらへどう飛んだかを見極めるいとまもなく、そのまゝ走せて馬車に乗る。――かうして女は家から遁げて了ふのである。

それから話はまだ長く續いて、その女がだん／＼と思ひ設けぬ自分の生涯を見るにつれて、冷吉には此、鳥を放すパセージがそれだけ悲しい色を増して、どうしても自分の女としか考へられなくなるのだッた。男は女を得てからは、も早その女の價を忘れて再びマグダーレンに戀ひる。何んにも知らない小鳥に似た女はいつも冷たいうす闇のやうな日夜の中に、石膏のやうな冷たい男を戀ひつゝ泣けど恨み悔いるといふ事はしらずして、いつまでも冷たい戀にくらく生きる。さうして話は長く續くのであッた。

冷吉は毎日頭が痛いのだから何をするのも厭(イヤ)になッて、いろんな文句を附けては△△へもろく／＼出ずに、ぐずり／＼して、灰色のやうな心に、さきの、鳥の女の事なぞばかり考へていら／＼しい、がじ／＼した氣分ばかりを見つゝ、怠惰けてばかりゐた。その内にもう三月も十日といふ時分になッてこれ

から俄かにもがいたッてもとても試験の間には合はなくなッた。解らない△△だの何んのと、考へても厭になッて來る。それでも宅のものへは、△△までに拔けてる學課を取り返さなければならないのに、こんなざわ〳〵しいぐさ〳〵した宅では調べも何も出來はしないと、いゝ加減な事を言ッてわざといら〳〵して、とうと××の宿屋へ出かけると言ひ出した。宅にゐて祖父から終日何だ蚊だとがみ〳〵解らない事を言ッて突ッつかれるのが五月蠅くてたまらなくなッたから、だれもさういふ煩らはしいものゝゐないかけ隔ッた處へ逃げて、じッと自分の好きなやうにしてゐて見たいがためであッた。母だッて心配して自分の氣嫌ばかり取ッてゐる癖に自分の頭がどんなに惡いのかといふ事は別らないのだから何の足しにもなりはしなかッた。丁度祖父と非度く言ひ爭ッた揚句だッたので、それがために出て行ッて了ッたやうに誤解されてはわたしが困るからと母がいろ〳〵に言ッて止めさせやうとしたのだけれども、とうと持て餘して、それではどうなりとするがいゝと投げ出したをいゝ機にして、△△の本やノートを言ひ譯だけに包んで出て來たのだッた。が後で考へるとさうしてステーションへ行ッて汽車に乘り遲れて、じく〳〵雨になッた午後を薄汚ないベンチにかゝッてがじ〳〵した頭を抱へて次の列車を待ち飽ぐんだ、陰欝な、自分のさうして出た事を悔いるやうなその時の心持は、あとで考へると、飛んでもない拙らない災害を受ける事の或物を暗示したやうな氣持がした。

出て行ッたのは父のゐた時分からの宅の行きつけの心安い海水浴の宿屋であッた。かういふ冬が往ッたばかりの時分に一人でひよッくり來たものだから主婦さんは待ち設けない事で、どこか體でもお惡い

のですかと聞いたから冷吉は主婦さんには有の儘に頭がいたくてくさ〳〵するから母にさう言ッて出て來たのだと話した。時が時だから外にはだれ一人泊ッてる客もなかッた。上り口の次の間には座ぶとんや烟草盆やちやぶ臺なぞが積み寄せられて、ひッそりした帳場に主婦さんはもの馴れないやうな年の入ッた下女とたッた二人で解ぐし物なぞをしてゐた。大きい二棟の建物は冷吉のはいッた階下の一室の外は上下ともすッくり灰色の雨戸が閉されて部屋へ出はいりする廊下なぞはいつも夕方のやうに暗かッた。それに丁度來てから薄曇ッた日ばかり續いて、三月といッてもまだほろ〳〵寒い潮風にしめ切ッた障子は終ん日どんよりと蔭ッてばかりゐた。外へ出て試たッて探す日向もなかッた。それでも宅にゐて祖父にぐず〳〵言はれてばかりゐる事を考へると鳥が厭な籠から出てるやうなものだ。冷吉は物蔭に馴れたさびしい鳥のやうに一人で、のそり〳〵してゐた。さうして頭のがじ〳〵痛い、暗くなる心を充たすために例の赤い鳥の女の事なぞばかり考へた。かういふ剝げたやうなさびしい處にゐていろ〳〵の事を考へるのが、求めても得られない自分の孤獨な心持に似合はしいやうに感じられた。毎日何んだか止み間なく物に考へ入ッてゐるやうな氣がしてその癖何んにも取り纒めた事を考へてゐるのでもなく茫としてゐる。さうして頭が疲れて來ると、門の外に出て茫んやりと立ッたりして、うす寒くしぶく果てもない大洋を見た。終ん日人と口を聞いたりするのも厭であッた。それには此内の主婦さんは、何でも世話はよくしてくれるけれども、黒人上りの妾にも似ず、しッとりした餘計な事を言はない女だから面倒くさくなくてよかッた。かうして冷吉は時々當てもなく、自分を知るもの丶一人もゐぬ此古けた町の裏筋なぞを、

例の見失ッたマグダーレンに似た女を求めて彷徨ふやうな心持を包んて、剝げ黑ずんだやうな、ものさびしい家ばかり並んだ間の、日影もないどんよりした小路に沿うてぶら〳〵歩いたりした。けれども町の表筋へは厭だから出なかッた。その筋の或部分にはやッぱりぼろ〳〵の草屋根の下に、思ひ〳〵の惡(アク)どい色をしたのれんの下がッた家ばかり澤山あッて、その後ろから洗ひざらしたやうな薄汚い着物の膝をだらしなく崩しつゝ頭ばかりてか〳〵光らせて白粉をべた〳〵になすッた、狐面(メン)のやうな女が、見さかひもなく通るものにからかッた。

「ちよいと〳〵容子がいゝわお前さん。」

「へん、つん〳〵して行くわよウ。憎ッたらしい。」

「あら、何だと思ッたらまだ十五六の書生ぢやないかい。」

などゝしわがれた惡體を吐いて大勢てげら〳〵笑ッたりした。冷吉は自分がさうして罵しられながらもかういふ墮落した女の慘狀を見るのに堪えられないといふ意味て此處を通るのが不愉快なのてあッた。

冷吉が此町筋て思ひも設けぬ災害に會ッたのは來てから六日目の暗い夜てあッた。冷吉は郵便局へ母へ出す手紙を入れに行くために仕方なく此町筋を通りかゝると、さうした或あいまい屋の店先に破れかけてゐるらしい三味線を下手にぶつん〳〵彈いてゐるのがあッて、ぼろけた重くろしさうなどてらを着た、船乘りらしい、蠻人のやうな汚ない獰猛な男が二三人板の間に乘さばりかゝッて、コップ酒の息(イキ)て

互にふざけ合ッてゐた。冷吉がその前を通り過ぎて物の小半町も行きかゝると、後ろから一人の男が何か惡戯をして遁げて來たらしい容子で息を切らしてあたふた走り過ぎて、だれか追ッかけて來るものを待ち設けるやうに後ろを振り返りながら、ついと横の小さい露路へ外れて暗がりに隱れた。するともう一人の男がやッぱり前の男にからかはれてもしたと見えて、何とかと怒ッたやうに名を呼びかけながら、火の消えた提灯を持ッて息卷きながら追ッかけて來た。大分醉ッてゐるらしく足許も危ッかしくよろよろしてゐた。

「畜生ッ。何處へ行きやがッた。何とかッ。」

と呼び立てながらよろけよろけ冷吉の側を通り拔けてずんずん行きかけた。隱れてゐた一方の男は甘く相手を遣り過して、こッそりと元の方角へ引き返して行ッた。すッぽかされた方はそれとは氣附かずに譯の解らない事をぶつぶつ言ひ罵りながら、不圖往來の眞ん中へ立ち止ッて何か考へ出さうとしてゐるものゝやうに見えたのは後て考へるとさうして兵兒帶の解けたのを結び直してゐるのだッたのだ。冷吉はさッきから、此男たちが今通ッた店でわいわい言ッてゐた連仲らしいといふ事を考へたゞけて、もとより何の氣もなくさうして立ち止ッた男の側を通り拔ける拍子に、その男がだらりと引き摺ッてゐた帶を薄暗がりからつい見えないて蹈み附けたのてあッた。

「何だおい。」とその男は下駄に壓へられた帶を引ッたくッた。

「どうもすみません。」

「おい待て、何だと。」

「御免なさい。つい暗かッたもんだから。」

とそこ〳〵に遁げるやうにして行くと、

「待て此野郎。」とまだ絡まッて來る。

「何んてす。」と冷吉は仕方なしに足を止めなければならなかッた。

「何んだとは何んだ。」とわざと餘計に醉ッた振りをするやうな口調てさう言ひつゝよろけ寄ッて、節ばッた手てぐいと冷吉の肩を摑んだ。

「何をするんてす。もうあんなに謝罪ッたんだから怺へてくれたッていゝぢやないか。」

「何てエ。」とぐッと小突く。

「てはどうすればいゝんだ。亂暴ぢやないかそんなに。」と冷吉も癪に障ッた。

「何が亂暴てエ。貴樣こそ小忰の癖に人の帶を蹈んどきやアがて何をつべこべ理窟を垂れやアがるんてエ。全てエ貴樣はのらくらと、ど、どこに泊ッてる書生ッぽか貴樣は。」と放さない。

冷吉はわざと意地惡く困らせるのだと思ッたから、隙を見てすたッと振り放して遁げかけると同時に

「待てッ此野郎。」と言ひさま提灯を振り上げてびしやりと目の上を喰はせた。

冷吉はぐず〳〵してるだけ損だから其儘撲ぐられ損にしてすた〳〵遁げ延びたが、何かしら水々したものが目の上から頰へかけて流れ落ちるのに氣附いて傍への小店の灯りて見ると、それを撫てた手の平

にはねば〳〵した血がべッとり附いてゐるのであッた。

「おや、ま、どうなすッたんですい。」と店の女房さんが愕いて立ッて來た。どうしたも何もない。何といふ亂暴な事をするものもゐたものだらうと冷吉は捩ぢ切りたいやうに悔しかッた。

「ま、あなた、そんなに闇雲にお障りなすッちやいけません。ハンケチかなんかでじッと押へてゐなさらなけや。……あれッ、目ですね。目から出るのですかい。まア、どうなしたのですぞ。」とあたふたした。けれど目ではない。右の目の上に傷を負ふたのだ。けれどもその方の目を閉ッて傷を押へて見た冷吉は左の目が眞ッ暗で何んにも見えないのに愕いた。

やがて冷吉は忌々しく目の上の傷に醫者の手當を受けてその足で警察へ行ッた。外には人がどや〳〵たかッた。

「けれどもあんたも何とか惡口かなんか言ッたんでしやうがの。何かなければ、あんたの言ふやうな、たゞそれだけの事でさういふ非度い事をする譯はないぢやないか。」と巡査は冷吉の陳述を信じないものゝやうな受け附け方をして、とにかくこちらで加害者を探し出して取調べるからと何んでもない事件のやうに言ふのであッた。それからのろり〳〵原籍や何かを聞かれてると、そこへ、

「どいて下さい。一寸どいて下さい。」と言ひつゝ入口に覗いてる人を押し別けて、息を切らした宿屋の主婦さんが周章てふためいてやッて來た。

「あなたどうなさりましたのです。どうした譯なのでござります。」と主婦さんは愕いて口もきけない。

「だれがしたんです。どこでゞございます。」おろ〳〵して、自分が調べるやうに切れ〴〵に聞きいらつのだッた。

翌る朝早く他（ホカ）の巡査が宿へ出かけて來て再び事情を糺した。加害者は昨夜直ぐ捕（ツカ）まッて一晩拘留されてゐたのだが、けさ假りに許されて歸ッたのだと巡査は主婦さんにさう言ッた。

「どうしてもあなたが先に下駄を投げ附けたんだと主張して曲げないのですが、たしかにさうではないのですね。かうなればすべて有りの儘に言ッて下さらんと、もしあとでさうでないといふ事になるとあなたの不得策ですから。」と餘計な念を押して行ッた。冷吉は何だか警察が間拔け切ッてゐるやうにじれッたくて、もうどッちがどうなッたッていゝのだといふ氣になッた。たとへ相手が罪に落された處で此傷が元に返る譯でもないのだ。それよりも、こんな拙らない傷我を受けたのが、どうせ後には母たちに知れずにはゐないのだといふ事が心を痛めた。どうしたッて此傷は直ッても跡が附くにきまッてゐる。もう宅（ウチ）へ歸らなければならぬ日になるまでも直らないとなると、かうした繃帶を當てたり何かして宅へ行かなければならないのだと考へると、情ない。歸ッて祖父や母たちに何といへばいゝのだらうか。主婦さんが、あゝは言ッても、やッぱり内證で母の方へ知らせを出しはしまいかと疑ぐられて落ち附かな

い。冷吉は見えぬ左の目がどうなるものなのかといふ大事な事よりか、かういふ方の心配ばかりに捕はれて、恰も母たちが見る目から隱れてゐるやうな、心持をして、不愉快に蒲團にはいッたまゝ目を冷し〳〵してゐた。さうしてつく〴〵考へ返すとやッぱり相手の奴が恨めしくてならなかつた。主婦さんは昨夜直ぐに本宅へ電報を打ッて此處の主人に急いで駈けつけて來るやうに言ッてあるから、もう來る途中だらう、さうすれば今にあの船頭を暗い處へ入れてやるのだからと言ひつゝ、大事な預りものを壞して言ひ譯がないやうに、いつまでもおろ〳〵心配して側に附いて看護したが、午後になッてから、やッぱり氣がゝりだから、どうても——町へ行ッて念のためにあれても一應專門の眼科醫に診て貰ふ事にしやうと言ッて伴れて出た。行きがけに係りの醫者の處へ車を下ろしてその事を話して置くと、醫者は傷や目に風が當ッてはいけないのだからと繃帶をして兩方の目を閉いて了ッた。冷吉はさうして汽車に載せられた。此醫者は左の目の方もたゞ打撲のために眼球に充血してゐるだけだからと事もなげに言ッたのだッたけれども、後から考へると何んにも別らないへボ醫者だッたのである。

冷吉は病院へ着くまでの間、もう何と悔んでも、どうなッても仕方はないのだからと思ッてつとめて他の事ばかり考へやうとしたけれども、すべてが、母の言ふ事を聞かないで出て來た罰だと思ふと、何

だか自分の平生の我儘な事なぞが心に責められて、もう例の鳥の女の事なぞを考へたりする事は出來なかッた。

病院て診察された結果はどうしても此儘此病院に入院するより外はなかッた。左の目は眼球の黄褐色をした部分の内部が壊れて後ろへ脱落してゐるらしいといふ診斷て、事によると目の球（ダマ）をすッくり抉（エグ）り出さなければならぬ事になるかも知れないと言はれたのてある。さうしてやッぱり兩眼共繃帶て鎖された。

「まア何と言ッてお宅（タク）さまへ言ひ譯をすればいゝてしやうかわたし。」とこゝへ來るまては傷の跡が殘る殘らないといふ事だけを主（オモ）に心配してゐたのだッた主婦さんは、今更のやうにおど〳〵したが、もうなッたものは仕方がない。こんな處にかうしてぐづ〳〵してゐたッて片がつかないからと冷吉に言はれて、主婦さんはまご〳〵しながら受附へ行ッて入院の手續をした後、

「あなたしッかりしてゐてくださいな。わたしは一寸いと急いて局へ行ッてまゐりますから。もうお宅へ默ッてはゐられません。」と冷吉を看護婦に託してせか〳〵と出て行ッた。かうなつては宅（ウチ）へ隱してゐる譯にも行かなくなッた。冷吉は母たちの愕き惑ふ狀を目に見つゝ看護婦に手を引かれて病室へ伴れられて行くのてあッた。看護婦は院長から注意されて、搖れ壊れるものを引いて行くやうにそろ〳〵と默ッて導いたが、

「此處から梯子段てございますよ。」とやがてさう言ッて梯子段の手擦りに片方の手をかけさせた。冷吉

はもしかかうして此れなり取り返しの附かない盲目になッて了ひてもするのだッたら、どうなる自分なのだらうかと、暗い悲哀に沈みながら、鼻緒の緩んだ上草履の足場を探り〳〵して階段を上ッて行くのに、人がついてゐても何かの角に撲ッつかりでもしさうな、上から何か落ちかゝッて來でもするやうな、不安な心持がはなれなかッた。

二階へ上ると看護婦は取り附きの室らしい硝子戸を開けて、少しの間此處に待ッてゐて下さい、あちらの室を拵へますからと假りに中へはいらせた。そこは疊敷になッてゐた。冷吉は周圍を探るやうにして、這入ッたばかりの處に坐ッて、看護婦が他の事を考へたやうにのそり〳〵下りて行くスリッパーの足音を何だか人が便りないやうな心持に聞き入りつゝ、悄んぼりと膝を合はせて待ッてゐた。――翌る日シャツを取り代へる時に附添うてゐるものゝ目に觸いたので知ッたのだッたけれどシャツの片方の袖口にべた〳〵附いてると言ッた血は此時にはまだ生々しく煮浸んでゐたのだッたかも解らない。――

何だか壁の剝げた、疊の汚れさゝくれた室に入れられてゐるやうな氣がするけれども、目を被うてゐるのだから元より實際を知り得る譯もない。どんな町へ下りてどういふ場處のどんな病院へ來てゐるのかそれさへも知らないのだッた。今此處で繃帶が除けられたとしても左の目には何の視力もない。さッき暗室に入れられて目の前にランプが附いた時だッても、たゞ火の中心らしい部分が日光のさした濁水の中で目を開けたやうに、茫とした漲ッた明りに見えたゞけてあつた。右の方の目は輕い打撲の爲に充血してゐるだけだから何も大した事はないのださうだけれども、當てたガーゼのために閉ぢられて絆創膏て

止めてあるのだから開ける事も出來ない。院長がそれを除(ハヅ)して目の中を調べる際に、冷吉は僅かに、凸面のレンズでランプの光線を注ぎながら、柄の附いた正方形の金屬板(バン)の穴から覗いて見る、髮を短かく毬栗にした院長の薄黑い顏の色と、カーキー色の上(ウハ)ッ被(ベ)りと、穴倉のやうなその室のぐるりの壁の黑いのは、さうした色の布(ツキ)で以つて天井際から蔽はれてゐるのだといふ事を見たゞけて直ぐに再び閉ぢられた。地方の都會の私設の眼科病院だからそんなに大きい立派な病院だとも考へられない。冷吉が今坐ッてゐる附近の部屋には、だれこそ人の這入ッてゐるらしいやうな氣色(ケハイ)もない。直ぐ外(ソト)の往來を、がた〱の乘合馬車らしいのが亂暴に駈け拔けた後(アト)は、あたりは谷底かなぞのやうな寂寞に返ッて、どこか梯子段の壁にでもかゝッてゐるらしい柱時計の、年老いたやうにかッちり〱と刻むのが淋しく聞えるだけであッた。も早日影も薄暗く蔭ッた時刻のやうに考へられる。何處となく夕方の蔭が見る〱灰黑く襲うて來るやうな心持がするのであッた。冷吉はかうしていつまで待てばいゝのだらうと考へた。と、間もなくとこ〱と階段を上つて來る足音がし出したので、さッきの看護婦だらうかと待ち設けたが、さうでもないらしく冷吉のゐる前を通ッて他(ホカ)の方へ行ッて了ッた。冷吉は繃帶の下の傷のちき〱と疼くのが段々に烈しくなつて來るやうな心持がして、憊れ沈んだ氣分は腐れるやうにいら〱した。もうどんな處でもいゝから一刻も早く蒲團の上に倒れたい。――冷吉は看護婦が來るまで少らくでも此處に横になッてゐやうかと思ふのを怺へ〱するやうにしつゝ、各の一秒がじれッたく底淋しく待ち飽ぐまれた。考へて見ると拙らない目に會ッたものであッた。何だか自分が求めて得た罰でゞもあるやうに忌々しい。

冷吉は、自分が町を出て來る際に、町筋のものたちが草履をばたつかせて門口へ出て來たりして口々にひそ〱何かいゝながら自分を見送ッた事などが目に浮んだ。子供等は目を被うた自分の前後をぞろ〱車について來た。自分は引合はないいゝ見せものになッた。町のものたちはさうしてもう濟んだ事のやうに何んにも忘れて了ッてゐるのだ。自分ばかりはこれから此病院でいつまでどんな日夜を見るのだらう。――下からだれだかばた〱と急いて上ッて來る。

蒲團の上に寢せられると直ぐから目を閉ッてずッと、昏睡したやうに、憊れた眠りに落ちてゐた冷吉は、不い圖寢飽きたやうな不愉快な心持に目がさめると、からだ中がじと〱汗になつてゐるのであッた。少らく自分の疲憊し碎けた氣持を見探りつゝ蒲團の襟を脱ぎ返さうとすると、じッと枕元に坐ッてゐたらしく直ぐに手を添えて剝ッてくれるのをやッぱり主婦さんだと思ッて、

「もうすッくり夜ですか。」と聞くと、

「冷さん目がさめたかい」とそれは自分の母であッた。

「もうさッきから來てゐます。御覽な冷吉、お前わたしのいふ事を聞いておくれてないから、とうとかういふやうな事になつて了ッたぢやないか。みんなお前さんが自分で招いた事ですよ。わたしはお祖父

さんに何と言ッて叱られて出て來たと思ッておくれかいそれもお祖父さんもわたしもまさかかうした非度い怪我だらうとは思はないての上でだよお前さん。」と母は見る〳〵やるせない涙を浮べたやうにかう言ッて叱り出すのであッた。そんな事を言ッて自分を責めたッてあゝした亂暴なものに出會はすのを知ッてゐて出て來た譯でもないのだから仕方がない。そんな事を言はれる位ならもッと隱くしてゐればよかッたのだッた。冷吉は口の聞きやうがないので

「そしてお主婦さんはどうしたの？」とついから他の事を言ッたが母は返事をしずにたゞ涙を啜つた。

「冷さんこれでもうお前さんの我儘には懲りて下さいよ。何んでもない事からとうと大事な片目を潰して了ッたぢやありませんか。それが宅へ對してはみんなわたしの罪になッて了ふのだもの。お前さんちッとはわたしの心持にもなッて見ておくれよ。」かう言ひつゝ母は言葉を途切ッて、考へ入ッてゐるらしかッたが、やがて氣を換へたやうに、

「けれど言はゞやッぱりわたしが惡かッたんです本當はお前さんがどんなに言ッたッてもわたしが飽くまで出さないで置けば何のいふ事もなかッたのに。まア何といふ災難に會ッたものだらうね。かうして生れもつかぬ片輪になッて了ッて……。」と溜息をしつゝいつしか自分で自分を責め悔いるやうに言ふのであッた。冷吉は何だか自分よりも母が氣の毒なやうな氣になッて來て知らず〳〵繃帶の下に涙ぐまれた。一人の母の口から自分が片輪になッたと言はれるのを聞く、その片輪といふ言葉も自分と母とのために悲しく心にしみ入るのであッた。冷吉は動く事の出來ぬものゝやうにじッと横臥した儘默ッて

ゐた。やだて母は

「冷さん冷えるといけないからもう蒲團をお着なさいなね。」と一枚だけ着せ被けたが、

「それからお前、何か食べなければお腹がすいたらう？だッてもお夕飯が來ても一口も食べなかッたといふぢやないか。あそこにミルクが買ッて來てあるやうだから、あれでも溶いて上げやうか。ねお前。」と言ひつゝ蒲團の肩先を押へた。

　そこへ徐ッと戸を開けて主婦さんが何處からか歸ッて來た。

「やッぱりわたしが出しました使のものが歸ッてまゐりましたのでございました。丁度あなたと同じ汽車で着りましたのでございましやうけれど。」と主婦さんは病人に遠慮するやうに小さい聲で話した。

「とにかくさッき申しました容體書きを一應警察の方へ出して置いてそれから宅へ廻ッて歸りましたのですが、宿もわたしたちがこちらへ出てまゐりますのと探れちがひに着きましたさうで、早速先方のものゝ處へ押しかけて手ひどく切り込んだやうでございます。丁度使のものがまゐりました時分には何んでも向うの仲間らしいものが三四人手前共の方へまゐッてしきりに何か頼んでゐたやうだッたさうでございますが、わたしは、どうせ罪が遁れられないものと見て示談にでもしやうといふ積りで運動してゐるのではないかと思ひますね。けれどそんな、あなた虫のいゝ話がございますものですかねえ。本當にそれはもうあなたどんな目に會はせてやッたッて足りるのではございませんのですから。それにあの男の平生の所業から考へましても警察があゝした手ぬるい處置をしてくれる筈のものでもないのでござい

ますがねえ一體警察ではどうしやうといふのでございましやう。」
「でももう何と言ッたッても取りかへせない事なのですから、そッちの方はどうでもようございます。此子が平生我儘をする罰なんですから。」と母はかうなッた段にいくら寄コボしたッて仕方もない事だといふやうに投げるやうにかういつた
「ですけれど、何と思ッて見ましてもいま〳〵しいぢやございませんか。——いゝえ、どういたしましてあなた。わたくしは奥樣の御心の中をお察し申しませばわたしなぞはどんな目をいたしましても申譯は立ちませんのでございますから。——おや御目ざめで入らッしやいますのですか。」と主婦さんは例の冷し藥の土鍋に藥を注けるらしく、
「もうさッきおやりなさらなければならなかッたのでございますけれど餘りよくお寢ッてゐらッしやいましたものですから。それから此お藥をもう一度召し上るのでございますか。」
「おやこれは罐がちやんと口が切ッてありますね。それぢやその後アトでもッとお湯をあつくして戴きましやうか。」
「ですがミルクよりか奥さま、ざうさはございませんから一寸お粥ナニを何いたしましやう。その積りでお米もそこにその袋の中に少しだけ買ッて來てございますのですよ。ついそこの廊下に水も出るやうになッてゐるのでございますから。」二人でこんな事を言ッてゐる。暫くして、
「これはハミガキに楊子に、これは片栗ですか。」

「わたしはついうッかりいたしましてお砂糖を買ふのを忘れましたものでございますから。」

「まアま、あなたお大抵ぢやございませんでしたねえ。何から何まですッくりかうして、本當にお蔭さまでございます。」

「何ですか、まだいろ〳〵足りないものがございますが、今日昨日だけなくても我慢出來ますものはこのうち宅からすッくり持ッてまゐります積りで。——何それはわたしが何いたします。まだ勝手がおわかりなさいませんし。」

冷吉はかう言ッたやうな二人のひそ〳〵した片隅の話を聞きつゝ蒲團を被ッてゐたが何だか左の目がひょれが入ッたやうにぴり〳〵するのが、この先どんな事になるのかをもの暗く案じさせた。

「冷吉。一寸起きて目のあれをおしよ。」と母は言ッた。主婦さんは側へ來て繃帶を解くのに手を添えた。母は默ッて傷がどんなに被はれてゐるかを見探ッてゐるらしかッた。冷吉は右の目は閉してあるまゝで左の目を開けて起き直ッてゐるのだけれども、もとより例の水の底のやうに茫と明ッた灯のもや〳〵する外には何んにも見えはしない。

「これは電燈ですか。」と言ひつゝ下ろされた土鍋の上に顔を屈めて、藥りに浸したガーゼを箸で摘んで目に當て〳〵した。時計が外の廊下の方で一時を打ッた。

「おやもうそんなになりますかね。お主婦さんあなたはもういゝ加減で御寢なる仕度をして下さいな。あとはわたしが何いたしますから。」と母は、冷吉が零した水の滴りを紙を出して拭くのであッた。主婦さ

んは何をか提げて外へ出かけたが

「おやお星さまが流れて。」と獨り言のやうに小聲にかういひつゝそッと戸を閉ぢて足音を盗むやうに廊下を向うへ行ッた。

「冷吉お前こちらの目は全て見えないのかい？」と母は氣の毒がる主婦さんの一寸いとゐなくなるのを待ッたやうに恨めしさうにかう聞いた。一時と言へば眞夜中である。死のやうに、しんとした外には、木立にざわ〳〵と疎らなやうな風が渡ッた。

「となりの部屋にはだれかゐるの。」と冷吉は聞いた。

「何故。」

「何かがさごそ言はせてるやうだから。」

「さうね。だれかゐるらしいね。こちらでどさくさ出はいりしたりするから目がさめたのだらう。小さい聲をなさいよ。もうそれだけていゝのかい冷吉。」

九時からの診察のベルが鳴ッつたのでやがて冷吉は母に伴れられて、そろり〳〵病室を出た。此のやうにして自分の母が來て附いてゐるといふ事のために、昨日來た時とはちがつて何だかもう長くかうし

て居着いてゐる、當り前の處にても生活してゐるやうな或ものが感ぜられた。

下には大分ごた〳〵外來の患者が來てゐるやうで、女たちが濁ッた訛りでひそ〳〵話してゐたりするのが聞えた。ベンチにかゝッて待ッてゐると、四つ五つの男の子のやうに思はれるのが、冷吉の直ぐ側へ來て、がさごそとベンチへ上ッたり下りたりして目まぐろしくて仕やうがない。伴れて來てゐる下女らしいものが人前の體裁だけのやうにちよい〳〵甘ッたるく叱るだけだからやッぱりがさごそとにじり廻ッて、何かの木切てそこらをぎい〳〵かなぐッたりする。診察室からは昨日の看護婦が淋しい女のやうな聲をして患者の名を呼び〳〵した。藥でも注されたらしく物に怯えたやうに逆せるばかりに泣き立てる赤ん坊をすかしながら外の方へ出て行くものもあッた。これは五錢銅がねもし？ヒヽ、どうもすみましねい。いやはやどうもさッぱり見えねいてござして。」と受附の方て頓狂な聲をして年寄らしいものが金を拂つてゐる。すべての容子が、どうしても薄汚い、剝げ古りたやうな小さい病院のやうに思はれた。冷吉は間もなく昨日の暗室に入れられて診査された。

「ね、そら、動くだらうぴり〳〵と。そ、肉眼でも見える。」と院長は助手の醫員に研究させるためのやうに例の四角な金屬板の穴から覗かせた。母もいつしか側へ來て立ッてゐた。

「どうも少し込み入ッた症候てすから……。」と院長は何かを警戒させるやうにかう言ひつゝ右の方のガーゼを除ッた。

「まア隨分非常い事をしたものでございますわねえ。」と母は初めて傷を見ていた〳〵しさうに沈んだ口

を聞いた。

「もうはッきり見えますか。こちら、これを見て下さい。——變ッてゐる。——でももう此方は大丈夫です。目の神經が疲れてるから少しもやもやするのでしやう。もう何んでもありません。——これはどうしても少しは跡が附くなア。痛いですか。」と院長は傷口の附近を指で押へて見た。

それから診察室へ歸ると兩方の目へ注し藥をされて、目の内側の角をどちらとも人差指で押へさせられつゝ、ソーフアに椅けてさうしたまゝ少らくじッとしてゐなければならないのであッた。そこを押へてゐる譯は、後に看護婦から聞いて別ッたのだけれど、その下の處が涙の出る口になッてゐるのださうで、さうして口を塞いでゐないと涙がながれて藥を外へ出して了ふからなのださうであッた。藥は咽にむせんだ時のやうにじくじくと目に浸みた。

さうしてる内に、女らしい氣色の一人が冷吉の左側の空いてる處へ來てそッと腰をかけた。冷吉は一すいと袂の先を、敷かれて氣になるやうな心持がしたので、肘を上げて徐ッと引ッ張ると、

「おや御免下さいましよ。」と落ついた品位のある言葉で小さく女は挨拶をした。十八九の女のやうに考へられる。さう言ッて立ッて坐り直す着物の微かにすれる音もいゝ着物を着てゐる女のやうに受け取られた。患者は代りがはり這入つては出た。五分ばかりも立ッたと思ふ頃冷吉はもう一度左の目に藥をさゝれた。

「もうこちらは押へてゐなくてもいゝです。」と言はれたので手を下ろしたが、何だか目を開けて周圍の

容子が見たくなッたので、傷がたくれるやうに痛いのを我慢して、僅かに少さく開いて室内を見廻した。院長の前には手拭を髪に被ッた在方の女房さんのやうなのが椅子にかゝッて診察されてゐた。院長は汚點だらけの上ッ被りを着て、口の聞きやうからがいらくしたらしい、物に構はないやうな氣の置けない醫者であッた。小さい藥壜のごたく並んだ圓卓の向ひ側には、學校を出たばかりのやうなさッさの醫員が、白い上ッぱりに時計の鎖を覗かせてペンを走らせてゐた。院長の傍に立ッて脱脂綿を裂りくして渡してゐる看護婦は、聲で想像したやうに、痩せしなびた淋しさうな女て、白い上着の袖口を赤いリボンを千切ッたやうなもので結んでゐるのが著しく目立ッつてゐた。冷吉と向ひ合ッた方の汚れた白木綿のカーテンの下にも四五人の患者がソーフハにかけて同じやうに目を押へてゐるのであッた。大方は手織縞の古けた着物を着た在方の男のやうなのばかりで、帶をだらしなく結んで、窮屈さうな格好に上前をねぢくれさせたりしてゐるものなぞがあッた。冷吉は傷が釣られるやうに障るので目を閉ぶッては開けくして、すべての容子を納得するために、そろりく順々にあたりを見た。鴨居の壁には月球の圖を見たやうなものが血のやうな色で摺り出された挂圖がずッと並べて下げてある。それは何か目に關した標本圖だらうと考へられた。再び院長の方を見ると、後ろの、向うへ出はいりする襖の引手が取れて穴があいて、裾のあたりの破れ目へ違ッた紙がべッたり貼ッてあるのが目についた。室内のすべての光景は、何だか自分ばかりが平生贅澤ばかりしてゐるのを戒められるやうな質素な感じを與へるのてあッた。さうして何の傲慢や厭味の壓迫がないため、少し開いてゐればすぐ疲れて曇ッて來る、小暗い

心持のする目に取ッて、何となくすべての人が親しいやうな家庭的な心持がして、もう久しくからして毎日來てゐる續きのやうな氣分が浮んだ。となりにゐる婦人は此時第二回目の藥をさゝれるやうてあッた。

「そんなに非度く浸みつきますか。」と院長がいふ。

「はい。少うし。」と女は氣のやさしい、しッとりした婦人のやうに靜かに答へた。冷吉はどんな女なのか見たいやうな氣がするのだけれども、押へてゐる方の目の側に腰をかけてゐるのだから、顏をそちらへ廻して見るわけにも行かなかッた。

「冷さん、わたしは一寸いと上へ行ッて來ますからね。」と母は何處からか側へ來てから言ッた。冷吉は女の事はそれて忘れて外の事を考へた。やがてまた再び何ものも見えぬやうに繃帶をかけられて了ッた。さうして上へ上ッて暗い眠りに落ちた。主婦さんはまだいろ〳〵と足りなかつたものを買ッて來て置いてくれて正午前に家の方へ歸ッて行ッた。

からして冷吉は日に二回の診察の際の外は晝と夜の別もなく暗く被はれた目に、何の形も色も見る事は出來なかッた。――病室て掩法をするのに繃帶を解きはするけれどもその時分には見える方の目はや

ッぱりガーゼに閉ぢられた儘である。――それに診察に下りる以外にはなるべく少しても動く事を禁ぜられてゐるので終ん日蒲團の上にそッとしてゐなければならなかッた。さうして、氣の疲れといふものか、母が愕く程、じッとしてゐるとすぐに、寢入ッてしまふのであつた。

「でもあんまり寢てばかりゐるからさ。これをお上りな。」と母は氣にして時々目をさませてウエーフハーや何かをくれたり、話をしかけたりして氣を紛らせた。或時母は、

「冷さんこゝにもく／＼あッたかい日向があるから出てお坐りな。」と徐かに蒲團を出させた。外の往來に面した方に硝子窓が二つあッて、黒い色のカーテンがかゝッつてゐるのださうであッた。右手の方のを開けて跨ぐと、外の小さい張出に出られるのだといふ。母はそこのカーテンをめくッて疊の上に日向を作ッて冷吉を坐らせつゝ、自分も坐ッて外を見やるやうであッた。

「此あたりはずッと小さい内ばかり續いてるのね。後ろはすぐ畠よ。麥だらう大分靑くなッて。丁度天滿町見たいな處。」母は獨り言のやうにかう言ッて、冷吉の市の市外の片側町に比較した。母はもう此度の出來事については何んにも零したりするやうな事はなかッた。

「ずッと遠くまで畠ですか。」と冷吉は言ッた。

「あゝ隨分さき迄見えるよ。向うに火の見の柱があるのが今氣がついた。玩具のやうに小さく見えてるわ。――一たい海の方はどちらになッてるのだらうね。」といふ。

「此方角だろ。」

「嘘。どうして？」

「でもさういふ氣がするもの。」

「フヽヽそれはたしか違ッてるよお前さん。」と母は見えない目を勦はるやうに淋しく笑ッた。冷吉は何んでもして見たい小さい子供のやうに坐ッたまゝ探り〳〵に室を開けた。閉ぢて坐ッてる日向はあたゝかいけれども外は偶にほろゝ冷たい風がすう〳〵する日であッた。何だか、下の灰色な古い町筋を黄色い塵埃が泥のついた鉋屑などを巻いて、發作的に低く立ち〳〵してゐるやうに想像された。

「もうおしめなさい。あれ〳〵火鉢の灰が飛ぶわ。」と母は制した。かうして母は盆を膝にのせて夕方の菜の何をか小さいナイフで切ッた。一等の賄だといふけれども、粗末で味が惡くて食べられないので母はそこらへ仕附けない買物に出ては三度〳〵の菜を拵へて、病院で出すのは、食へないものはその儘に下げた。飯も冷めたくなッてゐたり硬かッたりするので冷吉のには度んびに粥を作ッた、冷吉はかうしてゐてもやがて飽きてまた蒲團の中にはいッて夕刻まで寢た。さうしては夜中になッて不圖と目がさめてそれぎりどうしても寢つかれないやうな事があッた。冷吉はそんな時に、何時とも別らない夜ふけの中にいろんな事をまんじりと考へて、仕まひに淋しくなると寢入ッてゐる母を呼んだ。母は床にはいッてもちやんと目を開けてゞもゐるやうに、呼ぶと直ぐに目をさまして枕許の蠟燭に火をとぼして、用事を聞くのであッた。さうして母と二人でひそ〳〵と何くれの話に入る事もあッた。それでも、療治を受けたりした後は少らく徐かに寢る方がいゝのだと院長は言ひ附けた。

四日目の日に宿屋の亭主が來た。さうして母と加害者の處置について相談した。冷吉にはもうさういふ事は、履かれない古ぼけた下駄をでも見るやうにどうでもいゝやうな氣がして、今からまだほじり出して突ッつかんでもいゝ事のやうに考へられた。丁度午からの診察の時間だッたので伴れられて下へ行ッた母は再び上つて話をした。

冷吉はかうして診察室へ下りて來るのが一ん日の何よりの變化であッた。午後には學校から歸ッてから出かけて來るらしい、病院に來馴れたやうに方々を飛び廻る二三人の子供等もあッた。外の室のベンチに待ッてゐる間、足下の疊の上で小さい聲で數を取りつゝ手毬をつく女の子もゐた。此等の小供等は大抵一寸いとしたトラホームにかゝッてゐるだけのもので、病氣とも何んとも思ッてはゐないのだから平氣で跳ね廻るのだと側にゐた老人が言ッた。その人はトラホーメー、トラホーメーと言ふから冷吉はくすくす可笑しかッた。

もう右の方の目ははッきり物が見えるやうになッた。外部の傷も癒着りかけたから四五日もしたら片方だけは繃帶が取れると院長は言ッた。

「こちらはどうもまだじッかり見當が附かないのですがね。とにかく容易な症狀ではないのですから。」

と院長は仕まひは愼重にさう言ッた。冷吉は例の目の角を押へてゐる間、ちよい〳〵右の方を開けてはあたりを見た。中には師範學校の女子部かなぞの生徒を見るやうな、粗末な田舍〳〵した女學生の患者が診察が濟んでから、歸る時間を書いたらしい帳面へ院長の印を捺してもらふのもあッた。不自由になれたやうな氣の毒なやうな氣のする女であッた。並んで坐ッてゐる內にいつとはなく每日口を聞き合ふやうになッた入院患者の一人が這入ッて來て向うに坐りかけたが、冷吉を見て側へ來てかけつゝ、

「一寸何があるか當てゝ御覽なされな。」と握り手を出した。この男は、釘に撲ッ附かッて目を突いたのだといッた。來年が檢査だといふのに、全て子供〳〵した人のいゝ田舍の百姓であッた。手の中には持つてゐたのは鉛で拵へた、押へれば潰けさうな小さい玩具の時計であつた。今外に小さい藥師さんの祭があるのへ出かけて一錢で吹矢を吹いて當ッたのだと言ッた。懷ろには靑い色の安つぽさうな紙入を買つて持ッてゐた。

「は、籾殼を中へ入れて膨らかしてゐやァがる。ヒヽヽ」と小さい聲で言ッて獨りで嬉んでゐた。時計をくれやうといふから冷吉は馬鹿げてゐるやうな氣がしたけれども仕方なしに貰つた。此男は此病院の事を何んでも話して聞かせた。

「受附の隱居を調弄ッて見て御覽。面白から。」といふやうな事を言ッた。少し足りない人間のやうでもあつたが冷吉は何だか惡氣のない快活な處が好きてあッた。袂から紙を出してわざ〳〵紙縒を拵へて、長くつないだのを看護婦の背中へくッ附けて知らぬ顏をしてゐたりなぞして人を笑はせた。入院患者は

下に五人男がゐるのださうである。一つの部屋に固まつてゐるのだと言ッた。
「女の方の部屋にはあの人がたッた一人での。」とその男が指したのを見ると、それは下女のやうに髮を汚なくして、赤い小帶をくる／＼卷にした薄汚い女だッた。此間となりに腰をかけた、綺麗な人らしい氣のした女はあれ切り一度も見かけないのであッた。或は見たかもしれないけれども、少く共その人だと思ふやうな女は一人も見當らなかッた。一人、前垂れがけの商家の手代らしい男で兩眼共繃帶をされてゐるのに、手も引いても貰はずに壁をたどり／＼して馴れ切ッたやうにさッさと一人で病室の方へ歸ッて行くのがあッた。あれはかさて兩眼が潰れたのだと例の男が話した。

その午から冷吉が蒲團の上に坐ッて掩法をしてゐると受附の、歯のとれて口をあぶ／＼させて物をいふ大木さんが上ッて來て、
「かういふものださうですが、何とか言ッてるのが私にはよくわからないでございますが、とにかく、一寸會ッていたゞきたいと申しますです。それからこれはほんのお印ばかりだと申しまして。」と例の、口をもか／＼させて取次をして來た。
「だれてしやうね。かういふ人はわたしの方ではどうも心當りがないのですが。………はゝア、、て

はあの、船頭か何かのやうな容子の男ぢやありませんか。」と母は聞いた。

「さうですね。さうお言ひですと矢ッぱり、かう……へい、さうですね。さういッたやうな、はい。」

「ではね、御面倒さまですがね、その……かういふ心づかひなぞされてはこちらで迷惑しますからッて、しづかにさう言ッてこれを持つて返させて下さいませんか。そして、もう一切の事は綱浦館の方で、――綱浦館。――その方で取計ッてくれるやうにしてあるのだから、言ふ事があるならそこへ行くやうに、わたしの方では一さいあなたがたにはお會ひ申しませんからッて、恐れ入りますが、さう言ッて歸して了つて下さいませんか、多分さういへば通じる方からまゐッたのでしやうから。」

「へい、〳〵。」と大木さんは下りて行ッた。母は例の加害者が出て來たものと考へたのである事は言ふまでもない。

「あいつが一人で來たんだらうか。」

「どうだかお母アさんには別らないよ。」

「ことはりを言ひに來たのかも知れないね。」

「さうかもしれない。」

「何を持ッて來たの？」

「何だかろく〳〵に見もしなかッた。」と母は考へたくもない忌々しい事を考へさせられるやうに不愉快さうに言ッた。

「もうお前、あの方はさッき話したやうに、どうでもいゝからッて綱浦館の主人にもさう言つて置いたんだしね。うるさいからもう放ッて置くのさ。」

「あそこの亭主が許しとくだらうか。」

「どうでもいゝのさ。こちらは。」

冷吉はあの夜生れてはじめて警察の一室に這入ッた事なぞを、も早疾くに隔ッた昔の事のやうに思ひ出しつゝ目を冷した。やがてまた大木さんが引き返して來て、

「たゞ今のはとうとその儘歸ッて行きましてございます。一寸とていゝから一と言御挨拶がして歸りたいッて少らく突ッたッたまゝぐず〳〵して居りましたッけが。」

「さうですか。どうもお厄介てした。ちよいとお待ちなさい。つまらないものですけれど。」と母はもうそんな事は忘れて了ッたやうに言ひつゝ大木さんに何か手の平へ入れてやるやうてあつた。

「へい〳〵これはどうも、たび〳〵どうも、へいもう澤山てございますいえ、もう、はい〳〵。」と大木さんはあッぷ〳〵した口て禮を言ッた。

冷吉はいちんち仕方なしに同じ蒲團の上て寢てばかりゐるのにも、いゝ加減に飽きた。

「もうこんな處にゐるのは厭になつた。いッそ宅へ歸ッて了ふといゝね。」と冷吉は壁の方へ寢返りをしつゝ言ッた。

「だつても仕方がないぢやないか。そんなに譯もなく歸ッて行けるものならお母アさんだッてかういふ處にゐたくはないけども。」

「まだ中々夜にはならないだらうね、お母アさん。」

「あんな事をいふ。まだ午からの診察も來ないぢやないかい。あら、また、切ッたね、およしよ冷吉、子供のやうに何てす。」

「切りもしないに。」

「見たよ。ちやんと。」冷吉はする事がないから時々手をのべて探ッては、蒲團の綴絲をぶすり〳〵切ッた。母はさッきからお祖父さんへ出す手紙をかいてゐる。冷吉はもう綴絲も切れないので、少し逆せた唇の皮をぶきり〳〵捲りつゝ、宅の朝夕の有樣を考へて見たりした。自分たちがゐないから、弟がいゝ氣になッて子供らを寄せ集めて、來て自分の机のまはりなぞを掻き廻してゐるだらうと考へる。祖父は弟のする事は何をしても叱らないで自分ばかりを仇敵のやうにがみ〳〵いふのだ。さう思ふと弟を此處から撲ッてやりたいやうな氣もするけれども、夜になッて祖父は早くから寢て了ッて、跡はお由とたッた二人になッて了ふ一と間で、お由が晝の内の小使を、下手な假名で例の横綴の帖へ、考へ出しつゝぐずり〳〵いつまでも附けてゐる側に、足を投げ出して、寢むさうに目をこすりつゝ、さびしさうに洋燈

の火を見てゐる狀を考へると、弟のために早く母と二人で歸ッてやりたいやうに可哀相な氣持がして來る、冷吉と此弟との間には男の子ばかりが二人ゐたのだッたけれどもいづれも小さい内に亡くなつて了ッて、次の分なぞは顏もよく記憶してゐない位である。下から二番目の修二は三年前までは生きてゐたのだッたから、考へればまだゐるやうに目に浮ぶ。冷吉はその病身でぐず〳〵してばかりゐた物蔭のやうな弟の事をも考へた。

やがてそれにも飽きて、母が昨日拵へてくれたくけ枕の、丁度八百屋に蕎麥糟がこれだけかなくて、袋の割に中が少なくてぐにや〳〵してゐるのを、頭を上げて片方へ寄せて餘ッた布のはしを握りつゝ、暗く被うた目の上に、瞼を通す晝の光りがもや〳〵と黑く影り〳〵するのを見守ッてゐたが、不圖窓のすぐ外を何か小鳥がチゝ、と鳴いて過ぎたらしいのに注意が引かれた。チゝ、とまた鳴いた。冷吉は自分の耳を半ば疑ひつゝ、

「鳥ですか今のは。」と突然母に聞いた。

「さうかい？」と母は氣附かなかッたらしく、やッぱり手紙をかき續けるやうであッた。

「もう飛んでッた。鳥だらう？」と冷吉は、母の後ろの片隅に、用事もなく手先をいぢくりつゝ坐ッてゐるらしい傭ひ女に向つてさう言ッて聞いた。これは母が晝の中、使ひ歩きなぞに出すために賄の婆さんに世話をして貰ッて近所から傭ッてもらッた女の子である。口のきゝ方をしらないのがはづかしくてか、母が用事を言ひ附ける時に「へ、ゝ。」といふだけで、あとは所ッ中默り込んでばかりゐる。どんな

女かまだ見もしないがどうせ此あたりの汚ない家の子で行儀も何もしらない下素な子らしかッた。こいつが疊を歩くと、ざら〳〵と鱶の皮の干したので擦するやうな音がするのが耳につく。けれども、だまッて氣まり惡さうにじッとしてるらしいからいぢらしいやうな氣もした。

「ね。おい。」と冷吉が言ッたので女は徐ッと立ッて窓の處へ來てカーテンを開けて外を見るらしかッた。さうして、

「えゝ、そこにゐますよ。」と母の手紙をかく耳障りになるのを憚ッたやうに小さい聲でいふ。

「どこに。」

「すぐそこに置いてあるのでございます。」

「そこに寫ッてる影は鳥籠かい？あれは。」と母はざわ〳〵と手紙を卷きつゝ言ふ。

「さッきから何だらうと思ッてゐた。おとなりの方が飼ッてゐらッしやるのかい。」

「へい。」と女は言ッた。

母も冷吉も今までそれには氣もつかなかッた。けれどそれは向ふの方の窓の釘にいつもかけてあッたからなので、も早前からゐるのださうであッた。此小女は此前にも一度入院してる人に傭はれて來た事があるのださうだから、それを知ッてゐるのであつた。今日はブリキ屋が來ていつも鳥籠をかけて置く板壁のそばの雨樋を直してゐるのでこちらへ置かれたのだらうと話した。さういへば成程先ッきから向ふの方でブリキを叩いてるやうな音が、外のどこかでとゝのやうに聞えてゐる。鳥はこちらでは前にどこか

らか黒猫が來て籠を引ッくり返した事があッたから險のんなのだと女は默り込んでばかりゐる癖に何てもよく知ッてゐた。冷吉はとなりにどういふ人がゐるのかといふ事さへ知らない位なのであッた。

「さうね。どこかの孃さんのやうね。」と母は何かをしつゝさう言ッた。女は、

「へい。」といッてるだけである。

「大變におしづか方な。終ん日ゐなさるのかゐなさらないのか別らないくらゐよ。ちよい〱そこいらを往き來してる人はあれは内からついて來てる女中さんかい。」

「どうですか。さうでございましやう。」母はそれぎりで話を切ッて了ッた。一體て要らない餘計な事は聞きほじッたりなにかしない性質だからそれより深入ッて聞きもしなかッた。さうして鳥がかうした病室に飼はれてゐるといふ事にも格別興味も持たぬらしく、やッぱり手紙でもかき續けてゐるらしかッた。冷吉はどんな鳥がゐるのだらうかとひとりで考へた。さうして婦人といへばどんな婦人がゐてその鳥に餌をやッたりしてゐるのだらうかと思ふ。しかし女だといふから何だか自分で變なやうに氣が引けて、どんな人かといふそれだけの事を聞くのでも間が惡い。冷吉は此處へ來た翌る日、はじめて朝の診察に下りてゐた時に、自分のとなりに腰をかけた、なつかしい物言ひをした女の事を考へ出した。あの人がとなりにゐるのだッたらいゝのにと何といふ譯もなくさう考へた。あの婦人だッたらいゝのだ。けれどもあの人はもうあれきり此間から診察を受けに來たのを見ないのだッた。だからとなりのはあの人ではないかもしれぬけれども、どんな人だといふ事がわからない限りはやッぱりあの婦人だと思ッてる方が

物なつかしい。さうして鳥を飼ッてゐる。目がどう惡くて入院してゐるのだらう。何となくたゞ仄かに暗い目を久しく病んで悲しいといふ程でもなくもの丶悲しい沈んだ日夜を見守る女なのだッたらあの時分に聲なぞで想像した容子に似合はしい。――かう考へたどりつ丶冷吉は、不い圖さういふ女のあして飼ッてゐる鳥は例の悲しい戀の印のやうな赤い鳥でなければならぬと考へ合はせた。さうしてやつぱり實際がその通りであるかもわからない。かう思ひつ丶冷吉は、此病院へ來て以來しばらく忘れてゐた、鳥の女の事を考へた。

「おい。」と冷吉は言ッて小女に聞かうとした。

「へい？」と女は返事をする。さうではないのだらうか。何だか、聞いて見てそれが赤い鳥でなかッたら、せゐがない。――冷吉はそれなり默ッて了ッた。やがて、

「冷さん。〳〵。」と母がいふのに、冷吉は我に返ッた。さうしてまたあの鳥を逼がして出て行くシーンを考へ入つてゐた事に氣がついた

「もうぢきに診察の時間ですよ。目をさましてゐなさいよ。」と母はいふ。寢てゐはしないのだから大丈夫だ。

「ではお前、あとで冷吉を下へつれて行ッたら、その序に此手紙を出して來ておくれな。いゝや、今てなくてもいゝのだから。」と母は女に言ッてゐる。

「さうしたら、もう今日は內へ歸ッてもいゝよ。さッきので何んにも買物の方は濟んだのだしね。」とい

ふ。もう張出の鳥は鳴かなかッた。

冷吉はやがて此小女に手を引かれて例の、そろり〳〵梯子段を下りる時に、

「あの鳥ね、おい。」と遂に女に鳥の事を話しかけた。

その晩宅の祖父から母へ手紙が來た。

「どうなりとして一寸わたしに歸ッて來いとかいてあるのよ。」と母は言ッた。

「くわしくかいて送ッても手紙では事情が盡くせないからいろ〳〵に心配して入らッしやるのだらう。一寸歸ッて容子を話して來ればわたしも安心して出てゐられるのだけども。」

「でもさッきも手紙を出したぢやありませんか。」

「さうしてお前さん、わたしもかうやッて來のみ着の儘みたやうなものだから、どうしても一寸歸ッていろ〳〵持ッて來るものもあるし、出るなら出てゐるやうに内を何して置く手順もあるしね。今日て六日になるかねわたしが來てから。」

「どうだか。」

「うッかりしてゐて、もう彼此月末になッて來たよ。」と宅の何かの事を考へるらしい。

「ぢや歸ッて來ればいゝじやないか。」

「だッてお前さん、歸ッて行くと言ッたッて跡がどうもならないのだからその間由にても來てゐてもらはなければ。」と困ッたやうに考へてゐる。

　冷吉は一ん日二日獨りてゐたッて構ふものかと思ふ。毎日何の變化もなくじッとかゝしてゐるだけだから、附いてゐる母がゐなくなるといふ事それ自身さへ一つの變化になるやうな氣もするのだ。どうなりといゝやうにするがいゝ。それよりも此方(コナタ)はとなりの女があの婦人てないのだから考へると何んだかつまらなくなッて了ッた。今日小女に何でもない事を聞くのてはなかつた。晝間(ヒルマ)の鳥が赤い鳥だつたらあの婦人だらうけれど、何鳥かしらないが赤いのてはないのだからあの人てはない。それにもう此間からあれきり毎日ゐないやうだし、どうしてもあの人とは考へられない。

「あら、赤い鳥といふものがゐるてござしやうか、わたしは見た事もございせん。」だ。馬鹿な女てある。自分は目をおそうてゐるのだからまだいゝのだけれども、目が見えたら、どんな汚ない小女だか。——冷吉は獨りてこんな事を考へた。

　翌る朝母はどうても一寸歸ッて來る事に極めた。

「一寸の間だからね冷さん。夜の列車でまたすぐ來るのだから。」と母はすまない事のやうに言ッた。そんなに言はんでも此方は何んでもない。留守の間の事は小女ではしやうがないから看護婦が出來るだけ世話をすると言ッて引き受けてくれたのだといふ。九時の診察がすむと母は仕度をして出かけた。丁度そこへ看護婦が上ッて來て、

「あの奥さま食麵麭はどこにもないのださうでございますが。」

と廊下で母と何とか言ッてゐる。母はその儘下りて行ッた。看護婦は入れちがひに室へはひッて來て、跡を引き受けてよくするから心配はないといふ事を母に示してもするためのやうに、

「坊ッちやん。」と物を言ひかけた。冷吉は寢た風をしてゐて見た。

「おやすみだ。」と例の淋しさうな聲で小さくさう言ひつゝ、そッと出て行ッた、早く下へ行ッて診察室に歸らなければ、看護婦は一人しかゐないのにと冷吉は思ッた。

一度掩法をしてからうと〳〵してゐたと思ふ内にもう午になつたのだッた。看護婦が三度目に來て食事を運んで給仕に附いた。

「お淋しいでしやう急に。早く傷の方の繃帶がとれますとちッとはお氣がまぎれるでしやうがね。おや、あなた、肉はおきらいですの。その煮たものだけで我慢して下さいますか。それではめし上るものがございませんわね。」といふこんな石駄の皮のやうなのが食へるものか。箸で突いて見れば別るのだ。默ッて給仕をしてゐればいゝ。厭な女でもないけれど、母にまた金でもひねッてもらッたものだから宅のも

のゝいふやうな事を云ふのだと思ふと面白くもない。

冷吉は午からはもう寢られなかッた。母がゐた前では何だか女の事などを考へるわけにも行かないから忘れてゐたけれども、母がゐなくなッたから考へる事がないとやッぱり女の事を考へる。と、昨日の鳥がまたちッちと啼いた。外は黄色い濃い日が當ッてゐるやうにあたゝかい日であッた。鳥はやッぱり今日もあすこに置いてあるのと見える。もう駄目だ。あんな赤くもない鳥が何になる。さうしてあの婦人より外の女がとなりにゐたッても何んにゝもならない。どうせろくな女でもないのだ。やッぱり薄汚ない田舍の女なのだらう。冷吉はさうしてまた今まで考へた續きを考へた。なぜ自分には戀する女がないのだらう。女がゐて戀ひても會はれないでかうして暗く寢てゐるのだッたらいゝのだのにと思ッて見る。けれどもいくら考へても自分には女がないのだから駄目である。

何だかひとりて飽き〳〵した。やッぱり母がゐなくてはいけないと思ふ。看護婦が目を冷すのを世話をしに來た。それから二度目の診察の時間が來た。ベンチに待つてゐると例の子供等が今日もわい〳〵言つてゐる。自分の側へかけて獨りてこそ〳〵何かしてゐるものがゐたので、冷吉は退屈まぎれに話しかけて見たが、返事もしずに向うへ行つてしまふ。それが何だか自分を相手にしてくれるものもないやうに物足りない。さうして例の目を押へてゐても今日もまたどこかへ出かけてまだ歸らないのか、玩具の時計をくれた百姓の男もゐなかつた。あの時計はどこへどうなつたかしらと思ふ。冷吉は氣の拔けたやうな中に再び看護婦に手を引かれて二階へ歸つた。それからまた飽き〳〵する長い時間が暗く續いて

夕飯になつた。

飯をすましてからそのまゝじつと坐つてゐると、もうだん〳〵に暗くなッて行くやうな氣がする。少く共日はとうに陰つてしまッたらしく、部屋の内が晝間のやうでなく冷んやりしたやうに感ぜられた。外をちびた下駄を引き摺つたやうな足音が通つた。今度は荷車らしいものが通つた。その跡は何んの物音もなく、はじめて此處へ來た夕方に感じたやうに一人暗く見捨てられてゐるやうに小淋しい。

「ホヽヽ、さうですか。」ととなりの部屋で何か面白さうに低い聲で言つて年の入つたやうな女が笑つた。何だか自分ばかりが淋しいやうで忌々しい。ふいと晝間小女が來た時にあんなににべもなく追ひ歸したのが冷酷な事をしたやうに考へ返された。がさぞいふから誰だといふとわたしでございます。午まへにまゐりましたが看護婦さんが今日はいゝからといふからその儘歸ッたけれどゝいふのをろくに聞きもしない儘、もういゝから行けと面倒臭さうに言ッたので少女は叱られてもしたやうに、默ッたまゝ悄々したやうに出て行ッた。物を考へてゐるのにこんな薄汚いものがゐては厭だから追い歸したのだけれども、貧乏人の女だからそんなに厭さうにされたら情なかッたらうと考へられる。——冷吉はこんな事を思ッたりしつゝ何となく物淋しく坐ッてゐた。

今日は晝間だいぶ寢たから今から直ぐに寢られもしさうにない。やがて冷吉は何をするためともなく立ち上ッて、壁に傳はッて出口の戸の處へ來て開け閉ての引手をなでたりして見たが、これまで獨りで出入りした事がないのだから探り〳〵外の廊下まで出て見る事が一つの變化を與へるやうな氣がしてそ

のまゝ外へ出て、手擦りを探つて佇んだが、出て見ればやッぱりものさびしい外に何んにも變ッた心持もしない。だれも話をする相手がないからだらうかと思ッて見る。

と、下の方で四五人のものがすたばた爪先で廊下を動き廻ッて何かこそ〳〵ふざけ合ッてゐるやうな容子に見える。くす〳〵と聲を殺したやうに笑ふのは例の百姓の男であッた。何をしてゐるのだらうと思ふと目のおほひを除けて下へ下りて見たいやうな氣がした。さう思ひ〳〵冷吉は何をするすべもないので一足づゝ手擦りに沿うて階段の方へにじッて行ッた。となりの部屋を通り越すとぢきに梯子段の下り口である。するとつととなりの戸が開いて誰かゞ外へ出て來た。

「どこかへ行らッしやいますの。」といふ。

「わたしてすか。」と間を置いて冷吉はさうらしいから聞いた。

「どこかへお出てなさるのなら手を引いてあげませう。けふはお母あさまがお歸りてお一人ださうてすね。」ととなりの附添の婆さんは何てもしッてるやうに言ッた。

「いゝへいゝのてす。こゝにかうしてゐるだけてすから。」と冷吉は言ッた。知らない人間だからそれ以上にいふ事もない。

「あなたお一人てはお淋しうございますわねえ。」といふ婆さんのやうにしんみり言ひつゝ下りて行く。

此近所の田舍の婆さんてもないらしかッた。冷吉は下てはまたがさごそたれかゞ逃げ廻ッてゐるやうてある。冷吉はそれに交りたいやうなさそひ出されるやうな氣になつて少しづゝ階段まで近よッて行ッた。

と、下の方で

「あら、いけない〳〵。そんな處にかくれてゐるのだもの。」と汗ばんだ聲をして不平らしく一人が言ッた。

「フヽヽ。」と田舍の女のやうに笑ひつゝ、だれかしらこそ〳〵梯子段を下りた。

「まゝ！およしなさい、痛いわよお前さ。」

「えゝッいけない。お前さんが今度は目をかくすんだ。」

「さうだ〳〵、罰だもの、わしもさッきどうも此人が捉まらないだから變だと思ッたえい。」と時計の百姓が言ッて、みんなでどたばたあちらへ行ッた。三等室に固まッてゐる連中が小暗い夕方の廊下で目かくしの鬼ごッこをしてゐるのだと見えた。大ていのものが半分は目に繃帶をされてゐる癖にあんな事をしてふざけてゐる。さッきの女は此間から見る下女のやうな女の患者らしかッた。貧乏な心さびしい女のやうだのにと思ふと、あゝして此仲間に交じッてゐるといふ事が餘計に物あはれなやうな氣がするのであッた。冷吉はその儘少らくそこに彳んだ。

もうすッくり夜である。冷吉は蒲團にはいッたまゝ取りともめもなく物を考へた。看護婦が掩法をさ

せて下りて行ッた後はもう夜の十一時の掩法の時間が來るまではまたかうしてたッた一人暗く夜に埋もれてゐなければならないのだ。母はいつ時分歸ッて來るだらう。何だかも早何日も〱母に行ッて了はれた積きて、さうしていくら待ッても容易に二度とこゝへ歸ッて來てくれないのであるかのやうに物さびしい。寢るにも寢られないで仕方がないからいろんな妄想ばかりたどッて行ッて、それから自分の目は遂にどうなるのだらうといふ事に思ひ移る。いッそ兩方の目が少しも見えない盲目になッて了へばいゝやうな氣がする。外はないが、さうなればどんなに物悲しい自分になるだらうと思ふのだ。さうして自分はあのマグダーレンに似たエレーンのやうな或少女にかしづかれると假定する。いつまで經ッても目は見えない。自分が戀してゐる、そして自分を戀してゐるその女の顔をいつまでも見る事は出來ぬ。自分は日の落ちた夕方の張出に立ッてしんめりと暗い悲しい事を考へ續ける。

「もう鳥を寢せませう。また日の出るまで暗く寢せましやう」と自分の女はさびしくさう言ッてそこの柱にかゝッた籠を下ろす。鳥は死んだやうに音もたてずに小さく籠のうす暗がりに縮こまッてゐる。たゞ赤い鳥と聞いてるだけていつまでたッても自分はその赤い姿を見る事は出來ぬ。赤い鳥かい？赤いかいと自分はいつもはじめて聞くやうに、その鳥の色の赤いといふ事を心もとなく疑ふやうに女に聞くのが癖だ。わたしの着てゐる着ものゝやうに薄い赤い色とやッぱりいつもはじめてのやうに女は答へるのである。だから女は、もう自分が取り返す事の出來ぬ目の見えた日の事を戀ひ返す心持に似た、薄い仄かな赤い絹を悲しく纏うてゐるのでなければならぬ。わたしの着てゐる色のやうなと此夕方も同じ事

を答へつゝ鳥籠を下に置いたが、それなりそこに座ッてしまッたやうにじッと何をか考へ入ッてゐる。どうしたの？と自分は暗く聞く。女は何を考へ出したのか、しく／＼と泣いてゐる。エレーンが悲しい暗い妻となッての後のやうにしく／＼と泣く。なぜなくのか。何を考へたのかと自分は聞く。女は何も言はずにしく／＼と泣く。自分も何ともしらず悲しくなッて泣く。と女はすら／＼と背にかゝる髮を戰がせつゝ泣き沈むに、自分の暗い涙はほろ／＼落ちてその亂れた髮にかゝる。悲しいわが戀。悲しい暗い人。」と言ひつゝ女は泣く。――冷吉はさういふ女が得たい。さうして悲しく戀したい。戀いて悲しい自分が見たい。それには自分はこの先々小さい張出（バルコニー）の附いた家にゐなければならぬ。その張出（バルコニー）に出て考へ沈んでゐると下を赤い鳥の籠をさげた小女が通る。女は目の見えぬ自分を見て戀ひる。さうしていつも自分がそこに出て物を考へる時刻に女は鳥を持ッて通りつゝ自分を見る。自分は赤い鳥の女と聞いてその女を戀ひる。――冷吉はかうしてまた物を考へ續けるのであッた。さうしてしまひにはいつものとほりにもどかしくなる。頭が熱したやうに茫となッて、熱が浮いたやうにからだがもや／＼とする。もう忘れなければならぬ忘れなければばもの苦しい。

冷吉はけたるく寢飽きたやうに蒲團をめくッた。何だか外の冷たいやうな中に出てかうした氣分を忘れ紛らしたい。冷吉は堪えられぬやうにそッと立ッて右の方の窓のカーテンを引いた。さうして、掛金を探ッて硝子戸を兩方に開いた。外は暗いのだらうか。何だか自分の頭のせいか夜といへどあたゝかい。冷吉は室を出て張出（バルコニー）に立ッて見たくなッて、しづかに足場を探ッて出た。

星のある夜か、暗い夜かもとより冷吉の知り得るわけもなかッた。たゞ三月の末の或夜の中に立つ自分と思ふだけである。外には目にふれる風もなかッた。冷吉はかうして何をか求め待つために出て來てもしたやうな心持になりつゝ、やッぱり又女と赤い鳥とを思ッた。さうしてしまひに、せめて赤い鳥を飼ひたいと考へ出した。何といふ鳥なのかあの小說には名はかいてなかッたけれど探せばどこかにゐない事はないだらう。どうもさう小さい鳥ではないやうに思はれる。カナリヤなぞよりももッと大きくなければ具合が惡い。けれども鳩のやうに大きくてはいけない。もッと小さい鳥でないと似合はない。けれども第一何といふ鳥なのだらうと考へつゝ冷吉は手擦に傳はつて前の方へ行けるだけ出やうとしかけると、

「あなた、そこは危ないのですからおよしなさいまし。」と不意に隣りの窓からだらう、すぐ後ろからさう言ッて止めるものがあッた、冷吉は自分の耳を疑ひつゝイんだ。それは疾くからもう此病院へは來ない筈の例の赤い鳥に結びつけて考へた、その女の聲なのであッた。

「そこの手擦が腐ッてぶら〳〵になッてゐるのですから。」と約ましくいふ。全くその女である。もうさッき冷吉の來る前から此處に出てゐたのらしいすぐ側に立ッてゐる氣色である。冷吉は何だか自分の空想の續きなのではないかと考へた、

「此處に椅子がありますからおかけなさいまし。靜かないゝ晩です事。」と女の言葉は私語くやうに低いけれど自分に附いてゐてくれる女でゝもあるやうにしめやかにいふのである。

「もう澤山です。あなたのがなくなりなすから。」と冷吉はもじ〳〵する心持を押へるやうにしつゝやッとさう言ッた。

「もうわたしは充分かけてゐましたさ。」と自分の考への中で思ふ女のやうにいふのだ。冷吉は何んにもしらないたゞの子供のやうにしてゐれば女の側へ行ッても何も趣に取られるわけもないのだと考へつゝ、言はれるやうにそちらへ行ッて見た。

「もッとこちら。ね。」探ると藤の椅子の肩に手が觸はッた。

「あなたは何んにもお見えなさらないのだから御不自由ですわねェ。――お母アさまはいつお歸ッて入らッしやるの？」

「いつですか。――あしたでしやう。」と冷吉は極りの悪いやうな氣がして目には見えぬ椅子の肘掛の粗い編み目の間を指先でいぢくッて默ッて掛けてゐた。何か言ひ出したいやうにそわ〳〵するけれども、何を言へばいゝのか別らなかッた。

「お一人でゐらッしてはおさびしいでしやう？」と女はもう心安い間のやうに言ッた。

「あなたははじめからずッとさうして目を閉ッたまゝでゐらッしやるの？」

「えゝ。」と冷吉も小さくいふ。

「それでは皆んな、入らッしやる方のお顔も御存じないわね。」

「えゝ。」

「わたしは？」

「…………………」

「ホヽ御存じ？」

「いゝえ。」と言ひつゝ冷吉は、此女の飼ッてゐる鳥の事を聞いて見やうかと思ッた

女はそれぎりでやゝしばらく默して、目の前に廣がる夜のさまを、何を見るともなく年わかい目に見入ッてゐるものゝやうであッた。冷吉はその內に、いつしかもう極りの惡いのは忘れて、すぐ下の夜のさびしい町筋を一人行く、下駄の音の過ぎるのを聞き追うてゐた。それはどこかの、物馴れた下女か何かゞ、提灯を附けて買物に出て行くのだと冷吉は自分で考へた。と、默ッて立ちつくした女は氣をかへたやうに、

「あなたこちらへ入らッしやいませんか。わたしのところでお話をしませう。ね、いゝでしやう？」

ともう外に出てゐるのにも飽きたやうに言ッた。

「入らッしやいな。」

と女は先に立ッた。どういふ孃さんだかもしらない上に、はじめてものを言ッたゞけなのだけれども冷吉はもう久しく交際ッてゐてもするやうな氣になつて言はれるまゝに行く方を手探りした。

「待ッて入らッしやい。椅子を引ッ込めて置きますから。さ。入らッしやい。」と手を借した。冷吉は入口を跨いで中へはいる。

「ようござんすか。」と女がはいッた。

「あなたのお部屋も電氣が點いてるのでしやう？」と言ひつゝ冷吉は勝手がわからないから這入ッたばかりのところに立ッてゐた。

「そして鳥は？」

女ははいッた後ろのカーテンを直しつゝ、

「わたしの鳥？」と言ッた。

それから冷吉は座ッていろんな話をした。

冷吉が自分の室に歸ッて蒲團にはひッたのは遲かッた。間もなく看護婦が掩法をさせにはひッて來たから、もう下てはみんな寢てゐる時刻なのだ。冷吉は、さッきからよッく寢入ッてゐる續きのやうな振りをしてゐた。

それから本當に寢やうとしたけれども何んだかいつまでも寢つかれなくて、いろんな事を考へた。その内に下の入口に車が下りたけれども冷吉は別に何とも思はずに、ほかの事を考へつゝ熱くろしい寢返りを打ッたが、その車は母が終列車て歸ッて來たのだッた。そろりと室の戸を開いて、何か母の手荷物らしいものを置いて出て行ッたのは受附の大木さんらしい氣色てあつた。冷吉は頭まて蒲團にもぐッて

じッとしてゐた。

「冷吉。冷吉。もう出て口をおゆすぎなさいな。何時だと思ふのどうかしたのかいお前。何ぜ返事もしないで默ッてるの？」

「——ても頭が痛くて氣分が惡いのだもの。」といゝ加減な事を言ッて濁ごして置く。

「それではお前どうても風をひいて熱でもあるのだらう。あんなに窓を開けッ放しにして寢てゐるのだもの。きッとあれて風を引いたのだらうぜ。」と母はこんな事を言ッた。

冷吉は口をすゝぎにつれて行かれるのにとなりの部屋の前を通るのに氣はづかしいやうな心持がした。何だか昨夜あんなに夜ふかしをしたのを母は氣附いてゐるのではないかと疑はれて變に落つかない。やがて朝飯代りの牛乳を飲んでゐる中に、もう今さは診察のベルが鳴るのであッた。冷吉は間もなく母につれられて下へ下りて行ッた。女ももう來てゐはしないだらうか。さうして自分に話しかけはしないだらうかと思ふと、氣がどき／＼する。それと同時に物の話のやうに昨夜の事が思ひ續けられた。じッとそれを考へ入ると、赤い／＼花のさきつどッた甘い日向の中に漬ッたやうな氣分になッて來る。何だか物のなつかしい匂ひがふは／＼と自分を包んでゐるやうてある。自分はやッぱり昨夜の續きに、あすこに坐ッて話をしてゐるやうな氣がしてならない。冷吉は看護婦に名をよばれて暗室に這入ッたが昨夜の

夜を更かした事が、何か目に變ッた徴候を來してはゐないだらうかと急にそれが心配になッた。さうしてる處へ冷酷に此不安を襲ふために院長がついとはいッて來た。もうどうなるものかと思ふ。神經のせゐかどうも目がもや〳〵するやうな氣がする。

「どうですか。」と言ひつゝ院長は繃帶を解いて、看護婦が點したランプに左の瞼を開けた。冷吉は探ぐれるのを隱れてゐるやうに息を殺してじッとしてゐた。

「ふゝーん。どうも相變らず。しかし餘程よくなりましたよ。もう、少し視力が出やせんかと思ふんだが。――此指を見て御覽なさい。見えますか？見えない。こッちを見て御覽なさい火の方を。どうです、茫としてるといふにも先ごろよりは火の影が少し明るいやうでしやう？さうぢやありませんか。」

「えゝ、はじめよりかいくらか違ッてるやうですが、でも昨夜とくらべたら同じです。」

「も一度こッちを向いて御覽。まだぴり〳〵瞳が動くけれども、しかし何ですぞ。あなたのやうに幸運なのはありはしませんよ。どうも不思議なんだ。どうしても此方は失はねばなるまいと思ッたのですがねえ。まづ水晶體が、(黄色い部分ですね)、そいつが脫落してゐないのはたしかですから。――最初はそれが壞れてるやうに相違ないと見たのでしたけれどね。どうも不思議。ま、もッとじッと經過を見ないと。――ほう。傷はもう大抵くッついてるッた。さア。明日あたりはこちらの目が開きますかな。」と診察を了へて院長は出た。冷吉は甘く調べを透がれたやうにほッとした。それから例の椅子にかけてゐる間ちよい〳〵盜むやうに右の目を開けて見た。女はまだ來てゐないやうだ。いつてもしまひ際に人が少

なくなッた機を見て下りてくるのだらうかと考へる。それだから昨日まで、やッぱり此病院にゐるといふ事を知らなかッたのかもしれない。冷吉は女が今こゝにゐないといふ事は自分に取つて都合がいゝやうに思はれた。けれどもどんな女だか顔が見たいやうな氣がして人がはいッて來る度にさうてはあるまいかと胸をとゞろかせては目を開けて見た。母が向うに人の通り路を避けつゝ立ッて此方を見守ッて、ゐるのであッた。

冷吉は診察がすむと歸ッて蒲團の中にはいッてじッと寢やうとしたけれども、もや〳〵と昨夜の事が考へ返されて寢られない。となりて女はどうしてるだらうかと想像して見る。鳥はけふは鳴かない。もうあちらの窓へかけてあるのだらうか。冷吉はそれから昨夜張出(バルコニー)へ出てからの女の言葉を一々考へ拾ッた。一語も漏らさずみんな記憶してゐる。はじめて診察室でとなり合ッてかけた時に自分に言ッた言葉も院長に言ッたのも皆んな覺えてゐる。冷吉は順序だてゝはじめから一々繰り返して見た。さうして甘イやうな心持に少し疲れて來るとやがてうと〳〵となッた。

ふとはッきり目さめた意識に歸ると看護婦が來て母と話してゐた。冷吉はそれには耳を置かずして自分の考へるべき事を追うてゐやうとしたがその中にとなりといふ言葉が耳にはひッたのでつと注意を聳てずにはゐられなかッた。

「それにあちらの方が最も新らしうございますし、こちらの方角も見渡せますてございますからね。お移りなさいましよ直ぐ。」

「さうてすね。だけどまた御厄介をかけますから。」

「いゝえあなた何てもございませんわ。」

とこんな事を言ッてゐる。看護婦が行ッてから冷吉は母に聞いた。

「お母アさん、部屋を換はるの。」

「何、どうてもいゝよ。同んなじだもの。」

「どこへ移るの移れば。」

「何ね、おとなりが空いたからどうかといッて看護婦さんが話したのよ。」

「となりが？いつ？」

「ま何てす、愕いたやうに。」

「いつ空いたのだらう。」

「フヽ、急に小さな聲をするわ。つい今だろ。」

「それてはわたしが寢てゐた間にてしやうか。」

「どうだか。」

と母は何んの聲も知らないものだから、どうてもいゝ事だといッたやうに言ふのてある。冷吉はそれぎ

りて默ッて、了ッた。なぜそんなに欺くやうに急に出て行ッて了ッたのだらうと、出し拔かれてもしたやうなあッけない心持を禁ずる事が出來ない。どうした何なのだらう。昨夜あれだけ話したのに、そんなにもう翌る日になれば行ッて了ふといふ容子は一つもなかッた。何だか狐につまゝれたやうな氣がするのである。たッた一日飼ッてゐてその鳥がいつの間にか逃げたやうなものだ。――冷吉は徒らにその空籠を覗ひて悔しいやうに、物惜しい、落ちつかぬ心持にいら〱した。それではもう來ないのだらうか。拙らない。何だかつまらない。冷吉は物を失くしてもしたやうにくるりと起きて蒲團の上に坐ッた。

「どうかしたの。」と母がいふ。

「なぜ。」

「何か食べたいのかい。退屈なのだろ。」

「そんな事ぢやないんだ。」と冷吉は口の内で言ッて、夢の跡を探るやうに昨夜二人で話した事を考へるのであッた。

午から看護婦が手紙が來たと言ッて持ッて來た時に冷吉は、

「ね村井さん。」と聞き出した。

「となりの人はもう今日歸るといふ事は前から極めてゐたの。」

「どうてしたか。わたしは一向存じませんてしたがね。何だか急なやうてしたわね。」

「そして婆やさんもうゐないの。」

「えゝ。患者の方が先に朝早く出てお出てなして、婆やは跡を片附てるので午まへまでごそ〳〵してゐましてしたが。」

「さうして鳥は。」

「フヽ、何だらうそんなに一々お前。」と母は言つた。

「鳥はどうてございなすか。婆やさんが持ッて歸りましたてしやう。」

「駄目だな。」

「あなた鳥がおすきてすか。」

「だッてあんな鳥はつまらないッて此間さう言ッたじやないか。」と母ははたから言ッた。冷吉はそれぎり默つてゐた。何故あの鳥が赤い鳥て、それを女は此處を出る時に籠から放して行ッて了はなかッたらうと思ふ。

冷吉はやがて何をか失くしたものを探すやうに張出に出た。

「お前さん、危いよそんな處へ出て。」と母は内から言ッた。冷吉は昨夜のはじめからを考へ返しつゝイんだ。さうしてあれは矢ッぱり自分の考への中の事てはなかッたらうかと疑ッた。外は日向のもく〳〵あたゝかい日てあッたけれどじッと此鳥のやうに逃げた女を考へて立つ冷吉には、何だか、かうした日向は物の悲しい心持をそゝるやうに、着物に浸みた。どこかに赤い鳥が自分のかうした、置いて行かれたやうな心を憫れむためにちゝ〳〵となくのが此日向に吸はれて自分に傳はッて來るのではないかと思

はれる。何故女は、これがはじめて會ッた夜て、さうしてあすは芥子の花の落ちるやうにはかなく去ッて了ふ夜だと告げなかッたのだらう。行ッて了ッてどんな心に何を思ッてゐるだらう。冷吉は生れて女といろ／＼の話をしたのは昨夜がはじめてゞある。かういふ戀しい心を敎へたあの女は、自分の話をしたはじめての女である。自分は暗い目に面ざしも知らなければ名も知らない。かうして不意に別れるのが約束とすれば何故名だけでも聞いて置かなかッたのだらうと思ふと、もどかしくもなる。此の心持はマグダーレンの女をたづねて日毎に町をさまよふ男のそれには似てはゐまいか。會いたい。もう一度會いたい。これきりでもう二度と物をいふ事が出來ないのなら、何といふ、女は冷やかなものなのだらう。自分に此戀しさを注いて置いて、女はそれを心にはかけないのだらうか。女は自分よりも年上である。女に取ッては自分はたゞ、女の一夜の話を聞き、自分の話をするために、氣まぐれに撰ばれた一人なのてはあるまいか。

けれども女の言ッた事はいまでも耳に聞くやうてある。その何くれとなくたゞ話した言葉の今耳に浮く心持は、必ずもう一度會ふ、もう一度會ふ日が來ると、此女がどこかにゐて心に言ッてゐるやうに感じられる。會はなければならない。どうしても會はなければならない。小雨のふる日の窓に、赤い鳥の籠を取り入れる姿を見出すやうに、いつか再び會ふ日が來るのでなければならぬ。

「冷さん。」と母が呼ぶ。冷吉はどうしてもその日が來るのだと、もう定まッてゐる事のやうに獨りて考へつゝ、

「何？」と母に返事をした。さうしてそれ迄女は何處かて赤い鳥を飼つてゐるのだと考へたかッた。

冷吉はそれから毎日何處かて赤い鳥を飼ッてゐてほしい、話しのやうに消えたその女の事ばかりを考へ續けた。もう何かその女に關して或事が見出されるような期待を持ちつゝ、戀しい晝と夜とに漬ッてゐたけれども、十日立ッても、去ッた女はそれきり再び歸ッて來はしなかッた。その内に、もう疾くに片方の目は開けてゐられるやうになつた。兩方の目を被はれてゐる間は、早く片方が開いたらどんなにさッぱりするだらうとせか／＼待たれたけれども開いて見ればやッぱり一つては人の目を借りてゐるやうて落附かない。物足りないのは同じであッた。さうしてあれぎり人がゐないて空いてゐるとなりの部屋の日向の中に何かといへば行ッてはいッてゐたくなッた。獨りてあの女の事を考へ返す時にはやッぱりいつまでも二つの目をおほはれて暗い日夜にゐる方が此女を考へるには似合はしいやうな氣がした。暗い目て考へる方があゝした前後もない一と夜をいつまでも思ひ返すのに似合はしい。女はどこにどうして何を考へてゐるのだらう。どんな女でどうした人なのだかも知らずに、たゞ暗い中の影のやうに逢つた女さうして翌る日にはもう去ッてゐない。いつまでもどんな女だつたかを知る期もなく去ッたのだ。たとへもう一度どこかて會ふにしても、自分はいつまでもそれをその女と知り別けるすべもない。戀といふには餘りにあッけない。このやうなのを自分のした戀だといふには餘りに夢のやうてある。やッぱ

りマグダーレンの女のやうに自分の讀んだもの丶中の話しだと思ひたい。さうして女は赤い鳥を飼ッてゐたのだといふ事にしたい。去ッても何處かでやッぱり赤い鳥を飼ッてゐるのだ。一日〳〵とたつにつれて實際冷吉にはすべてあの事がもう昔讀んだ話の中のやうになッて了ッた。冷吉は窓から椅子を入れる女の影を、夕方鳥を逃がすために窓に近づくエレーンを見ると同じに心に畫いた。目に見ぬ女故どのやうに畫くとも差しつかへる事はなかッた。さうして冷吉は活字の上で記憶してゐるやうに女から聞き得たすべての言葉を考へ返しつ丶、下の病室の窓の根の大きい椿の花のぼた〳〵と落ちてゐるのを拾ろッて上ッては張出(バルコニー)に出て女のゐた部屋の窓のふちに並べた。窓は硝子がしまッて内から黒いカーテンがか丶ッてゐるのだから並べた花は向ふの黒い中にもあるやうに硝子に寫ッた。自分の片目を繃帶した眉毛から瞼へかけて傷のついた睫毛の長い痩せた顔もその上に寫ッた。さうして餘ッた花を張出(バルコニー)の手擦りの下に固めて、女の事を考へて甘いやうなもの悲しいやうな日向に向けてゐる脊を白い蝶々がふはり〳〵と飛んだ。も早少しは外へ出歩いてもい丶のだッたけれども、知らぬ小汚い町筋へは出て見たくもない、此張出(バルコニー)があれば澤山である。向ふの家並の後ろからは遠く青い麥の畠が續いて、もや〳〵と陽炎ふ中に菜の花は黄色く烟ッた。四月といへば晝も夜も女を考へ入るに似合ッてゐた。

それは入院してから二十二日目の午後であッた。どうせ長い目なのだからいつまでゐても區切りがない故母は、汽車へ乗る事を許されさへすれば一日も早く宅へかへッてあちらでゆッくり療治がしたいと院長に聞き〳〵して此日出る事を許された。けれどもまだ危ぶんで汽車は一と息に乗り通してはいけな

いといふ條件での上であッた。もう荷物はすッくり下へおろされて車が來るのを待ッてゐた。大木さんも看護婦も時計をくれた百姓も玄關に下りて立ッてゐた。冷吉は何だかかうした段になッてからこんなに急いて此病院を去ッて了ふのが惜しくなッた。さうしてもう一度引き返してとなりの部屋の中にはいッて、そこから窓をあけて張出に立ッた。手擦の取れかゝッた張出には五六日前に母と此あたりの夜店で買ッて來たナスタシヤンの朱黄の花がまだ一つ鉢に散り殘ッてゐた。

「冷吉。〳〵。」と母が下で呼んでゐる。

「え？」と冷吉は上から言ッた。

「どこ？」と母は下から出て、

「おや何ですよ、またそんな處へなぞ上ッて、一寸いと下りて入らッしやい。」

「ねおッ母さん。」

「何？」

「宅へ歸ッたら鳥を飼はふね。」

「そんな事はどうでもいゝから早くお下り。用事があるのだから。」

「さうして赤い鳥を。」と冷吉は心に言ひつゝ、いつまでも下りたくない張出を、殘り惜しく去らなければならなかッた。自分はどうしても赤い鳥を買ッて、それをあの女の紀念にしていつまでも逃がさずに飼ッて置くのだ。それには何だか自分がもう目が暗くないのが拙らない。もう一度暗い目になりたい。暗い何んにも見えぬ目をしてあの女を考へたい。さうしていつまでも赤い鳥が飼ッてゐたい。——冷吉は此やうな事を考へつゝ、わざと、ぐずり〳〵梯子段を下りた。（終）

和歌

尾上柴舟選

若林牧春

○

落日の前にうするゝわが影を見つめてあれば涙ながるゝ

木の葉みな落ちつくしたる林間の明るき光眼に痛きかな

わが心春の光のあたゝかさ明るさを吸ひはなやかに生く

赤盤が泡ふくこともよろこびし幼年の日はなつかしきかな

ひた〳〵と渚をあらふ夕潮の冷たき香より涙さそはる

寝果てゝ人みな去りし室に居て一人さびしく灯をば見つむる

何物か心にみちぬ春の日の明るき空に眼をひらくとき

圓鏡冷たく光る冬の夜の室にさびしく物おもひする

わが右手は神にすがるも左手にはかたくも君が手をとらまほし

○

佐野光雄

辿るべき生の道こそ見出てたれ誰ぞ先立ちて泣きて歩むは

けふもまたひくき机に身をはよす少さきわれをつくらむがため

川舟の七輪の火の美くしさ霜夜の橋の上にながむる

翠かぎり泣かまほしさに來しものをたゞ渚べの波に見入れる

何故にはるばる來しかおなじくば君のもとにて泣くべかりしを

たはれ男と誰ぞいちはやく言ひそめし思へば君に得し名なりけり

泥濘に深く喰ひ込み動かざる車一つの冬の月の夜

○

小出秀月

月出てぬ我が足もとに草そよぐ今宵も一人物をはかなむ

ふり向かば哀しき事もありぬべし只ひとすじに行けよ旅人

十二月黒く熟れたる草の果の風にはらはら鳴るがかなしき

戀せぬ心もいつか眠りゆくあまりに物の靜なる夜は

立ち枯れの白き梢にちらばりて悲しきほどに乾ける日かげ

しみじみと君思ふべく今日も來て安樂椅子に身をもたせけり

ゆく秋の頃より少し覺えたる涙心ぞ尊かりける

冬枯れの草あらはにも影をひく寂しきほどの白き日の色

○ 小澤紫紘

鶯の透き徹る音にふと思ふ梅のつぼみのうすらふくらみ

白き光り室の隅迄流れたる初春の夜のものなつかしさ

眼鏡の度日毎に強くなりまさるこの淋しさに泣かまほしかり

雲雀空に迷ひなく頃故里と別れすべきを思ひさしぐむ

春さびし場末の町の濁りたる下水に少し萌えし若草

それとなく涙さしぐみそれとなくとゞむる母の顏のおとろへ

雪の夜や我れをはなるゝ魂のすゝりなく音をうつゝなにきく

いたはればいたはるゝまゝに面を伏せ默せる君をまぼろしにみる

わかき身の無限の生命うれしみし昨日の我れのなつかしきかな

若きいのち醉へば必ず死をゆめむ悲しけれどもなつかしきかな

知己のごとふと思はれてなつかしう飢えし小犬を抱きてつれきぬ

如月のまびるの雲にひゞきありしづ心なく君思ふとき

涙ぐみ悵然としてたつ人の涙に匂ふ春のともし灯

しらけたる月の光りの微けくもガラス扉透きて母が頰に泌む

わが歌のみすぼらしげに組まれたる活字につどふ

冬の灯の影

疎らなる庭の立木をほの透きて冬の日ざしの室に漂ふ

そゝくさとなすこともなく春に入るかゝるさびしき中に老い行く

○　塚田春愁

ながめやる春のあはれさ空の果て薄むらさきにひく霞など

野路の果て霞のうすく煙れるを見やれば涙とゞめがたなし

かすかにも春のあはれを覚えつゝ若草の上をしづかに歩む

あはれにも生くる命を見まもれば涙のほかになにものもなし

きさらぎの晴れたる空の細き風きゝつゝ永く眼とぢゆきし子

○　武田青眼

小鳥の音ふととだえたる静けさの青き木の間に口笛を吹く

冬の朝日向にあればあな悲し白雲が來て陽を奪ひけり

おごそかに雪を帯びたる山々は一夜のうちに村に逼れり

ふと見れば暗緑色の木の間より圓々として月の登れる

眠られぬ心は月の夜に出でゝ白梅の香に身を浸し見る

○　玉野光一郎

如月の風ぞ冷たく肌に染む離愁の涙またまろび出づ

大川の濁れる水の上に浮く君が館の白きカーテン

宵闇の空にま白く散らばるは星かま白き君が涙か

雪つもる山々薄く紫に昏るゝ夕べの空のあかるみ

○　井田葉歌

しめやかに春の雨降る戸の外に朝の微温がたゞよひてあり

痛ましきわが思出の消えやらぬアカシア枯れし故郷の町

電燈はつとめの如くふと點きぬ戸外に雪は靜かに降りぬ

どよめきの巷の音に溺れつゝ悲しみもせで歩み疲れぬ

夜更けぬうすき蒲團の香ぞにほふあゝわれ旅に寝ねしなるかな

○　細井魚袋

海泣く夜砂山にきてまたわれは國ほろびたる人の如泣く

我が膚に石鹸のにほひまつはれる夕べは安し床に横たふ

白足袋の鼻緒ずれこそかなしけれ君をまつまの砂山のかげ

ほこり浮く机の上に額うづめ自棄の心をしづめんとする

○　正木哲夫

やうやうに夕となりぬうすやみを急ぎ足して故郷に入る

夕ぐれの酒場に走りたはれたる話の中に交るさびしさ

ある時はありのすさびにくかりし君なりけれど忘れ果てけり

あたゝかき蒲團の中に目をつぶり瞬は人を戀ふべかりけり

○　龜山敬外

七人の友のかへりし後のことみ雪の庭につもりけること

十月の山の夕は淋しかり荊棘わけつゝこしやまろうど

潮の音山のかげよりきこゆなる春の夕の遅きくれがた

髪あげて床はなるべくなりそめぬその日頃より咲出し花

○　安井竹美

白ぼけの花にあつまる春の日のなまぬるさこそ泣かまほしけれ

物疲れ身におぼえくるかわたれに光りて散れる花のあはれさ

春の日は蘇枋の花にあつまれり疲れたる眼のやりどころなさ

○　大地夕春

足らはざる心わりなく泊芙藍のうすむらさきをなつかしみけり

やゝ疲れいづこともなく投げし瞳のよりどころなく秋をさまよふ

ともしびの町につかれしわが瞳かへりて白き床を

見つむる

○　神原雨城

眼をとぢて靜に冬に向きあひぬ荒みそめたる若き心に

冬の日はまともに照れりしづやかに眼とぢてわれらしばし佇む

など君は相人のごと冷やかにをり〳〵われにむかひ給ふや

○　伊藤松雄

さら〳〵と卷紙をまく君が手につめたく見入る雪の夜かな

窓により柑子をかめる君が歯の白さ明るう月匂ひ出づ

地震ゆると寂しく云ひて窓あくる君に霧這ふ薄月夜かな

○　廣瀬涼眉

いさゝかの駄菓子あきなふ箱とならび今日も默して座れる女

古びたるミルクホールの看板のあまたならべるこがらしの町

疲れてはけだものゝごと仕事場の板の間にねるわれの悲しさ

○　武田又八

アラスカの冬の海こそ目にみゆれ岬はるかに帆をあぐる船

うす曇る日のうちつゞき南風のかなしみをきく夜となりにけり

○　桑田白水郎

工場の柵のつゞきの柴山に風のうそぶく冬はいたまし

朝の山ゆふべの山にかなしめる心むかひてけふとなりぬる

○　丸山英

金糸雀と音樂入りの目覺時計(めざまし)と置かれし春の朝の枕べ

忘らるゝ戀ならねども格加乙涅(コカイン)を胸に注射し拔き去られなば

○　乾山茶花

はぐれたる心二つがむかひ合ふ窓にしらじら海は光れり

眼とづれば眼にうかびくる少女あり今日もかなしく物を縫ひけり

○　塚田眞

十二月朝をき出てゝ霜を見る心にひそむものゝ歎かひ

水に似て冬の眞晝は音もなしサフランの花の色のにほへる

○　池内啄耳

須磨ゆ見し沖の白帆が其のまゝに三保に浮けるが眸にうつる

○　鈴木風影

蜜柑の樹くらき夕の窓に倚り雪を含める白き空見る

山茶花の白き光にほの見ゆる闇の机の在りどころかな

○　大葉靜二

友を待つそのたまゆらもものの寂し獨りしやがみて砂書きをする

○　村井屏山樓

脛あかき酒屋男の川に來て水荷ひ行く寒き夕暮

けざやけき十二時過ぎの月光にひたりて酒を飲みに行くかな

○　荷田重

弱き身を横たふことを懐しみ只なつかしみ横たへてみる

○　後藤むくろ

霙ふるこの平原のさびしかり雪しらじらと遠山の見ゆ

うら悲し夕べの光そこはかと匂ふがごとく退きてゆく

○　桑田實

めづらかに冬晴れてあり午後の四時町のうしろの山のあかるさ

○　小杉蒼々

海邊より山に來りし女あり南國の唄を疲れずうたふ

○　杉原紫舟

北國のまばらの山と濁りたる空のさかひを風のひかれる

事々にのがれんとする心さへこの頃いたく物を欲りする

○　鈴木風影

かをりなき冬の薔薇の疲れたる小さき花に涙するかな

忍び來て日向の椽の下にねる饑ゑし小犬の冬の悲しみ

○ 上原龍子

過ぎし日に自棄となりたる我心少し悔いつゝ君をも思ふ

○ 鈴木春子

夕ばゆるカンナの紅をそがひにし歌おもひます君がよこがほ

○ 草村晩香

この日頃時のうつるを一々に意識するほど眞面目となれり

應募和歌は東京小石川區原町百三十三尾上柴舟宛の事



引鶴

高田蝶衣選

兜して飯たく士あり鶴の引く　寒泉
法を亂す儒ぞとて斬れば鶴引きし　同
引鶴や洲上の結廬意に適す　同
民に詩のあらば奏せと引鶴に　同
妙絃も流れにしかず鶴を送る　同
邊將の功を錄す日鶴引けり　不寐庵
赦免令夢みしが今朝鶴引ける　同
引鶴の裳に御山判もあらん　同
天女降嫁の傳説や鶴の引く里に　同
引鶴や長卷に伍して詩筆など　木犀
歸心謳ふ鶴眠も筆に更くる夜　同
引鶴の瓢搖に擬す詩調かな　同
灘に浸る日の暈の輪や鶴歸る　同
明日引かん鶴に舊都の朧浮く　摘星辰
大伐採海邊に及ぶ鶴の別れ頃　同

七十餘城謚く降る鶴の引く下に　同
改元を報ず城の鶴引けり　同
鶴歸る頃よりす草染めの里　鬼見愁
引鶴も見て來しが島は不漁に居し　同
狂ひ蚕の催靑を湖に鶴あらぬ　同
この蕃土鶴去ぬに齡増す習　十黄
引鶴や帆の墻ひたる舟も行く　同
引鶴や漁神祭ある日なる　同
治水翁の碑祭る忌日鶴歸る　雨郎
尾越鴨に引鶴も見つ溫泉谷道　同
泊人に戸繰れば江映え鶴歸る　都月
引鶴や宴前に鐘叩く家　同
羊腸先登を誇り待てば鶴歸る　哭鬼哉
空山に此奇觀白鶴の暮色引く　同
歸順すれど懷鄕切や鶴引きて　浪窩
隱棲の愚を悟る頃鶴引けり　同
棚田漸下すれば鶴引く湖に遇へる　徒歩九里
男もす機織の阪地鶴歸る　同
鶴引かんも近きにや沼水の増す　松蓼
慶事傳ふ山添ひの家や殘る鶴　同
酒旗裁つて虻耳にせり鶴去る日　痩脚

南國に來て觀光や鶴去る日　同
曙光吸ふ田塚松高う鶴かへる　冬城
引鶴や濯衣頃知る津の楊　同
城外に王鶻見る日や鶴かへる　枕水
貝の吐く朱樓をさして引く鶴か　同
鶴名殘火なき仙家の藥爐かな　雪骨
聞說鶴驚と寐て歸るらん　同
詩思滅入る時開窓や鶴の引く　五黄
對山の爐と相呼ぶや鶴引くに　同
奮聞出て丶南航す日鶴歸りけり　狼子
爐塞ぐ日長鳴を鶴の名殘かな　同
鶴引きぬ老ひしは天を知りたる乎　夏子
歸る日を忘れたる如し神苑に鶴　同
引鶴や矢間の諸士が靑眼に　百幽
引鶴や峯渡する人々が矢を　同
耳に殘る島司の悲歌や鶴歸る　三石
引鶴に傷卒瘡の快を謳ふ　同
群鷄の喧騷に知る歸る鶴　不逢
曆見しがかゝるよき日や鶴の去る　枯月
引鶴に廬山の話題今日もあり　琳琅居
志に鄕立てば鶴も引き連れて　保赤

引殘る鶴や紫殿の唐紙に　一九兒
會合の約出越やかへる鶴　三鱗
海女草履を並め脱げば鶴浦を引く　明兮
眞水湧く澳の二嶮鶴歸る　橙重
引鶴の古歌の塚あり驛澄みて　對山樓
引鶴や饗宴に古稀の繪師も來て　國郎
磯馴木も聲なき朝や鶴の引く　無哲
詣人記す社務所や鶴引ける　美田
引鶴や萱葺く寺に像も磨く　螺洞
鶴去つて荒陵に緇衣人の來し　竹二
引鶴や宴張れば亭に展望も　一酒

課題
春日　三月一日〆切
燒野山　四月十日〆切

規定
△淡路國假屋在高田蝶衣宛
△一人三十句限△宇體明瞭

評論

露國の對清政略

一

妥協外相イスウオルスキー氏去りて約五月、露國官廷の膨張派、守舊派は又々進取の策を伊犂蒙古に執らんとす、二月十七日我國民を驚かしたる露國の伊犂再占領決定の報道も、亦何の怪む可き所にや、

吾人は此件に關して、先づ至深の同情を清國に寄する能はず、蓋し是迄の露清條約は國境免税區域五十露里を定め、幾多の無税品を約定せる以外に、默許し難き不公正なる束縛を清國に加へ居るものあり、左れば清國が今年條約改訂に際し、公正の本義に

依りて其權利を回復せんとするは寧ろ自然の事にあらざる乎、又一方に於て伊犂方面の露人が明かに條約の規定を無視せる暴横の行爲を敢てする以上、他方に於て清國官吏が報復的に往々條約違反の措置に陥るも、亦凡人の弱點にはあらざる乎、

其れ然り、清國今日の行動は同情するに堪えたり、然かも吾人が同情す可しと言ふものも必らずしも賢明なる行動にはあらざりき、

何ぞや、清國が權利回復を熱望するの極、事を強硬なる談判に止めずして、妄りに條約權を楯とする露國商人を放逐し、其他非禮の行動を敢てし、露人の憤怒を挑發し、少くとも之をして過激的行動を執らしむるの口實を與へたるは、愚人の業たり、李中堂靈あらば、吾人は其必らず地下に哭せんことを恐る、蓋し清國の權威と利益とは常に斯くの如くして毀傷せらるゝを以て也、

二

そは兎も角も、露國已に火蓋を切りたり、兵力微弱の清國は又々屈辱の外無からむ、

而して其結果は如何、第一、伊犂に於ける露國の勢力は振張せむ、抑々も伊犂は一八七一年以後十年間露國軍隊に占領せられしが、一八八一年聖彼得堡條約を以て清國に還附せられたり、然かも地勢露國領たるに適し、其勢力又隆々たり、況んや露國商人が清國官吏の干渉を忌みて之が併合を望む一日にあらざるをや、第二、科布多以下蒙古方面の領事館新設、商業保護問題も恐らくは露國の意の如く定まらむ、而して吾人は之を以て露國の伊犂、蒙古合併政策の一發展とせざるを得ず、

若しそれ清國にして頑固、露人の主張を容れざらば如何、是露人の活動區域を廣大にし、戰爭を見、徒らに伊犂、蒙古合併の期を早めん而已、何ぞ清國の利益を謀るの良策ならん、

あゝ吾人をして無關係なる歐洲の匈牙利人若くはルーマニヤ人の地位にあらしめば、此露清衝突に對し、一箇の興味ある活劇として観るを得ん、然かも同じく東洋に生れ、東洋の水を呑み、同文同學、脣歯の關係も啻ならぬ本國民としては、心竊かに至深の痛恨を感ぜざるを得ざる也、

歐洲の政界

歐洲の政界如何、試みに見む、

墺國はエーレンタル伯の人氣依然高し、然かもヘデルワリー伯が匈牙利首相として擧げ得たる効績には及び難し、蓋しへ伯の力あり、匈牙利政府始めて牢固に、墺匈双方の紛爭問題其跡を潜めたれば也、但し聊か壓制政治の氣味あり、屢々砂上隅語を聞く

佛國は首相ブリアン氏、同盟罷業を鎮壓して以來、勢力隆々たり、但し外相ピション氏の地位動揺す可しとの説頻々として來る、曰く獨露協約の成立を默許せしは、佛國外交の一大失態也、汚點也と、

獨逸は宰相ベートマン、ホルウエヒ氏、外相キデルレン、ウエヒテル氏は共に得意の頂點に在り、評するの要も無し、

露國首相ストリヰピン伯は、露帝の信任篤く、加ふるに議會にては御用黨たる「國民黨」の勢力强く、之も外面優勢也、然かも内部には宮廷派、守舊派の跳梁するあり、排斥運動依然止ます、此間を巧みに游泳する彼れ、亦確かに一英物たるを失はず、

土耳其首相ハッキ、パーシャは憲法無視の攻擊に惱み、羅馬尼亞内閣は自由黨より保守黨に移る（新首相カルプ氏）、勃牙利は土耳其と關税戰爭を開始せんとす、希臘は首相ウエネセロ氏の勢力益々隆々たり、併し長持ては保證の限りにあらず、

米加合併派の活動

米加互惠條約、一月下旬を以て成る、知らず是れ何の意味ぞや、

加奈陀は英米製造品の競爭地也、然るに英品は國家を同ふするの故を以て特惠的關税率の恩惠を受けたりき、左れど距離上の便利は米品に幸ひして、其商運亦駸々たるを見き、思ふに今回の互惠關税條約は此對立せる兩國間に於て、米品の關税を輕減し、所謂特惠關税率に近からしめ、以て米加貿易の發達を謀り英國の不利を來たさんとするものにあらずして何ぞ、

否々、經濟的接近猶恕す可し、然れども此互惠條約の裏には、米國及び西部加奈陀人民が抱懷する米加合併の思想と之を實現せんとする運動、嚴存するを奈何、

倫敦宣言反對

一昨春倫敦に於て日、露、佛、獨、英、伊、蘭、米、墺九國委員の海戰法會議あり、倫敦宣言成る、當時學者齊しく歡呼して言ふ、最初の國際海戰法規、漸くにして定まると、

然かも今や此歡呼は無用の歡呼なりしかを怪ましめんとす、他なし、倫敦商業會議所、グラスゴォ商業會議所、濠洲以下諸殖民地、及び幾多の新紙は反對の聲を擧げ、同宣言が食料を條件附戰時禁制品中に入れ又軍艦自身の安危若くは戰爭の成功に關係する場合に限りて、捕獲中立國船舶を海上にて破壞するを許したるを不滿としつゝあるを以て也、彼等曰く、英國は航海業と貿易とを以て國を建つ、如上の規定の如きは、斷じて船舶の利益を謀る所以にあらざる也と、

食料品を條件附戰時禁制品中に數へたるは、我が日本さへ、日露戰役中に於て敢てしたる所也。蓋し露國の如く食料品を絕對に禁制品視するは非理ならんも、唯「敵國軍隊に向ふものたること明了なる以上」之を禁制品視するは、寧ろ正當にあらざる乎、又中立船舶を海上にて破壞するは、勿論不可なれども、間一髮を容れざる場合に於ては寧ろ止むを得ざる所にはあらざる乎、

些細のことには立てゝは倒し、造りては毀さば、或は恐る、海戰法の發達の期遂に遼遠なる可きことを

西班牙首相の名譽

西班牙首相カナレャス氏以下閣員辭表を捧ぐ、次て皇帝の勅あり、再び留職す、

辭表を捧げたるは、何等政界の危機に基けるにあらざる也、首相の意に曰く、就職後、事意の如く進捗し、行政整理と言ひ、教政改革と言ひ、其最初政綱とせる所、殆んど成れり、依つて事業の段落と共に一應骸骨を乞ひたる也と。

今之を以て大逆事件に關聯せる我國諸大臣の辭職及留職事件と比較す、其面目の差異如何ぞや、政綱を發表しながら、幾度びか之を變更し之を蹂躙せる桂伯とカナレャス氏との逕庭如何ぞや、

獨皇儲優遊中止

獨皇儲ウヰルヘルム親王、黑死病流行の故を以て印度より歸國す、日清兩國民の失望、頗る深し、

然かも此深き日清人の失望も、之を獨逸國民の失望に比すれば猶遙かに淺かる可し、

吁嗟、和蘭殖民地合併問題。――此獨逸の野心を暴露したるエミル、ライヒ博士は昨年來長逝せしかども、野心はなかなかに亡びざる也

露國對波斯

二月上旬、露國臣民兩名、私怨を挾んで波斯大藏大臣サニエッド、ドウレイ氏を殺害す、露國公使、波斯政府に要求して曰く、刺客は露國人也、波斯政府は恣まゝに之を所罰す可からず、速かに之を引渡せよと、民心爲めに騷然たり、

同月中旬、露國、波斯駐屯軍隊を撤去す可きを宣言す、曰く新攝政ナスル、エル、ムルク公新たに來つて國家を治めんとす、露國は撤兵を斷行して、公の活動を便にせんと、然かもアルデビル駐屯軍隊、、形勢不安を口實として、依然舊地に在り、世上爲めに露國の誠意を疑ふの聲高し、

斯くの如くにして、猶露國新外相の所謂波斯人心收攬策を遂げ得可しとせん乎、天下何くにか亦なし難きの事あらむ、

名流凋落

南阿戰爭の雄將クロンエ將軍逝き、英國前海軍卿カウダー伯逝き、獨逸社會黨領袖ジンゲル氏逝き、倫敦畫家ジヨン、ヤクホワートー氏逝く、是等は皆な雞群の一鶴たらざるも、少くとも錚中の錚々たるものなりき、

吾人は之に對して轉た痛悼哀惜の涙を禁ずる能はず願くは社會の新陳代謝を說く進化論者を、吾人と共に坐せしむる勿れ、彼は人の情けを知るものにあらざる也、

排日案中止

米國加州の排日諸案握り潰しとなる、當然の事のみ然かも其理由が該案の不條理にあらずして、桑港が數年後に行はんとする世界博覽會の爲めなりと言ふに至ては、殆んど評す可き言葉を知らず、

但し喜ぶ可きは加州政治家が排日諸案中止と共に日米條約第二條但書（移民に關する）削除反對をも撤回したること是也、蓋し日米條約改正の難關の一は之に依つて消滅したるにあらざる乎、

（以上、懷沙隱客）

先づ冷にして而して後に熱せよ

江塔生

我國民性を以て櫻花に比す、宣長翁の「敷島の」の一咏古來の定案たり、實に其朝日に匂ふ清高の情の愛すべきものありと雖、一雨忽ち開いて一雨忽ち又散る、「三日見ぬ間の櫻かな」の觀に似る薄ぺらにして忽ち激し忽ち號ぶの處是れ甚しき弱點ならずや、江戸っ子は唇頭未だ火を吐かざる間に鐵拳已に他の頭上に飛ぶと稱せらるゝも、是れ獨り鯔(イナ)脊の神田の兄哥のみならず、我一般國民の通有性たるが如きもののあるを惜む。而して之を此頃喧々囂々其極如何に至るべきかを想はしむる南北朝正閏問題に於て見る、一は文部省側に。一は其非難者側に。

京都の近郊に足利尊氏の墓を百打千打したる高山彦九郎は、又即ち三條橋頭遙に皇居を伏し拜みて「草莽之臣高山彦九郎」と涙を鴨河の水に漲らしたる彼ならずや。勤王の志の南北朝の歴史に因つて養はれたる由來日已に久しく、而して其白眼は常に尊氏と北朝とに注がれたり、太平記は物語のみ、正史にあらず、日本外史亦爲にする所ありての作のみ、正史にあらず、神皇正統記は南朝方の股肱の臣親房卿の著のみ、中正を必すべからず、水戸の大日本史は亦偶ま此に出て彼に入り、等しく舛錯を免れずといはむも、而かも幾百年來の皇國の民心は之に因つて陶冶せられ之に因つて鼓舞せられ、忠魂義膽百錬の鐵と雖も敢て斷つ能はざる者の凡てが、之を中軸として其上に結帶せられたるに於ては、動かすこと獨り容易なるのみならず、其動かす事に於て亦直に幾多の損傷を見ずんばあらず。然れども其史見の果して誤れるものある、之をも誤の儘に保存せん事は、即ち一面に於て純正史學を廢滅に歸せしむるの事となる、而かも况んや史實の如何に拘らず、正義の判斷照魔鏡の如き處には民風常に之に繫がつて起る、未だ必ずしも史學を德教の下に屈せしむるを要せざるに於てをや。唯それ一骨節の脫臼と雖も之を整復する輕卒にすべからざると同じく、其施爲の際に於て爲政者たるものは甚だ其念を愼重にせざるべからざるなり。

震雷には耳を掩ふ、而かも群蚊も亦能く雷を成す。

雷必ずしも恐るべきの實あるを必すべからず、南北朝正閏論に就いて今の説を爲すもの紛々、曰く北朝正統説、曰く南朝對立説、曰く南朝正統説、而して其聲の大なるものは固より文部の攻擊側、即ち南朝正統説なるが如しと雖も、玉を暗中に投ずれば人皆目を張りて或は劒を按ず、此際驚くもの多きを常態とするが如く、其腦を日本外史にし其心脾を大日本史にし、それ以外何等の蓄ふる所なき一般人民、即ち非專門家の史談者流に在つては驚かざる却つて奇とするを當れりとすべし、而かも仔細に論者の色別を試むるに此言論偶ま中るものあり、或は北朝正統説、或は兩朝對立説を爲すものゝ多くは、其聲談甚だ揚らざるものありと雖も概じて專門史家に見、而して悲憤慷慨激越堪えざるの趣あるものは往々其圏外の人なるが如し、吾人は之を以て直に斷ぜんとは欲せず、鍛冶の事は鍛冶に問への語あり、而して又廬山に入つては廬山を見ずの語もあり、吾人は只此際一般國民が輕々しく附和雷同せず、先づ冷かにして而して大に熱せんことを欲するものなり。

事皇室に係る、其言議を愼重にせざるべからずと雖も、窃に惟ふに此事たる、賊夫劒を閃かして人の貨財を奪ふといふが如く、奪ひしもの奪はれしものゝ間の關係、一正一非極めて明瞭なるものには非るなり。一を正とし一を閏とする、吾人の頭腦は爲に甚だ明快を感ずべしとするも、其事の爾く單純ならざるに於ては、只其明快を欲すべく、無理矢理に判斷を急ぐべきにはあらず、或は其性質上以て已むべくんば暫く在來の儘にして判斷を下さゞるも未だ必ずしも可ならずとせざるべし。

抑も皇位確認の條件としては、其大權繼承の手續、其神器の所在等、最も先づ考へざるべからざるべきも、大權繼承の事の如きは必ずしも時の天皇の御思召にて定まらざるの例頗る多く、他より讓位を逼り來るが如きは固より、更に廢位の如きも、外戚跋扈の古に在つては往々にして見る處、古くは弘文に於ける天武の如き干戈を以て臨ませ給へるすらあり、安德に對する後鳥羽の如きも、後白河院の御存慮にて定まりたるあり、院政は三條より起りて院宣は詔勅よりも重く、爾來因襲久しきに亘りて以て兩統迭立の初より更に南北朝にも及ぶ、後醍醐の隱岐に移され給ふや、光嚴帝代つて立たせ給へるがこは花園上皇の院宣による、更に尊氏の再擧湊川に勝つて京都に入るや、光明帝立つて主權を行ひ給へるがそは又光嚴上皇の御思召による。院宣を

慣例と稱せる我國史に在つては此事獨り咎むべからず、更に神器の如きも、後鳥羽の安德に於けるが如き、それなくして踐祚し給ひし事實あり、而して光嚴、光明兩帝の際の如きは、大權繼承と相俟つ神器の讓與なきに非ず、只後醍醐帝の苦計僞器を渡し玉へりといふも、之を受くる者の側より考へんか、器の眞僞は容易に知るべからず、由來神器は絕對に神秘のものとして歷代の天皇御親らにも未だ詳には御覽ぜさせられざるの由事は花園帝の御記之を證す。然らば知るべからざるの際先づ之を眞器と信ぜさせらるゝ事普通とすべし、而かも尊氏一降南朝に臣附するの事ありてより、南北朝の媾和となり、北朝の三上皇賀名生の行宮に入らせらるゝあり、僞器も亦南朝の手に歸しぬ、是を以て再び兩朝分立、後光嚴の即位となるに及んでは北朝は全く神器を缺くに至りぬ、其他尙ほ紛紜百端亂麻の緒容易に見出し難きが如きものあり、之を法理的判斷に訴へんか、或は終には南朝正統說に歸すべしとするもそれに到着する頗る途の曲折なるもの存するを疑はず、更に又前後の行掛りより、持明院大覺寺兩統の御心事を揣摩し奉れば未だ一概して孰れに同情すべきかを知らざるものあり。當初に泝りて後嵯峨の獻旨に重きを置くべきか、將だ兩統迭立の約調ひたる時の議に重きを置くべきか、其大覺寺持明院の兩統にも更に末に至りては後伏見、花園、後二條、後醍醐と大權繼承の四皇統の並存を見たる如き、其間の關係頗る議すべきものあり。事端益々紛糾を重ぬるを覺ゆ。之を嚴正なる法理的眼光に照さば正閏果して如何、之を斷ぜんは可し、斷ぜんには只此の如きの委曲を盡さゞるべからざるを知つて後ならざるべからず、然らずして徒に傳習に捉はれ愛憎の私に因つて感情的判斷を恣にするあらんか、其民風を害する事なくんば倖なり。主權不可分を唱へて兩統對立を否認するものあるも、不可分は政治の本義たるべきものにして之を以て過去の事實が盡く此本義に合し不可分ならざるべからずとするは不通の說のみ、偶ま此本義を持して以て將來を戒むべけんも、過去は過去のみ、去年の頭痛を今病む譯には行かざるべし。とはいへ臣下の忠否は必ずしも此正閏には拘らず、私に殉ふ者と公に奉ずるものと其間斷乎として箇の曖昧模稜を許さず。精察周思せば尊氏の依然として彥九郞の鞭打を値し、楠公の騎馬像の依然として皇城を鎭護すべきを悟らん。言冗に涉るが故に略す。

吾人の所懷は大凡此の如し、故に輕卒なる操觚者流

の容易に咄々怪事を叫び、其極議論に先だつに罵詈を以てし「腐儒を國外に放逐すべし」など怒號するには與せず。とはいへ又文部の當局が兒童に與ふる教科書に迄昔日の信念を一變すべき迄の明斷を如何なる爾く信用すべき史實と史眼とによつて得來れるかを知らず、眞平に一大鐵案の動かすべからざるものありとせば可し、之を兒童に強ふるに先つて先づ大に其素地を作るべく、弘く社會の智識階級に是認せらるゝの愼重なる用意と周到なる手續とを缺けるを遺憾とす。是れ骨節の脫臼を治するに先づ其準備なき荒療治を施すものにあらずして何ぞや。國民信念の移動は諸公が鏡面に向つて其髭のスタイルを改むるが如きものにはあらず。想へ竹外の「眉雪老僧時輟箒」にても、鐵兜が「露臥延元陵下月」にても、只一わたりの吊古の感に止まるものにはあらず、決して支那人が「南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中」を唱ふるの類に非るを、吊古の裏に悲憤あり、而して氣節あり、是れ絕唱を爲し易きのみ。此大信念にショックを與ふるを尋常髭毛の上下と同一視するを得べけんや。兎もあれ大國民は須く先づ大沈靜あれ、而して後大怒號あれ。

新刊批評

▲平安初期裏面より見たる日本歷史

久米邦武著　讀賣新聞社發行

史學の造詣深く而して獨創の見識に富み、常に新解釋新光明を與うるを以て稱せらるゝ博士の此著である。期待に違はず、內容は殆んど盡く前人の未だ嘗て想到せざる處の者で充ちて居る、名の示す如く此書は、外面の形體に就いて只觀察するよりも、先づ其形體を包む若くは現れしむる背面の觀察より始める、即ち打見たる處甚だ微にして而かも力甚だ大なる婦人の勢力、關係等に思を凝して、他の尋常の歷史ならば只一事は一事、斷片的の出來事とのみ見えるものが、此書に於ては切つても切れぬ、細くして甚だ短き一系の糸に繫がれて居る。特に日本の在來の歷史は時間の觀念に疎く時代流外の出來事が平氣に同一人の逸話として揭げられて居る類が、博士は常に之を經として綿密に研究されるので、僧正遍昭でも小野小町でも古來の傳說の妄を發いた處が甚だ多い、加ふるに話樣甚だ趣味あり、行文亦流麗だから、獨り机上に置くべきのみならず又枕頭にも伴ふべき讀物である。（定價金壹圓）

▲宗教と學術

松本文三郎著　隆文館發行

全篇二十六、博士が從來時折世に發表された多くの論文を集めたもの、其大部分は宗教に關するもので占めて居る、精到な研究、周密なる論旨、思想の糧にすべく一讀すべきものである。（定價金壹圓二十錢）

▲法然上人

須藤光暉著　金尾文淵堂

法然上人の傳記としては一寸委しいもの、卷末に尙ほ上人の登山狀が添えて在る、卷首に繪畫やら眞蹟やら、景色やらを木版、銅版、コロタイプ版、寫眞版等で約四十枚前後も附いて居てHまぐろしい感を與へる。（金貳圓）

▲教師の覺醒と其修養

三澤糾著　啓成社藏版

昨年の地方の夏期講習會に臨んでの講演を集めたもの、穩健の一語全體を掩ふべしてある。（定價七拾錢）

▲基督抹殺論

幸德秋水著　丙午出版社發行

本書は大膽にも基督の史的にあらざるを斷言し尙又十字架の徽號は生殖器の表號の變化てあるといつて居る、細評は精讀の上にする、兎に角獨創の見として讀むべきてある。（正價金七拾錢）

▲非社會主義

大塚普太郞著　東京堂出版

社會主義と共產主義、無政府主義等との別を辯じ、凡てに亘つて破邪の筆を執つたもの、然し餘りに簡明を欲した跡があつて議論の尙ほ詳密を缺くを惜む、とはいへ此方が却つて一般の讀者向きか知らぬ、附錄の著者の北米に於ける健鬪記は面白い。（正價金七拾錢）

四月一日を以て發行すべき春期大附錄號の內容は本誌卷頭の豫告に詳か也

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税拾錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵税共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は**本郷西片町十番地反省社**と指定し拂渡局を**東京東片町局**と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は**東京三十四番**なりこれにより御送金の方は**登記料壹錢**を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず認まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十四年二月廿五日印刷納本
明治四十四年三月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

發行所 東京市本鄕區駒込西片町十番地 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場